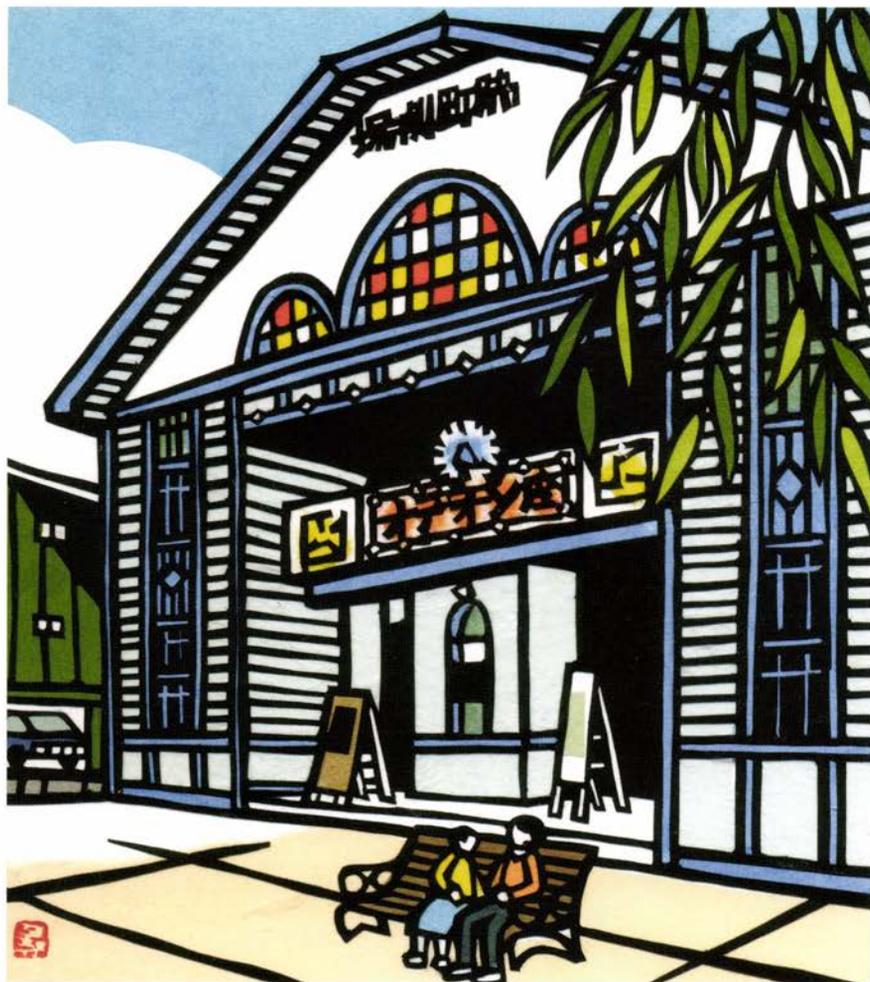


川柳塔

平成三十年十月一日発行 前月一日発行
創刊大正十三年 通卷一〇九七号



日川協加盟

平成三十年度 六賞発表

No.1097

十月号

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生葎乃作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四一二九八四七九番

1講座90分、全40講座をお好きなものから受講できます。

心理学基礎コース

フロイト、ユングや話題のアドラー心理学、箱庭療法やカラーージュなどアート系の学び知りたかった「こころの不思議」を学べます。



箱庭療法の講座で実際に作ります。

経験豊富な講師陣から、心理学の基礎を見て、聴いて、声に出して、全身で体感しながら学んでいただけます。
初心者の方がたくさん来られる講座です。

無料体験講座お申込み受付中

心理学基礎コースや、こころ学びのことがよくわかる無料体験講座を実施しています。下記URLまたはQRコードから、お気軽にお問い合わせください。

<https://www.ksc.or.jp/?p=6421>



お申し込み・お問い合わせ

公益財団法人 関西カウンセリングセンター

TEL 06-6809-1225 FAX 06-6809-1226 MAIL koza@ksc.or.jp

H.P. <https://www.ksc.or.jp> 関西カウンセリングセンター | 検索

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-6-8堂島ビルディング5階

▼京阪本線・地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」①番出口より北へ5分

▼京阪中之島線・「大江橋駅」⑤番出口より北東へ3分

第72回青森県川柳大会

小島 蘭 幸

東奥日報社発行の青森県文芸大会七十周年記念誌「あゆみ」には、短歌、俳句、川柳の歴代の選者と特別選の秀句が掲載されています。川柳では、私の憧れの川柳作家がずらりと特別選をされています。

麻生路郎、中島生々庵、橘高薫風、西尾菜、八木千代、河内天笑、新家完司、川柳雑誌、川柳塔の歴史も深く刻まれています。

弱肉強食鱈皮の抱持ち

薫風

第16回昭和37年、麻生路郎選「雑詠」の天位の作品です。当時の雅号は薫風子でした。

みちのくもさいはてここで石拾う

甲吉

第33回昭和54年、橘高薫風選「石」の天位の作品です。工藤甲吉さんは、長い間、川柳塔社同人として活躍されました。麻生路郎選から橘高薫風選、青森文芸大会の歴史の重さ深さがしみじみと伝わってきます。

東奥日報社、東奥日報文化財団主催の第72回青森

県川柳大会は8月19日、リンクステーションホール青森で開催されました。私は特別選者として「句碑のお山と川柳大会の思い出」と題してお話をさせて頂きました。

天 コンビニで太宰のふくらはぎと会う

省 悟

地 国旗掲揚去年は出来たスクワット

敏 子

人 蛭売り聞こえる町で母になる

州 花

特別選「雑詠」の私が選んだ三才の作品です。

尚、総合一位は高瀬霜石さんでした。

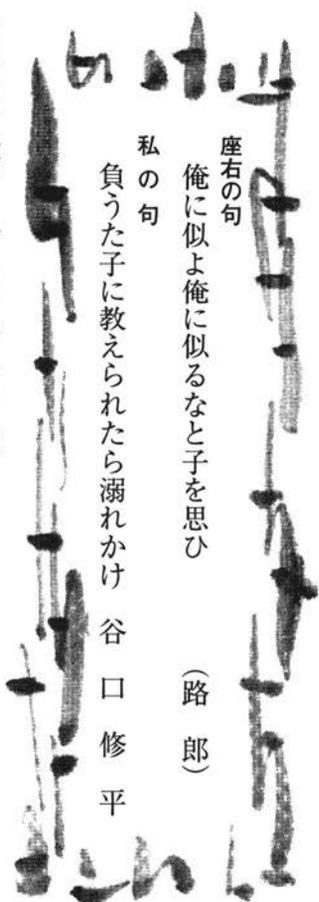
夕食会、昼食会、大会、懇親会、二次会、三次会、ねぶたの家ワーラッセ見学と、とても楽しい二泊三日の青森の旅でした。

9月6日発生した平成30年北海道胆振東部地震は北海道に甚大な被害をもたらしました。

多くの尊い命が失われました。哀悼の意を捧げますと共に心よりご冥福をお祈りいたします。

被害に遭われました方々にお見舞いを申し上げますと共に一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

川柳塔社



川柳塔 十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「榛原旧伊勢街道」

■巻頭言 第72回 青森県川柳大会	小島 蘭 幸	(1)
川柳か俳句か	水野 黒 兔	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ^⑬	木津 川 計	(42)
橘高薫風句抄		(43)
自選集		(44)
句集の森		(47)
温故知新		(47)
水煙抄	西 出 楓 楽 選	(48)
誹風柳多留一二篇研究 ⁶⁴		(66)
平成三十年度		(68)
英語 de Senryu ^⑳		(77)
愛染帖	吉村 侑 久 代	(78)
檸檬抄 「返す」	新 家 完 司 選	(82)
	川 端 一 歩 ・ 山 岡 富 美 子 共 選	

川柳か俳句か

水野 黒 兔

三月の甘納豆のうふふふ

坪内 稔 典

じゃんけんで負けて蛭に生まれたの

池田 澄 子

いずれも有名な俳句です。では次の句は俳句でしょうか、川柳でしょうか。

桜散るあなたも河馬になりなさい

喧噪を抜けカバを見に五百円

カバといふ語感がすでに春である

昼月を齧りキリンの春の夢

一句目は坪内稔典の俳句、二句目は黒

兔の塔誌に載った川柳、三句目と四句目

は手前味噌で恐縮ですが黒兔が本名で投

句し角川の「俳句」誌に掲載された俳句

です。

右に川柳という円を描き、左に俳句と

いう円を描き、二つの円を近づけると真

ん中にレンズのような部分が現れます。

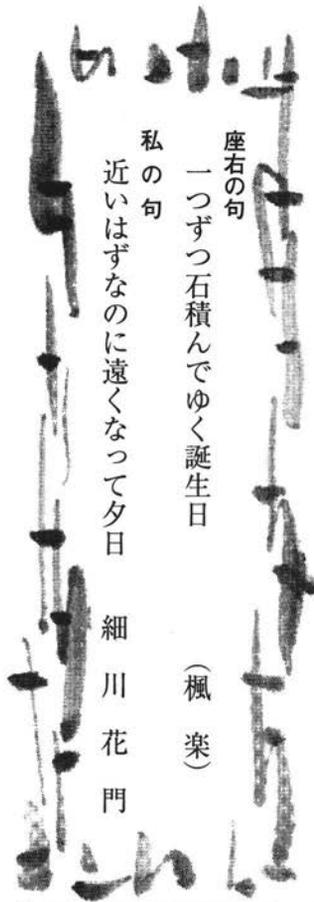
このレンズの部分が川柳と俳句の境界部

分で受け取りかた次第で川柳と書いた

俳句と受け止めたりできるのではないで

しょうか。

せんりゅう飛行船 ⁽⁹⁴⁾ ……………	新家完司……………	(85)
一路集(「ネット」……………)	川崎ひかり選……………	(86)
初歩教室「びったり」……………	杉野羅天選……………	(87)
川柳塔鑑賞……………	居谷真理子……………	(88)
水煙抄鑑賞……………	平井美智子……………	(90)
■エッセイ(川柳塔なら20周年を迎えて その沿革)	安福和夫……………	(92)
『麻生路郎読本』余滴 ⁽⁴⁸⁾ ……………	中原比呂志……………	(93)
インスピレーション・ナビ 印象吟……………	栗原道夫……………	(94)
川柳塔碑合祀祭実施要領……………	大西泰世……………	(96)
創立95周年記念事業基金御芳名……………	……………	(98)
九月本社句会……………	……………	(99)
句会燦爛……………	……………	(100)
各地柳壇(佳句地十選/栗原道夫・矢倉五月)……………	弘津秋の子……………	(104)
川柳塔WEB句会「窓」……………	……………	(105)
十月各地句会案内……………	平 宗星・栃尾奏子共選……………	(118)
柳界展望……………	……………	(120)
■編集後記(ひとこと/山根妙子)……………	……………	(122)
……………	朱夏・勝弘……………	(124)



座右の句
私の句

一つずつ石積んでゆく誕生日
近いはずなのに遠くなって夕日

(楓 楽)

細川花門

以下に、私の個人的な解釈で恐れ入りますが有名な川柳の中で俳句的雰囲気のある句を列挙し、同じ雰囲気の俳句を並べてみます。どちらが川柳でしょうか。

風蘭や御僧の挨拶掌を合せ
風蘭に隠れし風の見えにけり
白蝶入り黄蝶出て来ぬ寺の門
牡丹百二百三百門一つ
夕桜名もない橋を渡って来
したたかに水を打ちたる夕ざくら
以上いずれもゴチックにした最初の句が川柳で、順に葉、薫風、路郎の川柳です。俳句の作者は順に後藤比奈夫、阿波野青畝、久保田万太郎です。

川柳的滋味をも私が感じる俳句を紹介します。

人類の句の土偶のおっぱいよ 澄子
見えぬ眼の方の眼鏡の玉も拭く 日野草城
また冒頭に記した坪内稔典の甘納豆の俳句は一月から十二月まであり、そのうちの最初と最後の句を紹介しておきます。

一月の甘納豆はやせてます
十二月どうするどうする甘納豆



小島蘭幸選

松江市 石橋芳山

下半身静かに流れ出している
フクロウが0番ホームから飛んだ
逆立ちに前転空は変わらぬ
ゆらゆらと何を言わんとして鬼火
使い捨てですねと雑兵とティッシュ
ちっぽけな器が愛に飢えている

岡山市 永見心咲

異口同音まるで練習したように
むつかしい話は嫌いポプラの樹
人間を生きていますと手を挙げる
シャンシャンは笑わなくても客を呼ぶ
奇遇だな坂の途中にある出会い
順調に老いてすいすい赤蜻蛉

米子市 吉田陽子

まだまだと神は手綱を緩めない
五十年夫婦にほしい力水

老々介護愛がこんがらがったまま

抒情詩の中が嵐になって来た

荒行が続く猛暑の台所

家風呂の贅沢被災地を見ては

西予市 西田美恵子

大丈夫まだ優しさが分かるから

いい人のまんまでさよならがしたい

怒ってる時は天ご盛りのご飯

ブレーキを踏む日アクセル踏みたい日

極上の恋 極上の別れ方

よっこらしよと亡母が来そうなあの世から

篠山市 酒井真由

リーダーが素敵大きな輪になった

浅からぬご縁往復書簡など

他人事でない恋の鞘当て

しゃぼん玉とばしつづけているいのち

扉いちまい冷房の内と外

出水禍の地に炎帝の容赦なし

岡山市 工藤 千代子

石ひとつ捨てて仲間輪に入る
笑っては話せぬ雨が降りやまぬ
一歩退くと炎は消える雨は止む
雨やと止んで命を干している
少しづつ荷物を分ける午後になる
一日に一句眠り薬のように生む

河内長野市 山岡 富美子

かなかなの鳴き声炎帝に翳り
並走をしている体温と気温
穏やかな一日チャンネルに触れず
鏡からたまには櫛も飛んでくる
かき氷見るとにっこりしてしまう
遊んでと我が家に金魚やって来た

米子市 竹村 紀の治

本当を書く日記が続かない
風紋は昨夜のことをよく喋る
写経した机で夜はおでん鍋
健やかに生きております加齢臭
自分では静かにかけている電話
おだやかな人に戻った年金日

大阪市 谷口 義

忘れたのか覚えてなかったのか
好い加減なことは好い加減で終る

正におっしゃる通りのおばあさん
そんなこと私言いましたでしようか
秋へ秋へと待針を打っておく
目を見たら諦めてないのが分かる

大阪市 栃尾 奏子

唇も林檎も恋も秋の赤
切り札があるのでモナリザは微笑
溺れようあなたと罪の深さまで
袋小路それでも一緒ならいいな
最果てで青は一つになるでしょう
歳月がそろそろ私許す頃

尼崎市 山田 耕治

亡き妻の分も生きていく力
油虫よこの家の主婦はもういない
爪の形似てると父をよろこばす
神様に二十四時間ずつもらう
朝ドラを夫が呼びに来てくれる
一合のお酒はじいちゃんの薬

札幌市 三浦 強一

水害救助汗まみれ泥まみれ
腕の蚊を許す母親の命日
飢餓の子を救えられぬフードロス
青春も老春も酌むビール園
会話には妻通訳の遠い耳
終章は収支とんとんなら可とす

寝屋川市 伊達郁夫

打ち水で小さな虹を架けてみる
丁寧に磨いてみれば愛だつた
連れ糸ほぐせば唯の糸になる
旨そうだきつと体に悪いんだ
人生の午後です私急ぎます
命名の筆に宇宙を泳がせる

鳥取市 岸本宏章

神様の声として聞く避難指示
わが町からも名前が消えた銀座街
家中に手摺を付けてどっこいしょ
議員数増とはなんだ今の世に
災害の弱者ばかりの町になり
被爆地の知事の言葉が分かりよい

鳥取市 岸本孝子

拉致の子を乗せたい政府専用機
被災者に空き家貸出す知恵もある
異状気象皆で汚した地球です
お返しは大好物の酒とする
無い物ねだりしなけりや生きていけそうだ
着飾って趣味のはしごで若返り

松原市 森松まつお

激痛に耐えきれず呼ぶ救急車
折り曲げた足が痛くて伸ばせない
歩行不能そんな恐怖がふとよぎる

治まってつくづく妻のありがたさ

体調の不良へ酒もひかえとく

クーラーの冷えすぎ少し怖くなる

鳥取市 山下凱柳

猛暑続く夕立恋し虹見たし

半分愚痴半分本音エンドレス

何よりも効くのは妻の笑顔です

良妻賢母演じ続けてダイヤ婚

夫婦喧嘩どっちもどっち五分と五分

棚上げと言ったのに妻蒸し返す

三田市 堀正和

くり返しテレビ見ているいいニュース

水やりに疲れ夕立待っている

病院の待合室で株談議

打ち水が迎えてくれるハモ料理

通知表抱えて孫がやって来た

墓参り涼しくなつてからにする

宝塚市 田中章子

父さんの背中に教えられて今

母さんに言われたことで生かされて

今だからの話が続く盆集い

たつぷりと子へ孫へ話しておこう

経を読む正座の足はすぐぐずれ

幸せはどちらの母も好きだった

東かがわ市 川崎 ひかり

五羽全て巢立ち淋しくなった軒
生き辛いひと日遮光の部屋ごもり
猛暑日はぐうたら病におつき合い
何だつて言えるさ他人事なもの
台風情報亡夫が居たらと雨戸繰る

松山市 栗田 忠士

希望的観測なんて無責任
薔薇と鬱が書けて自信が湧いてきた
ガンが消えたなどと読む気をそそる本
夏痩せが医者に言わすとちようどよい
この猛暑アリモエアコン欲しかろう

松山市 古手川 光

過重労働少し休ませろとエアコン
異常気象異常でなくなる恐さ
逆走は車だけだと思つてた
大洪水の被害母校を見る辛さ
一人で三食何を食べても美味くない

松山市 宮尾 みのり

こんなにも茄子が美味だと思つた夏
あらいやだ夢では若い日のわたし
泣き言は止そうすつきり眉が描け
少年の初恋何故かほつとする
あの昔手塚治虫の脳回路

松山市 柳田 かおる

美辞麗句ばかりで風になつていく
振り向きはしないゴールが遠くなる
ソプラノになつた吹っ切れたのですね
どん底で視えたほんとうのココロ
恋人のようにスマホの依存症

大洲市 中居 善信

かわいそう金魚掬いはまだしない
身についた垢は綺麗に落とさねば
馬の足くらの役はやつて来た
切れ味が鈍つてしまふ炎天下
告白のチャンスはあつた映画館

西予市 黒田 茂代

たつての願い叶つて二回目の知覧
時間の許す限り遺書の手紙読む
ほんとは無念だつたら一度きりの命
魂は失せず知覧の蛍たち
せつない句しか浮かんでこなかつた知覧

高知市 小澤 幸泉

八月の空は戦を呼び覚ます
開いて結ぶ握つた両手離さない
とおい日の祭り高知で聴いている
祭り好き喜寿を過ぎてても変わらない
本当の歳は皆で消している

土佐清水市 辻内次根

北九州市 小松紀子

老人性楽しかったり沈んだり
猿真似をしてから元に戻れない

無農薬まつ赤なトマト孫が食べ
百均は心のせんたくしてくれる

太陽に透かせば枯れた私の手
幸せな時間ばかりの花の世話

院内トイレたまに流さぬお方いて
明日じゃない今から始めるダイエツト

何の道を行ったとしても日が暮れる

ふかぶかと頭下ければ終わりですか

熊本県 岩切康子

唐津市 坂本峰朗

雷一発ひと雨貰い我息吹く
血圧の安定強歩少しずつ

計報欄から一日が動き出す
異常気象無事を聞いたり聞かれたり

酷暑の昼眠った後は夕仕度
対談の優しい方で予約する

涙腺も前立腺も故障する
五十年ワイフに勝るものはない

熊本市 杉野羅天

唐津市 山口高明

愛車入院僕の体も病んで来る
野草咲く踏まれ潰され清く咲く

壇上の空咳威厳しめされる
五機分もあれば捗る復興費

災害討論自己防衛などと言ひ
真つ青な心して訊く癌告知

風をよむおとこ腕くむ船溜り
色丹へ年に一度の墓参り

沖繩県 森山文切

札幌市 小沢淳

神様が本気になつてゐるかるた
思い出を撮り溜め重くなるスマホ

朝晩にのめと言うだけ指導料
反逆の裾野を笑う虚子秋櫻子

白米のかたちに生えた永久歯
階段で踏んでしまったコガネムシ

いかさんま消えて近海異変あり
司馬遼の明治という国家を捲る

退去日も残響消えぬ空の部屋

男鹿市 伊藤 のぶよし

蛭も蟬もあつさり逝つて夏がゆく
彼岸なら其処 後はゆつくり参ろうか
恩返し何と言つても論吉だな
鬼は鬼改心してもしなくても
だいじょうぶ笑顔の在庫たんと有る

青森県 松山 芳生

地吹雪も夏の暑さも着る津軽
天窓の月のあかりを着て眠る
チャンス到来風が背押す一馬力
雑草のおたけび学名所望す
今生の記念に植える白木蓮

弘前市 浅田 隆樹

お堀には蓮が満開アイス売り
知らぬ街疲れを知らぬ一万歩
夏限定透ける青さの純米酒
山車よりも笛吹く美女に目が留まる
境遇が似ていて弾む同期会

弘前市 稲見 則彦

炎天下それでも蟻の定期便
沢蟹を採って遊んだ日の記憶
大接近火星人から覗かれる
ちちははに当てた念書の数知れず
少年の夢の欠片の浮いた海

弘前市 今 愁女

武者ねぶた海上ゆらし夏が逝く
穏やかな暮し雑草刈りのノルマあり
付度なしの異状気象が多過ぎる
玄関にスニーカ並び秋清きよか
煮魚がおいしいしおいしと立秋なり

弘前市 高橋 洋子

スマホでは探せぬ母の知恵袋
母の哲学笑い飛ばせる七回忌
腹時計だけは狂わぬ飯三度
肩書きひとつ老いの気骨を支えてる
幸福度妻の背中に見る温み

塩竈市 木田 比呂朗

右脳から作句の秋を拒否される
食欲の秋を遮る検診値
ごめんねで留守番つづく昨日今日
ドライブの予定に保険期限切れ
ネタ切れを埋めてくれますワイドショー

東京都 川本 真理子

クラス会今ならできる話聞く
すご腕の気配だけでもかもし出す
古本は他家の匂いをまださせる
かわいいと思つた方の負けである
おばあさんの未来にもそれなりの夢

八王子市 川名洋子

朝霞市 前田洋子

寂しさを胸に取めて送り出す

半分こして食べたよね 淡い恋

猛暑には嬉しい夕餉冷や奴

薄味で素材を生かす妻の腕

一匹の蚊を追いかけて朝になる

横浜市 菊地政勝

共白髪いやだと言つて染めている

終活の話になると乗ってくる

板の間の昼寝唯一の耐暑法

高望みしぼんで余生あるがまま

失言を本音ととれば腹立たず

さいたま市 星野育子

そして不祥事は囓い話になる

昭和っ子三角食べが治らない

江戸っ子は粋か野暮かをまず思う

好物で損失余命気にしない

始発より女性が好きな最終便

上尾市 中村伸子

土偶土偶これ私ではないかしら

季節外れの桜餅など食べません

ななつ星まだ来ませんね招待状

予定なしそれでも美容院へ行く

豪華ランチバランスをとる鮭茶漬

縁日は古稀を子供に変えに来る

夏まつりよさこいの足空を蹴る

掛け声に鳴子に花火音消され

コンセント欲しい所に付いてない

大袈裟にほめて申し分けにしかる

富山市 島ひかる

二人居へ黒部スイカを持て余す

大接近火星に居ない宇宙人

持て余し庭木十本切り倒す

満月を愛でるすつきりした庭で

記録破りの猛暑を知らぬ鱗雲

可児市 板山まみ子

食糧難決して忘れぬ終戦日

一言に十返されて苦い水

それなりの合宿もある草テニス

若者は言わないらしいまずビール

力尽き今年も行けぬ甲子園

愛知県 早川遯行

フラッシュがお嫌い奈良の仏さま

ピザパイを五等分する難しさ

追いつけぬ背中苦々しく眺め

川柳と車があつてまだ元気

食べて寝るだけのパンダを見て飽きず

山寺へ一〇五段登りきる

犬山市 金子 美千代

出羽三山少し穢れを落とせたか

身に余るお誘い五歳若ければ

太陽が凶器になって肌を刺す

40度超えメダカもお湯の中で耐え

犬山市 関 本 かつ子

災害も猛暑も耐える日本人

来てよとも言えぬ名古屋の四〇度

前向きになると自分を取り戻す

七十と七十五には見えぬ壁

耳栓をして広島を出る総理

鈴鹿市 小 河 柳 女

真夏だなふにやけて立っている山だ

からりからりと回ってる脳である

友が来るむかしむかしの花が咲く

ひと言でポキンと絆切れました

列島を貫くものが失くなった

大阪府 米 澤 俣 子

亡母の歳越えて煩惱まだ消えず

免許返納遅らせば良かった酷暑

アバウトなひと日人間休みます

インスタ映えもう気にしない手前味噌

ポランティア魂猛暑の被災地

半分は死んでいますと御挨拶
誰かれも猛暑の中で黒光り

孫が来るカプトアサガオ供に連れ

孫が来る老いの試練か夏の陣

運動量増やしてばあば筋違え

大阪市 内 田 志津子

記念日に写真館ありいい昭和

亡母の歳越えてゆらゆら歩が緩む

歯科治療想い人には見せられぬ

ここだけの話と言われ貝になる

廃校を救う過疎地のランドセル

大阪市 宇 都 満知子

スマホ操るあの時この時のシーン

待合室読書佳境に名を呼ばれ

おばあさんの自覚は胸の中心に

息が切れるほど走って乗ったバス

洗濯食事嵩が減りました二人

大阪市 江島谷 勝 弘

葬送曲「街の灯り」に決めました

話ベタキヤッチボールも苦手です

頭上がらぬ好きなことばかりして

飲み仲間黙っていても寄ってくる

温暖化本気で止めなあさまへん

大阪市 榎 本 日の出

年金で辛抱覚え貯金せず

怖いのか誰も叱ってくれませぬ

買物も余命が浮かぶ歳となり

コーヒーも玉露も缶で済む世代

後ろ姿一度ゆつくり見てみたい

大阪市 榎 本 舞 夢

年甲斐も無く張り切り過ぎて寝込んでる

休養中反省しきり良いチャンス

元氣な内会いたい人やしたい事

クーラー潰け四苦八苦する五七五

句会済み後は先祖の墓参り

大阪市 大 川 桃 花

ネガティブな猫を一匹飼っている

相変わらずトンネル長いタイガース

三選へ言葉少なくなる総理

働かぬ脳に氷を首に巻く

揃いの浴衣祭り気分が盛り上がる

大阪市 大 治 重 信

老い二人夫婦喧嘩を楽しんで

幸せを凹んだところで掴んでた

百までは生きていたいと預金見る

七人の敵に向かわん衣替え

切株を半分ゆずって腰おろす

大阪市 奥 村 五 月

孫帰り御輿をかつぐ白い足袋

飛ぶように売れるカチ割り甲子園

うまいけど夫の料理金かかる

ユニホーム汚して叱る母いない

寂しいが母は気楽と過疎に住む

大阪市 笠 嶋 惠 美

クーラーでやっと生きてるこの暑さ

この症状が白内障とやっと知る

じゅずつなぎ検査が増えて薬増え

手作りの帽子似合って目が涼し

やっとこ気付く老いの体にムチ打たぬ

大阪市 金 川 宣 子

この猛暑ショートカットも汗だくで

台風が左へヒヨイとへそを曲げ

暇だからたまにはボケたフリをする

ウォーキング今日も歩数を自慢する

老い夫婦返事来るまで問いかける

大阪市 川 端 一 歩

路郎忌にひたすら恥じるひ孫弟子

初盆の恩師の霊に大文字

普通でよい父のことばが分かりかけ

今になり叱ってくれた母のこと

平凡な暮らしが嬉し酒二合

手のひらに覚悟しつかりにぎりしめ
川柳をやつて良かつた今老後

大阪市 熊代 葉月

友の名を思い浮かべる昨日今日
玉子かけ亡夫のために作る朝

弱音はく私を叱る亡母の声

大阪市 古今堂 蕉子

シナプスが真面目に働かなくなつた

長生きのコツは不良に生きること

私に似たのだ孫の大言壮語癖

爆笑の芝雀を見てる夏の午後

末っ子の私小銭のように生き

大阪市 近藤 正

翁長さん遺志つぎ辺野古守ります

出る杭は叩かれるけど遅い

働きバチ過労死なんかありません

核禁止邪魔する側の被爆国

カジノより防災くらし先でしょう

大阪市 坂 裕之

水不足あの大雨は何だった

拘りが過ぎる頑固なお父ちゃん

すぐそばに居るのにオーラ感じない

単線の里の景色が懐かしい

世の中の動き読めずに置き去りに

イメージが湧かぬドームが何個分
包装に英字新聞とつておく

大阪市 高杉 力

闇市派今アマゾンでお買物
栄光の過去に話を向けて飲む

初めてのデートの場所を正される

大阪市 高杉 千歩

みんなの体操ひとりベッドのストレッチ

年金プラスいつまで生きる九十二

未だ生きるつもり日程表〇〇〇

八月台風なるようになれ車椅子

探しもの思い出探し老いひとり

大阪市 田中 ゆみ子

ひとりより二人核廃のこだま

青空であるよう命たたむ日は

私には故郷がある伯耆富士

そのうちに良いこともある花の種

まっすぐな胡瓜我慢をしたんだね

大阪市 津村 志華子

ビブラートで唱えています朝の経

終の旅花の浄土か地獄かも

ワntenポずれてる老いは蚊帳の外

怒ること笑うこと無しひとりばち

人は皆母を求めて亡母を恋う

大阪市 津守 なぎさ

天神さん男まさりのギャルみこし

原爆忌我が家も焼けた忘れぬ日

ホタル舞う九重高原露天風呂

台風の進路決断せまられる

情報を仕込むテレビとお喋りと

大阪市 寺井 弘子

お世辞言うその唇の軽いこと

晩学のハート焦らず歩を合わす

明日は晴れ孤独を癒す茜雲

居酒屋の愚痴ばかり聞く招き猫

過去ぼつり音なく埋める砂時計

大阪市 寺本 実

砂漠化が進む頭の内と外

ゆらゆらと炎立つよな道を行く

加齢なら精密検査要らぬはず

筆不精三下り半はまだ書かぬ

やわい手や本気でほれてしまうがな

大阪市 原田 すみ子

二つ三つ間違えたけど進んでる

熱中症人ごとでない危機今年

訃報聞き間合いが有って箸を持つ

カロリーなど気にせず食べる母の味

おてんと様拝み太陽から逃げる

大阪市 平井 美智子

懸命に歩く斜めになりながら

もう三日止まない雨と来ぬメール

てにをはを変えて迷路のと真ん中

引っぱつたらあかん 哀しみ溢れ出す

笑つてる演技を神に誉められる

大阪市 平賀 国和

八月忌六九五祈りの日

被爆国普通の国になれませぬ

京都にてアメリカの友欲待す

路線バスで京都楽しむ異国人

インバウンド日本の文化どう映る

大阪市 藤田 武人

初恋のセピアの影が揺れる浜

鳥や虫四季折折のバトンパス

酒飲みが粋に味わうロゼワイン

性別の垣根を越えてさす日傘

ロスタイム女神がソツポ向き悲劇

大阪市 藤原 千恵子

熱中症の体験談を長長と

次々に起こる天災神不在

百回記念輝く笑顔甲子園

酒煙草飲まぬ息子ケーキ下げて来る

アイボだけ抱いて逃げますすいざの時

大阪市 升成 好

迷いはつきぬ人みな土に還るまで
想定外あつて人生多色刷り
飾らない言葉の奥に光るもの
もの言わぬ妻は実力行使中
虚飾みな見抜いています仏の眼

大阪市 山本 加お里

古い独りいのち大事に前を向く
遺影見てわつと泣きたい時もある
泳がせてくれたあなたにありがとう
生きてさえいればチャンスもきつとくる
まつさらな朝がふわりとタツチする

大阪市 吉内 タカ子

杖なしで歩く挑戦いま夢中
自由趣味なぜか弾ます好奇心
八月は思い出多い汗なみだ
戦中派今の平和で百までも
頑張れと向日葵さいた一輪が

大阪市 若本 安代

仏頂面はしないと決めた笑顔です
深爪の痛み程度の過去がある
始まりはあの日あなたの一言が
二度咲きと言われていいの咲いてみる
まだ母を頼ってくれて頑張れた

堺市 奥時 雄

クラス会無いし祭りに来いと言う
鬨雲祭り囃子に乗せてくる
クラスの子大人に見えた村祭り
手料理も少なくなつた村祭り
手刀で酒一升の宮相撲

堺市 柿花 和夫

じいちゃんの童話は途中から訓話
風の夜の木の実は理由なく落ちる
サインだけ上手になつてまだ二軍
沖繩をないがしろにしてきた平和
ここは我慢ファイトは胸に仕舞つてる

堺市 加島 由一

アサガオを育て気分は楽隠居
若いっていいな熱闘甲子園
泣きごとと言わぬが泣くことは多い
コンビニの箸も重たい独り飯
飲みたいと思えば飲めるワンコイン

堺市 源田 八千代

平成の最後の年は強烈だ
卒寿なお文具店主に活費う
生き方もお手本となる卒寿なり
来る方も迎える方もまたひとり
秋を恋う故郷の空を口ずさみ

堺市坂上淳司

子どもの誓いが心に響くヒロシマ忌

総理挨拶のマイクが拾うデモの声

未批准にどこの総理と問う市民

先頭に立たな唯一被爆国

黙祷の鐘の音長く殷殷と

堺市澤井敏治

生きていてやはり良かった敗戦忌

川柳の径に迷っている八十路

明日生きたために笑って詩を詠む

透明の風聴きながら食う茶そば

逝く夏への感謝ひまわりのかたち

堺市遠山唯教

欲すてカジノの餌食にはならず

濁流にのまれ不安と立ち向かう

しあわせを回り道してたしかめる

介護支援まだまだこんなもんじゃない

いとおしく手を取り合ってきた八十路

堺市内藤憲彦

幸せを今あるものでふくらます

被害者は常に子供という歴史

大阪の母高島屋では値切らない

ママチャリへ歩きスマホヘクラクション

恩師囲む少年の顔見せながら

堺市矢倉五月

趣味の会さえ肩書が幅きかす

孫にもらったパワーストーンに出る元気

鳩達も暑いカホームで群れている

一浴衣帯キユンと祭りのセブンティーン

言いたい事言うてすかつとした顔だ

池田市栗田久子

八月の祈り静かに灯をともす

暑氣払い酢醬油かけてところてん

記録的猛暑とはいえそつと秋

満たされてなおその上にある望み

震度六耐えた墓石にただ感謝

茨木市島田誠一

村度の度合で処遇するポスト

同窓のゴルフパターを杖にする

清貧の暮らしに戻れない文化

アルパムはセピアの恋の侘住い

引き算の老いに一輪趣味を足す

貝塚市石田ひろ子

ケーキ買う許可頂いた血糖値

時々の度忘れ脳の潤滑油

花の命わが身に重ね水をやる

本を読む睡眠剤の昼下り

灯明の揺れて感謝の今日を閉じ

河内長野市 大島 ともこ

住み慣れた家に潜んでいる奈落
明日はどっちだ迷い抱えた風見鶏
ひと回りしたら美談も裏返し
幸せの原色フラグ掲げたい
食べて寝て寝て食べてまた米を研ぐ

河内長野市 梶原 弘光

雑学は宇宙に似たりキリが無い
ベテランのアナは流石にトチらない
おしゃべりなくせに苦手な御挨拶
水害と雨乞い同じニッポンで
クーラーが効いて満席の図書館

河内長野市 木見谷 孝代

故郷の海が恋しくなる酷暑
墓花のほおずき揺らすのは仏
気合い入れさあ九人分買出しに
ひまわりの宴の後を見届ける
筆の先揺れます情緒不安定

河内長野市 黒岩 靖博

口惜しいが妻の口にはかなわない
心まで洗ってくれた母の愛
すんなりと孫の名前が出てこない
くどくどと弁解しても罪は罪
夏野菜一度になつておすそ分け

河内長野市 辻村 ヒロ

止り木の不安定さがときめかす
初恋はあなたと言われ少女色
老いの愚痴聞いてくれるは亡夫だけ
ときめきが明日の目覚めを早くする
老いるとは日日の動作に教えられ

河内長野市 藤塚 克三

都合良く筋書き変える記憶力
駄目元で迫ると意外脈がある
孫からの指切りだけは守りたい
駅裏の屋台の酒は我がサブリ
おっちょこちよいと尻が重い夫婦です

河内長野市 村上 直樹

平成をたためば昭和遠くなる
免許返納不便を超えて得た自由
どたばたもじたばたもせずロスタイム
広辞苑生き方までは載ってない
遺影まで指定してある遺言書

河内長野市 森田 旅人

学ぶこと多し眠らぬ熱帯夜
どたばたとすぎる毎日これは幸
盆支度ひよいと痛みが顔を出す
甲子園努力の滲む音がする
会釈にも滲みでてくるお人柄

河内長野市 山室光弘
キラキラと無垢な瞳が見る未来
終活に断捨離の技手につかず

喜怒哀楽済んでしまえば走馬灯

火星接近宇宙の距離の桁ちがい

認知機能検査何故だか胸がキュン

岸和田市 岩佐ダン吉

背かれて始めて見えるものがある

せつかくの余白だがんばろうと書く

振り仰ぐまだまだ僕は三合目

賞讃を浴びてあれからひとりぼち

生涯を最前線と言ひ聞かず

岸和田市 宮野みつ江

何も足せず何も引けない日が終る

救急車隣近所のドアが開く

立秋を風が教えてくれました

猫好きを読まれてノラに居座られ

家猫の餌をノラにも許し見る

岸和田市 雪本珠子

借老の阿吽の呼吸板につく

諍いが空しく怒る気になれず

おおきにの言葉浪速のやわらかさ

体調も日変わりになる八十路坂

リラックスし過ぎて脳が空回り

四條畷市 吉岡修

先頭が紅葉マークで長い坂

祝賀会手ぶらで来ても遠慮せず

銀行は年金だけのおつき合い

しようもないプライド誰も知らん顔

ゴルフ塾弟子がベントツでやってくる

吹田市 木下敏子

句読点打ってゆっくり夏休み

気持ちよく目ざめ散歩の軽い足

幸せや一人のんびり本を読む

水飲んで三十八度乗り越える

新しい電子辞書には手が慣れぬ

吹田市 須磨活恵

五年ぶり故郷の海とする会話

潮騒も風も優しく人もまた

蝉しぐれ実家婚家の墓まいり

猛暑で右脳左脳が怠けてる

やさしさも勇氣もほしい生きる街

吹田市 野下之男

雨神様あそびは止めておしずかに

洞窟でよく生き延びたおめでとう

寝る前にいつも写真の若い妻

この年でオヤツの時間忘れない

のど飴がいつも待機のテーブルだ

高槻市 指宿 千枝子

遣り繰りがうまくなったと自画自賛

猛暑です負けず出かける墓参り

亡き夫の眠るお墓は別荘だ

静けさや墓地は極楽蟬時雨

ジャンプして尻餅ついた好奇心

高槻市 片山 かずお

淡淡と予報士猛暑だと告げる

開会式に水飲みタイム要る猛暑

猛暑にも負けじと夏草は元氣

今日も猛暑ですよと朝の青い空

スーパ―へ毎日避暑に行く猛暑

高槻市 島田 千鶴子

まるまると我が家の天使二重顎

誤解から生まれる恋もあるのです

孫が来る日だけ弾んでいるピアノ

保証切れ見極め故障する家電

三割増し可愛く見える浴衣の娘

高槻市 初代 正彦

膝交えたら和むと踏んでいた誤算

薄っぺらいようでもタフな土踏まず

猛暑にも馴れる身体が恐くなる

はいポーズ言われて力む伸び盛り

免許更新認知テストの軽いジャブ

高槻市 杉本 義昭

真っ直ぐな意見が通る青い空

人生のモデル探して生き上手

雨の時ばかりじゃないよ旅立とう

猛暑日はひまわりさえも蔭探す

手は上げぬまだ九回の裏がある

高槻市 富田 美義

罹災後は音への脅え子が笑う

諦めたドレスが宴へまた疼く

もう少し辛苦をさせて救いの手

わが妻の顔に隠れた辛苦あり

ふんばった若き辛苦が懐かしい

高槻市 富田 保子

時々本音で腹の立つ看護

ケータイでおっちょこちよいの薄っぺら

切っかけの為に持つてる文庫本

ストレスに負けてめがねが又曇る

食欲が無いので朝も飲んでる

高槻市 原 洋志

気に入った店は誰にも教えない

父逝って盆栽哀れ後を追

プラゴミの浮遊にビーチへそ曲げる

台風が見物に来た夏祭り

スマホから顔上げて見る青い空

高槻市 松岡 篤

午後の二時気力と睡魔ハツケヨイ
挨拶に水飲んだかという暑さ
チャイナ製を外国製と書くチラシ
挨拶が済む頃ビール泡が無く
へこみある車の横は駐車せず

高槻市 安田 忠子

盆が来て孫の元気な声も来る
エアコンの程良い部屋で一日中
真夏日に滝のイオンを吸い元気
隣席の内緒話が面白い
一日を大切に生きまた明日

豊中市 池田 純子

おへそ出しババそっくりが昼寝中
暑い日は蝉と競って孫が泣く
孟蘭盆会父母としばしのティータイム
言い訳を聞いてくれない締め切り日
白い髪みんな優しくしてくれる

豊中市 上出 修

宿の朝裏の木立で深呼吸
深読みに楽に行こうと風見鶏
好景気言うのに続く生活苦
翔タイム観客酔わす二刀流
大欠伸ヤジでも言うか議員さん

豊中市 藤井 則彦

父さんの禁煙を機に家族の輪
暗闇に居ると謙虚になる予感
立ち読みの漫画で偶にリフレッシュ
袋叩きに遭うてやつとこ目が覚める
愚痴を聞き合うのも楽し老い心地

豊中市 松尾 美智代

賞罰に縁もゆかりも無い器
毎日が日曜なのに六時起き
二人共忘れっぽい元気です
ゆつくりとする日肉じゃが炊いてます
句会中止てんやわんやの震度7

豊中市 水野 黒兎

路郎忌の呼名孫弟子曾孫弟子
いきなりの凶器となった尿酸値
人も木もほめられ天へ伸びつづけ
あれこれと決断できぬままに老い
道草は一種の課外授業なり

富田林市 片岡 智恵子

極暑つづく向日葵も顔伏せのまま
目薬のような雨 夕立ちを待つ
枯梗咲く亡父母は遠くなるばかり
理想大きく曲げ生きのびる事想う
会見に臨んだ二十歳からまなぶ

富田林市 関 よしみ

包み方下手で秘密が丸裸
土に一札全力の泥まみれ
白桔梗母が愛した花そよぐ
急がずに肩の凝り消す旅に出る
ひらがなで互いに話す老いふたり

富田林市 中村 恵

台風の進路に置いた道標
声たてて笑う哀しいとき笑う
ここ一番斑気な女神そつぽ向く
柔らかな痛みはいつまでも続く
活のよい私のままで終りたい

富田林市 山野 寿之

老い楽し私も老いのだ真ん中
子が巣立ち3LDK広い家
引き返す術を教えた山の風
ドからドへ孫八人のいい音符
激励に優しい嘘も赦す神

寝屋川市 籠島 恵子

記念日を思い出さないまま夕げ
妹からサブリ元気になれと言う
六歳の顔を潰さぬよう叱る
プリンスエドワード島への旅を夢みる十二歳
夫に日傘今年の夏に折れている

寝屋川市 富山 ルイ子

この世のことすべてこの世で終らせる
逝く人が次次心萎えていく
かけがえのない財産は家族です
じつはもう米寿なのですひつじ年
ありがとうクローラーの部屋読書中

寝屋川市 平松 かすみ

ママチャリで走る三十五度の街
仏前で此の世は暑うございます
遺品から妻に役立つ略字辞書
短命の家系長兄塗り替える
スマイルの一番好きな鏡です

寝屋川市 森 茜

ひっきりなしの絶唱だった蝉拾う
ひゅうどろどろ猛暑にお化けひっこんだ
被災地へ続くどろどろのクレールン
クローラーを使いこなして骨粗しょう症
マンション街ひっそり照りつける歩道

羽曳野市 安芸田 泰子

スーパーをゆっくり回り主婦の避暑
バーゲンの列にプライドなどはない
実のつけぬ花は気楽に散り終える
墓掃除やがて私の終の家
一匹の蚊と闘った熱帯夜

羽曳野市 宇都宮 ちづる

発酵食カタカナ姓の娘に土産

長い夏暑い暑いで怠け癖

南東にときめいて見る火星の朱

百歳が夢ではないが無い貯金

塩つまみ足したレシビは亡母の味

羽曳野市 徳山 みつこ

熱中症じゃないか北極の白熊

蟻みみずバツタと話す土いじり

三合目お地藏さまにお辞儀して

パンザーイわたし山姥まで生きる

戦争を知る人消えてゆく無念

羽曳野市 中川 ひろ介

記念大会汗は本物球児たち

ビール売る可愛いえくぼ暑からう

介護奉仕一日行って二日寝る

はとパスの上手いガイドが眠らせぬ

迎え火に迷ってないか父母の霊

羽曳野市 仲谷 真

良くやった法務大臣印押した

秋祭り豊作祝い地車を引く

十五夜のすすきに団子なつかしい

臨時国会開いて年号発表して欲しい

ひよっとしてデノミの発表有るかもよ

羽曳野市 藤原 大子

異常気象台風までもへそ曲げる

異常気象嘆きエコにはなりきれず

豪華良しのんびり旅はもつと夢

噂して貰えるなんて脈がある

ぼっくりも良いが猶予もちと欲しい

羽曳野市 三好 専平

万歳はしない君が代歌わない

口ぐせの平和で夕陽見る岬

千尋の谷をときどき覗きこみ

命がけで飲んできたので今は下戸

八十を過ぎてペン字に恋をする

羽曳野市 吉村 久仁雄

見込み違い人差指が疼き出す

民の息吹が聞こえる歴史学んでる

復興をガイドラインが邪魔をする

粘々を食べ淡々と夏を生き

とかげのシッポ切りたい過去が一つある

東大阪市 北村 賢子

始まりは虚飾一つもない誓い

もろもろのドラマを語る深い皺

命ある今を笑顔で生き延びる

一万歩越えた日自分誉めてやる

悩みごととなるようになるケセラセラ

東大阪市 佐々木 満 作

まあ一杯喉潤して悩み聞く
じいちゃんのメタボにひょいと乗る子猫

ストレスを袋とじして耐えている

花手向け先祖と対話する彼岸

祭りの灯消してはならぬ過疎の村

枚方市 丹後屋 肇

昭和一桁語り部になる外はない

追伸に感謝の言葉足している

同窓の暑中見舞いに元氣湧く

アルバムに浸るセピア色の祖父母

代弁のアニメドラマに酔っている

枚方市 二宮 山久

戦いのないこの国の素晴らしさ

川の字に寝れる幸せ里帰り

まだ介護必要ないぞとウォーキング

不器用に生きる人生これも良し

年金の範囲で生きて豊かなり

枚方市 二宮 紫鳳

年金の範囲内にとお盆玉

髪染めて背すじ伸ばして同級会

フレッシュな野菜づくしの里の膳

この暑さがマン比べも程々に

夏バテを知らぬ夫の食進む

枚方市 藤村 亜成

真ん中に立てば左右の思想見えてくる

財布膨らむと強気に動く足

この期に及び虫ずの走る綺麗ごと

これからの予感を映している鏡

今こそがいつも大事としたい

枚方市 山口 弘委智

失ったもの得たもの去来老いの坂

生き下手で意固地を張って世を狭く

日が昇り日が暮れ余生くりかえし

まっすぐに引いた線から迷い漏れ

本心を透かして見せたコップ酒

藤井寺市 太田 扶美代

付かず離れずはわたしの好きな距離

鈍くとも悲しき事はたんとある

母の話ばかりしている仲直り

破れかぶれでかき氷を頼む

忘れたい事は忘れて喪が明ける

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

つまらない話ほどよく消化する

耳たぶに触れられ小さくとまどった

みんな左向いて淋しい虫図鑑

曖昧に生きて眩しい日がつづく

終の日にあけるしまつてある言葉

藤井寺市 鈴木 いさお

会いたさのあまりフライングしました
根拠ない自信が一人歩きする
百歳を過ぎたらアディショナルタイム
有刺鉄線猫は難なく乗り越える
腹立つが今年のカーブ強過ぎる

藤井寺市 若松 雅枝

大花火映し賑わう里の河
秋祭り太鼓を叩く孫の汗
夫の手を借りて傷めた足かばう
秋海棠亡父を偲ぶ雨の庭
墓守る子らの負担も気にかかる

箕面市 大浦 初音

青空は雲のキャンパス絵画展
帰つて窓の明りに急かされる
ことわりは真綿にくるみ近いうち
忘れること立ち直りへの第一歩
蝉しぐれ7日の命つかいきり

箕面市 酒井 紀華

話したら心がはれる母の膝
ひまわりの海を泳いで夏おわる
あと少し酔わしてほしいひとり酒
ふるさと自慢水と空気がうまい酒
ふるさとの井戸水恋し熱帯夜

箕面市 出口 セツ子

子が去って友うつ病になり不安
かまってくれぬとうつ病になると子を脅す
親孝行のつもりで食事つきあう子
呆ける暇無いよう遊び歩いてる
四季にあう食事や遊びある至福

箕面市 中山 春代

太陽よあつちを向いてくれないか
極夏の朝を洗う蝉しぐれ
電柱の陰を拾ってバスを待つ
風の道へごろんと夫の文庫本
お手本と似ても似つかぬいろにはほ

箕面市 広島 巴子

流星にのって先祖が里帰り
帰省の子最終電車はらはらす
夕闇に寂しさ募るUターン
猛暑続き植木も負けて哀れなり
一〇〇回の球史感動永遠に

八尾市 寺川 はじむ

エコよりも命守れと気象庁
手が届かない痒いとこには妻がいる
気まぐれに始めた趣味が幅利かす
淡い期待提げて観戦トラのV
泥バケツリレーが温いボランティア

八尾市 宮崎 シマ子

コスモス畑あわてんぼうが一
二輪
水差さないで私夫を信じてる

乗せてもらう孫の車に投資する

一つ一つ母の教えがわかる歳

一呼吸おいて言うたがやはり採め

八尾市 村上 ミツ子

ちよつと前まですんなりと通れたが

なにか変 暑さのせいにしておこつ

節約をすればなんとか生きられる

出かけようコマの回っているうちに

つまずいた石に追いかけてられている

八尾市 山根 妙子

平成の名残をハモる蝉しぐれ

運休の駅に人待ち顔の猫

びよんびよんと床運動の美技極まる

ワンピース着た日は好きな白日傘

計の報せ悼みと介護勞いを

神戸市 上田 和宏

戦死墓横に無念の父眠る

戦死墓そつとトンボが来て留まる

あれもこれも換骨脱胎した戦後

立ち直つたリングの唄に助けられ

ああ戦後死語にしないと酒を飲む

神戸市 奥澤 洋次郎

猪に荒らされた畑夏終る

ふる里のできた子供の夏休み

私のコピーやつぱり天邪鬼

戻らない時を探しにバスに乗る

初恋の人いる町へゆく句会

神戸市 富永 恭子

戦力にならぬがムードだけ醸す

夏盛りかほちゃは限りなく丸い

お地藏さんよう来たねえと笑いかけ

嫌いより好きを増やして心地いい

他人だがそろいの浴衣旅湯宿

神戸市 能勢 利子

スマホとカードあれば何とかなるこの世

跡継ぎがなくて実家の墓終い

長生きの淋しさ学んでる介護

だんだんとメール短くなる八十路

好き嫌いはつきりしてる犬と孫

神戸市 細川 花門

年金の一部ですがと義援金

吉野家でうな重たべて暑気払い

酷暑でも半年後には雪便り

ジーパンがまだまだ似合う赤とんぼ

老人も頑張るならば今でしよう

神戸市 山口美穂

芦屋市 竹山千賀子

充電は昼寝夕餉に備えます
地藏盆子等の燥いだ声をきく

宇宙の神の怒りか気象狂わせる

お日様と談笑をする百日紅

酸っぱさが漂っている土用干し

神戸市 山崎武彦

残り火を燃やす相手は決めている

鬱な午後小猫と遊ぶ猫じゃらし

もうあかん句箋の海で立ち泳ぎ

断捨離をしても減らないゴミ袋

老けたなと監視カメラに覗かれる

明石市 梶谷和郎

夢の続き追いたく今日も種をまく

飾らない言葉に揺れるかすみ草

百歳も少女に戻るケーキ好き

転ぶから学び始める生きる知恵

ぶつけても人にやさしい紙つぶて

芦屋市 黒田能子

おしゃべりが好き口だけは元気です

歩道橋見上げたくなる空の青

悪いこと何もしてないパスポート

途中から大きな声になる自信

途中下車できぬ人生半ばです

輪を抜けておもしろいニュース遠くなる

汗吸った兎のユニホームでかい夢

次世代を預ける孫と墓まいり

話合う心のドアを全開で

仕切り屋が二人になるとややこしい

尼崎市 加川靖鬼

袈裟脱いだ和尚の悩み注ぐお酒

タックルかひらり自転車すり抜ける

街路樹も熱中症になる酷暑

ひよいひよいと突くと蛸焼き丸くなる

動物はみんな真面目で笑わない

尼崎市 永田紀恵

物件となつたわが家に燕の巢

断捨離のけじめがつかぬセピア色

飲み会が夜から昼になる齡

針のない時計を抱いて旅に出る

生き上手後ろにも目がついている

尼崎市 藤井宏造

味わって食べてはならぬわんこそば

家で飲むこの気楽さがたまらない

水たまり軽く飛び越すリクルート

三番はカットすべきだカラオケ機

動揺を見せないために目をつぶる

尼崎市 藤田雪菜

これくらい持てる油断が腰に来る
特上の笑顔を持ってポランティア
ビアガーデン夏を飲みます弾んでる
ネバネバを食べて暑さを泳ぎきる
遠い日の思いでたたむ数え唄

川西市 山口不動

このごろはお薬手帖忘れない
減塩は熱中症で中止する
台風も逆走してる危険です
練りなおす百歳までの空白を
一番に避難勧告受ける歳

篠山市 北澤稠民

何もかもお留守になったこの私
生きる知恵見せる虫さえ死んだふり
ほんのりと酒がまわって頼みごと
人間が試されている田の草に
予報士も読めぬ今年の夏空が

篠山市 酒井健二

アメンボの様に青春生きている
全自動トイレを付けてボケだした
焼き穴子四本の串でえり正す
生き死にはクーラー入れるか入れないか
サイナラで幽体離脱しましょうね

三田市 足立つな子

後期です可愛い花になりたいの
クッキーと豆乳のんで昼すます
定刻にやっつてはこないバスを待つ
花の香も噂話も風にもる
女子アナはすぐに覚えるおじいさん

三田市 石原歳子

ついにきた三江線が廃線に
三田祭り打ち上げ花火大拍手
間違った体操したが人気でる
置き忘れしたと思つた傘家に
立秋になつてうれしい元気でる

三田市 上田ひとみ

結末は教えないのがルールです
話すまで遠い人だと決めていた
こだわりはないのですたださらさらと
叱つてもくれぬ誉めてもくれぬ目だ
ときどきは大声上げて泣かせてね

三田市 尾崎一子

核廃絶平成最後の原爆忌
平和です百回記念甲子園
盆仕度ふつと仏の友偲ぶ
立秋の風ひらり外は炎天
どの家もお盆の灯り仏の間

三田市 北野 哲男

元号の発表を待つカレンダー
雲形と三角定規でも夫婦
古里に夢が流れていた小川
半年で四斗樽が空く般若湯
遮断機と鬼ヤンマとは同じ柄

三田市 久保田 千代

協力を惜しまぬ若い正義感
潔く詫びて明日を晴れにする
道連れが豊かな旅にしてくれる
土曜日を佐和子の朝で確認す
バラバラの絆で平和保つてる

三田市 多田 雅尚

水替えてメダカが急に背伸びする
大勢でするジャンケンを決まらない
猛暑にもけなげに咲いたアマリリス
クールビズ役には立たぬこの暑さ
海山が有って川の日無い不思議

三田市 谷口 修平

年金を支える腕が細すぎる
夜店の灯消えて墓標の立つ金魚
振り向けば頭抱えていた女神
故郷を持たぬカラスの住む都会
屋上で収穫をする夏野菜

三田市 野口 真桜子

やさしさが言わせた嘘で地獄行き
リストラでやさしい亭主突り出す
老人会過去持ち寄ってつつきあう
柔らかくはじめて余生生きている
手抜きする人生ジャンボクジを買う

三田市 福田 好文

頷いて味方の顔をして帰る
まだ欲があつて朝が待ち遠しい
七億あれどこの顔これ一つ
一人旅知らぬおばちゃんあめくれる
何色に染めても黒はしみ出る

三田市 村田 博

まだ頑張りますか総理副総理
痛痛し小沢征爾の振るタクト
猛暑日の吾がオアシスは句会場
趣味多忙余命が足らぬ継ぎ足そう
火星にも水が有るらし移住する

高砂市 松尾 柳右子

木洩れ日に水分補強蝉しぐれ
鳥の声鋭気みなぎる朝の水
グループの笑顔猛暑酷暑をいとわない
朝顔の健気やすらぎ貰う日々
賑やかに話せる友の有難さ

宝塚市 丸山孔一
チャンネルを変えても同じニュース見る

麻雀がボケ防止とはほんまかな
忘れない為に端から覚えな
い
十種飲む誰が効き目を選び分ける
転んだの私もという年になり

西宮市 秋元てる

老いと言う安全地帯に居て批判
長生きがもてた頃が華だった
思い出の数は長寿の褒美かも
やんわりと断られたので後が出ぬ
業務用の笑顔は家で使わない

西宮市 緒方美津子

男背広女袖なしニュース読む
和みます八月号の海の青
小さい方少ない方を選ぶ歳
考えぬうなぎ上りの電気代
父に酒母に鬼灯手向けます

西宮市 亀岡哲子

コマーシャルの裏もしつかり見ておこ
う
九時起床やっぱり二時にする昼寝
なるようになるピンチを越えた母
転んでもシャキッと立てるストレッチ
意地っ張りの姉をそおーと見守ろう

西宮市 西口いわゑ
鉛筆とロマンの森を育ててる

ベランダに花を咲かせている平和
人恋し月はわたしの万華鏡
円満を保てるならば負けておく
彦星に逢いたいけれど舟がない

西宮市 福島弘子

ひらりひらり猫をからかうアゲハチョウ
年の功実はに老母はたじろがず
あの世とやら少し覗いて来たのです
年重ね爪にも皺が出ると知る
爪立ててカボチャの旨さ計る老母

西脇市 七反田順子

雨が降る実は雨ごいしたんです
赤信号犬がちらりと顔を見る
からかいが本気の愛に変ってきた
孫が来た宿題多い嘆きつつ
木洩れ日の小石に水を撒く暑さ

南あわじ市 萩原狸月

麻薬犬通せんぼしたバスポート
閑古鳥シャッター街に見る起伏
絶滅へ産まない自由走り出す
胴元が勝つに決まっているカジノ
ナツメロがあの日僕へ連れ戻す

奈良県 安福和夫

バイリンガル拘り過ぎは害になる
しつかりと先ずは正しい日本語を
グローバル根なし草では叶えない
異国でも努力誠意は通じ合う
大谷君次は言語の二刀流

奈良県 谷川 憲

熱波には少し負けてる蝉しぐれ
和尚さんの読経に合わせ盆供養
学校のプールまで閉じ炎暑の日
赤ん坊みんな天使の笑みを見せ
羅針盤が無くなりそうな自国主義

奈良県 中原 比呂志

奈良句会成人式を囲む鹿
照り返し仁王の背なに蝉の声
レールまで曲げて居座る高気圧
肌を刺す光と知った午後の窓
目玉焼き出来る駐車場のボンネット

奈良県 長谷川 崇 明

この猛暑給水タイム甲子園
落書きと落書禁止字が並び
鈍行で旅する地図はまだ白紙
輪を抜けて月と向き合う露天風呂
ゆとりなど無いが二人の半世紀

奈良県 渡辺 富子

かんかん照りマリンプルールのペアルック
自転車で自分捜しの旅に出る
病名を告げコンピューター無表情
御破算でさつと消したい苦い過去
古都一望秋雨に濡れしのび逢う

奈良市 阿部 紀子

子のために環境良くて越してきた
勉強も稽古も親子懸命に
お向いがホームへ入り家セール
売れる家売れ残る家なんでやる
廃屋に老女が一人住んでいる

奈良市 宇賀 史郎

肌に好いと聞けば酒粕下戸の妻
久し振り着るワイシャツの爺むささ
シャツター街未来語らぬまま静か
知らぬ間にAI進化する暮し
呼び名まで歴史問題日本海

奈良市 大久保 眞澄

酒税だけはウチも高額納税者
墓まいり猛暑の墓地は命がけ
夕陽を丸呑み海には勝てません
心から染み出る言葉には勝てず
頂上は遠く休んではかりいる

奈良市 高橋 敬子

隣り合いスマホに親も子も夢中
終活に遠い昔が邪魔をする
遠い夢抱いて臍をかじってる
立話許さぬ道の照り返し
夜行性に拍車をかけるこの猛暑

奈良市 辻内 げんえい

赤信号日陰を探しひと休み
断捨離しやはり必要買う羽目に
カロリーに気遣い食べて瘦せません
留守番の朝の定食ハムエッグ
子は昭和孫平成で曾孫何

奈良市 米田 恭昌

まさかの地震に油断がうろたえる
深夜二時「ムンクの叫び」聞くギャラリ
ホームベースがこんなに遠い絶不調
今はもう虎は巨人に勝てばいい
写経して心の闇に灯を点す

生駒市 飛永 ふりこ

突然の停電暑さ沸点に
送り火がかすかな思い揺り起こす
しみじみと平和な暮らし手を合わす
ムクムクと入道雲にアイディアが
虹を追う必死が生きる糧になる

香芝市 大内 朝子

被災地を見舞う心からの募金
ひまわりの律儀に耐えている笑顔
八日目の蟬のポトリを埋めてやる
ギシギシコックンわたしの骨の音を聞く
夕やけこやけふる里を追う父母を追う

香芝市 山下 純子

お互いに空気になれぬ古希の風
食卓で世界旅する多国籍
胸のトゲいつしよに流す仕舞い風呂
古希近く学ぶ楽しさ女学生
妻句会夫ゴルフで文句なし

橿原市 居谷 真理子

日本語よ美しくあれ蝉時雨
悲しみが深くて両の眼が乾く
ララララと奏でて今日の血の流れ
羊水の記憶に還る風邪の熱
旅をしているこの海もわたくしも

桜井市 安土 理恵

みんな捨てたら痛いところも消えますか
優しさに弱いところが泣きどころ
のこり火の蒼はつゆ草の涙
短夜を蚊取線香尽きるまで
ごはん粒こぼす男とさし向かい

和歌山市 磯部義雄

あつさりと白旗上げて怪しまれ
人生の迷い白紙のある日記
仏壇へヘソクリ隠し手を合わす
輝いた束の間の過去思い出す
堂々と生きてきたかと今傘寿

和歌山市 上田紀子

良い人は早死にらしい大丈夫
遣らせではないと信じて観るテレビ
一声で集う仲間の輪が温い
勝つ為に負ける工夫の術学ぶ
ジャスミンテイさわやかな朝連れてくる

和歌山市 喜田准一

引き受けた役ならせめて3 4年
友は友俺には俺の夕涼み
審判にヤジが厳しい奈良事件
昔なら暑い位で何故休む
熱中症命懸けでと言うニュース

和歌山市 坂部紀久子

米寿一人自由へ不安覗き出す
ジョーカーのままではばらく休みます
年金も今度は孫のお目出度に
飲んでゐるわけではないが千鳥足
老いの足我が家の坂から出られない

和歌山市 武本碧

引き算をしながら散歩せよという
まだ脈があるかと影が追ってくる
垣根越しついた蕾がおしゃべりで
腕組みをすると嵐になる予感
乱雑な部屋も私の小宇宙

和歌山市 土屋起世子

おかげさま昭和平成生き抜ける
毒舌に私ファイトが湧いてきた
素直でない娘私のコピーかも
さっぱりと割り切りました青い空
独りでは24時間長過ぎる

和歌山市 福井菜摘

寄り添えば同じ思いの歩が揃う
こまやかなもてなし皿に盛つてある
角番が励みになって今がある
選ぶほど理想に遠くなる焦り
夢があるから楽しい絵が画ける

和歌山市 古久保和子

紫陽花は枯れたことさえ気付かない
気掛かりはスマホの指の箸使い
源氏の君もわが家の猫も通い婚
夢食べて消化不良の街灯り
大切な人置き去りにするベッド

和歌山市 堀 富美子

トータルをすれば人生悔いはない
三日間籠ると鈍くなる喋り
雑音を知らぬ遺影の羨まし
転ぶ度出会いの友に救われる
冷蔵庫満たし独り居安堵する

和歌山市 松原寿子

うたた寝を百合の香りに包まれる
生きる術リズムを変えてペダル踏む
理路整然素直に靡く風になる
諦めず舵を切ります木の葉舟
星月夜記憶が冴える御堂筋

岩出市 藤原ほのか

ひらひらと金魚アピール忘れない
夏祭り金魚すくわれ生き延びる
ほんやりと過ぎてゆくのもいいもんだ
脇役に徹して君を守り立てる
泣きばくろあるけど気持ち頑強だ

海南市 小谷小雪

のそのそ水飲むうちに夏太り
もう一度母と食べたいリング餅
あの世への持参金まで取り崩す
愛敬と言っておこうか物忘れ
漱石の猫はしあわせだったのか

海南市 堂上泰女

地藏様に祈る結愛ちゃんのその後
朝夕の散歩蜻蛉の友増える
やんちゃだった弟今は良い杖に
血を少し吸わせ蚊を打つタイミング
凌霄花朱は美しく不気味です

紀の川市 宇野幹子

人間に戻れば見える風の彩
抱き起こし母に満月見せてやる
生乾きの仮面を晒す炎天下
A面もB面もない丸裸
背伸びしてもたかだか七センチ

紀の川市 北山絹子

色褪せた女に夏が眩しすぎ
日焼けした顔がバラソル差している
人柄のよさが絆を繋いでる
客の入り主人の顔に書いてある
指先のお洒落もしたくなる今宵

紀の川市 楠原富香

嘘少しませて大人の味になる
きっちり結果をくれる万歩計
コンビニに留守をまかせて妻の旅
レシビよりおいしい母の目分量
八合目あたりで足が進まない

紀の川市 山東 日出男

コンビニも横になりたい午前二時
すりガラスの中で総裁が決まる

送風機も喰る灼熱の牛舎

モリカケの疑惑残したままカジノ

夕立が暴れまわってそして虹

橋本市 石田 隆彦

雨の日のごろん欠伸が止まらない

時たんま偽の自分を演じ切る

病んでから一途に燃やす命の火

生きるために生きる今はそう思う

負けるもんか二倍の汗をかいたから

京都市 清水 英旺

み仏は酷暑どこ吹く風の面

猛暑日に敢えて出てゆく天邪鬼

平和日本満喫してる甲子園

権力を持っては何故か声でかくなる

お手本が手本にならぬ人数多

京都市 藤井 文代

現実から逃避したく読むフィクション

例えばの話でまるく収めとく

はずしたい壊したい老いのアクセル

達筆の手紙返事が重くなる

イメーτζチェンジしたら鏡も笑い出す

京都市 三宅 満子

親も子も皆んなが主役甲子園

師の色紙飾れば涼風吹いたよう

カレンターの海見て過ごす夏休み

非常時の持ち出し鏡入れる

夏火花大きなテレビ買うて見る

長岡京市 山田 葉子

五七五はじめハードル低かった

大地震家族の絆たしかめる

時代遅れカード払いが身につかぬ

多数決従うほかはないけれど

嘘の中にある本当を探し出す

八幡市 今井 万紗子

この暑さ仏さまにもかき氷

転びなや夫が差し出す細い腕

投げキッス孫は三倍投げ返す

夫婦して百歳目指す青写真

淋しくないかやさしい風が抱きにくる

島根県 伊藤 寿美

そっと脱ぐしきたり守る白い足袋

墓じまい今年限りの盆の経

とうとう友に先を越された黄泉の旅

長生きが怖い八十路の独り旅

語り継がねば「ひめゆりたい」は同い年

夫の留守ひがなウキウキしてしまふ
メダカ50匹我が家の仲間入り
八月の雨突然の計報欄
モノクロの世界地球は世紀末
太陽に勝った球児の熱い夏

松江市 藤井寿代

唯一人通らぬ真昼猛暑夏
蚊も蟻も見えぬ夏次人間か
猛暑日も3日目帰るうちの猫
虫食べて星を眺めて生きるミケ
ひたすらに秋待つだけの夏である

松江市 松本知恵子

今日も一人で辛棒を噛っている
負けてなるものか猛暑に水を撒く
飯の世か此の世か名句試作中
皆出かけた後は窓開け唄歌う
あの時はごめん後ろで誰か呟いた

松江市 松本文子

匂袋とりハビリの友はげましに
冷えた桃久しぶりねとガラス皿
遠火花ひばりの唄を聴きながら
孫が来る豌豆ご飯ふっくらと
大夕陽話し足りない影も伸び

出雲市 伊藤玲峰

仏さま枯れない花を供える暑さ
生き下手で満足してるカタツムリ
いい夢の余韻に顔が洗えない
約束の握手は遠く泡となる
コーヒーにむせる話を聞かされる

出雲市 岸桂子

古民家の緑心をいやされる
路面電車歴史は消えぬ黒い雲
被災地で帽子が励む玉の汗
毒舌が又も地酒でまき散らす
八畳の座敷ハイハイせまくする

出雲市 小白金房子

ゆうゆうと明日の風を待っている
平凡な暮しの中で負けて勝つ
優しさを捨て七並べ孫に勝ち
昭和史を語る我が家の古時計
いつ迄も夢追いかけてずっこける

出雲市 多久和敬子

許す気になったか眼鏡拭きながら
ノーブラで一日過している暑さ
皆無口きつと暑さのせいだろう
この頃はすぐになつぷりなるお腹
またしても許してくれる母の海

雲南市 菅田かつ子

雲南市 松本 昌

生と死の境うなされ生きている
体力の衰えを知る買物に
草むしるその後ろから頑張れや
行く道だ子供の名前忘れてる
大ショックあなたと妻の愚痴

雲南市 松本 はるみ

その昔夏の夜空に散った恋
平凡はこの上もなし日が昏れる
株の値の上り下りに深呼吸
ふと思うまだ生きていた朝の露
斐伊川の風は雑念連れてゆく

岡山県 高岡 茂子

あさ家は池の中に建っていた
真夜中に床から吹き出るドロ口
電気電話が止り無音の世界
水から頭だす庭木に小鳥寄る
神様は断捨離を一遍にさせ

岡山県 田中 恵

懐メロと一緒に浮かぶ半世紀
生れつきおつちよこちよいですみません
歳月の流れに波紋二つ三つ
欲を出し貧乏神に叱られる
炭坑節聴けば手足が騒ぎだす

岡山市 丹下 凱夫

梅の仁食べていいことありそうな
カンナ咲く百日草咲く盆の道
夕焼けを閉じこめている金魚玉
いちだんと酒うまくなる秋来る
ねこじやらしが生い茂っている海馬

岡山市 前田 恵美子

食欲は夏も持続のお婆様
筋トレで汗をかいてはまた食べる
余生ノートつけて生きろと孫は言う
強い意志持つて味方と汗流す
セミさんよ涼しい場所で鳴きなさい

笠岡市 藤井 智史

人生を吊す平方根の先
カチコチな愛に人工甘味料
かき混ぜて真っ白になる愛でした
混沌な未来と遊ぶ不良品
曇天にYesかNoか問うている

広島市 岸本 清

気にせぬと万年床は楽だなあ
顔見ると元気をくれる女がいる
この冬にとっておきたいこの猛暑
ひと休みばかりしている古い二人
炎天下日傘男子も乙なもの

竹原市 石原淑子

三十五度越え続く畠の悲鳴
豪雨被災隣り合せの生と死と
右往左往スーパリーの棚は空っぽ
村祭り笛も太鼓も自粛です
孫と観るジブリにヒトの本質を

竹原市 岩本笑子

一生けん命鳴くセミ命がけですの
百点満点認知症のテスト受け
猛暑撃退どくだみ草のお茶いかが
あと五年あと十年は生き抜こう
指相撲時々負けてあげましょう

三原市 鴨田昭紀

どうしても手の鳴る方へ向く触先
被災地に吹く人情の温い風
通院の予定しかないカレンダー
アバウトに生きて開かぬ男傘
プライドが邪魔して脇役になれぬ

岩国市 上村夢香

基地の町ヘリコプターはまた今日も
球場で応援できる今日の幸
ラインでは仮面を付けたままの顔
イノシシは今夜も子連れ餌を追う
被災者の元気な声にはほっとする

宇部市 平田実男

胃カメラが酒をOKしてくれる
恨んでる雨を待ってる人も居る
スポーツに国境があり闇がある
被爆国が核廃絶をせぬ不思議
喜べぬ監視カメラの増える街

下松市 有海静枝

複雑骨折するほどの度胸なし
恥かいた記憶は保存致しません
記憶ない擦過傷が増えている
着ぐるみが脱げないままでキヤラに成る
他人様の事ならズームして見える

防府市 坂本加代

情愛を猿に教わる毛づくろい
淡々と夫婦関係続く道
井の蛙力だめしがしたくなる
野次飛ばす議員の顔をアップせよ
情熱は分散せねば火事になる

鳥取県 斉尾くにこ

面白と思うところが似ているね
気持ちいい空気信頼されている
学習をしたはずなのに同じ穴
捨ててある抜け殻を着てみたくなる
我に課すへこたれそうミッシェン

鳥取県 竹 信 照 彦

涼求め妻は買物行脚する
水と塩ちびりエアコン下に入る
水やりを忘れた僕を責める花
日傘が欲しい棚経のお坊さん
先祖迎え彼岸の様子聞いておく

鳥取県 西 谷 悦 子

対話して相手の空気読む努力
仏前へご飯供えて心満ち
ふるさとに変わらないのは空と風
鐘向かう同じ貌二度とない
蝉時雨夏の演出たつぷりと

鳥取県 細 田 裕 花

仕方なく今日吹く風と肩を組む
言い分の半分くらい勢いで
トンネルは過去からの風渦巻いて
アメとムチ甲子園への匙加減
良き人生いくつが甘い夢も見た

鳥取県 松 川 行 男

買っとけば良かった売場通り過ぎ
七億の夢を捨てずに笑ってる
盆なのにくじの話に手を合わす
祈りますこんな奴でも使い道
火星より県代表に的合わす

鳥取県 山 下 節 子

ジャンケンで決まる程度の問題だ
老い二人あいこばかりで笑い合う
エープリルフル今年も機を逃す
やっときた親子で睨むオセロ盤
テレビの世田舎も都市も変化なし

鳥取市 池 澤 大 鯨

腕つぶしも口もみんなに負けている
意志弱く禁酒できずに二日酔い
ずぼらだが肝心要押えてる
まいったなあ笑いたければ笑つてよ
笑ったらまわりひろがりいい笑顔

鳥取市 奥 田 由 美

年金で高齢歌手のデイナーショー
テンションの高い声から増す暑さ
七歳の気になるあの子日日変わる
上品に箸が使えてラツバ飲み
不祥事に地球がいかる猛熱波

鳥取市 加 藤 茶 人

プレゼント商品券で買うなんて
ペット以下介護疲れは愚痴不満
経験が裏目に俺は大丈夫
お茶お花エステにランチ午後昼寝
医者通い埋める手帳のスケジュール

鳥取市 倉益一瑤

絵一枚掛けて明るくなるころ
名人の絵より掛けたいわたしの絵
ここで息抜くと後悔きつとする
意地張って見ても奥歯が欠けている
時々は虹もかかって私小説

鳥取市 田中天翔

猛暑ですひつつめ髪の手所
前開きのアツバツバよありがとう
半端ない暑さクーラーつけ籠る
生活感溢れる部屋が心地いい
ご先祖と子等の帰省も背中押す

鳥取市 棚田大

災害を他人事にしてすましてる
一人占め聞こえ悪いが忘れぬぞ
何故なんだ心急ぐことごとく増え
ややこしい孫の言葉にはげまされ
大自然俺の暮らしに喝入れる

鳥取市 谷口回春子

脳トレは6Bだけが知っている
当てもなくさ迷う歳になりました
蚊もハエも酷暑の日には一休み
要らぬものだんだん増える老いの部屋
楽しくもあり苦しくもある句会

鳥取市 永原昌鼓

一人占めしても年金では食えぬ
一人占めしても嬉しくない一人
まだ役に立つと自覚をして生きる
火のような情熱あれは若い夢
願っても帰ることないうちの人

鳥取市 中村金祥

被災地へやさしい雨を祈る朝
よくやっただけでは出れぬ甲子園
ときめきは消えたがホッとさせる妻
ふるりの棚田を守る子も田植え
青春のカケラ持つてる古稀の坂

鳥取市 夏目一粹

断食を時どきやって元気です
すぐ妥協するが楽しく生きられる
素直さをさらけだしたら楽ですよ
今日もまた人情一つあげました
金使う苦労を一度してみたい

鳥取市 平尾菜美

恐ろしい人気受けてるエベレスト
血を洗う騒ぎ欲には気を付けて
並木路の人生見えぬ曲がり角
被災地と団結心熱くなり
家族愛心ひとつに命かけ

鳥取市 福西茶子

同期会虹に負けない服を着て
今日もまた留守居動けば金が要る
カンパいの余韻か怖いものが無い
賞罰も美談もなく後期入り
在庫品ゼロですボクの知恵袋

鳥取市 前田楓花

人生は光と音があればこそ
片隅でコソッと内緒する金魚
わたくしの森を広げて月明かり
真実を隠し続けて悪さする
きょうは今日あした雨でも花に水

鳥取市 吉田弘子

長生きの良し悪し別れ多過ぎて
夜の静寂癒しの虫の淋しすぎ
未体験の猛暑昼間は虫の息
平和です監視カメラのない町だ
西暦より元号が好き齢かしら

倉吉市 猪川由美子

疑惑を残し国会閉じる横暴さ
野党及ばぬ与党の保身チーム力
なんてこった気象異変が次々と
次期皇后やはり不安が残ります
改元や五輪色々忙しない

倉吉市 牧野芳光

温暖化鳥も南の声で鳴く
男気を出して貧乏くじを引く
山小屋を作り妻から逃げている
本物の歯だから耐えられる痛み
農業の辛さに凝りず畑を買う

倉吉市 山中康子

大山のお蔭暮らしよい倉吉
家において着替えが出来ありがたい
平静を装う嫁の朝昼晩
熱中症ならぬ掟を守りたい
仕合わせの最上段に子らの愛

米子市 後藤宏之

カーナビといつも意見のくい違い
ポイントはごめんひと言その言葉
肩こりの人仏像の肩なでる
目をつむり解ったふりのクラシック
どっしりとそれが一番むつかしい

米子市 後藤美恵子

広い世界求めて金魚床に死す
急かせた子が急ぐなと言う墓参り
座る位置変えて新たな風に会う
領海を浸すプラごみ悩ませる
詫び状が達筆すぎて読みにくい

第39回 桜井市民川柳大会

日時 10月21日(日) 10時開場
 会場 桜井中央公民館 2F 視聴覚室
 会費 1,000円(発表誌・軽食・呈)

宿題と選者

「ところで」 北谷 詔子 選
 「売 る」 西川 國治 選
 「景色(観記)」 柴田 園江 選
 「あふれる」 古川 洋子 選
 「 鞆 」 山野 寿之 選
 「わがまま」 安土 理恵 選

出句 各題2句 締切11時
 主催 やまと番傘 桜井川柳会
 連絡先 島岡美智子
 電話 0744-43-3064

猛暑日が電気水道吊り上げる
 痒い手をがまん山芋すっている
 一区切りついて無沙汰の友と会う
 締め切りがあつて細道進んでる
 趣味の会やる気と好きで続いている

米子市 中原章子
 成田 雨奇

爽やかな日とは嘘なぞつかない日
 この猛暑洗濯物がよく乾く
 汗拭いて布団を干してさあ朝だ
 恋の句をべろっと作る歳になり
 防犯灯消せば火花がよく見える

第7回 さんだ川柳大会

日時 10月16日(火)
 12:00開場 13:00出句締切
 場所 キッピーモール6F(JR三田駅前)
 兼題 席題なし・各題2句・欠席投句拝辞

「 男 」 巽 正行 選
 「にっこり」 七反田順子 選
 「拾 う」 山崎 武彦 選
 「無 理」 中桐 徹 選
 「プラン」 田中 章子 選
 「自由吟」 堀 正和 選

会費 1,500円(お土産付き)
 主催 三田市川柳協会
 連絡先 堀 正和 TEL 079-559-1255
 田中章子 TEL 079-720-8931

第27回 枚方市民川柳大会

日時 10月14日(日)
 午後12時開場
 場所 メセナひらかた 2F
 枚方市新町2丁目1番5号
 TEL 072-843-5551

宿題 各題2句 席題なし
 「はかる」 藤井満洲夫 選
 「明日」 安井 俊子 選
 「 色 」 平松かすみ 選
 「耐える」 大堀 正明 選
 「平成」 瀬川 幸子 選
 「シナリオ」 嶋澤喜八郎 選

締切 午後1時
 参加費 1,000円(発表誌呈)
 欠席投句拝辞
 連絡先 池田武彦 TEL 072-859-1917
 主催 くらわんか川柳会

川柳塔の

川柳讃歌

166

上方芸能評論家 木津川 計

玉になる前に捨て石で終わった

晋の葛洪^{かつこう}は、自分では抱朴子^{ほうぼくし}と名乗り、儒学にも仙人の道にも通じていた。著書の「抱朴子」で時代を批判してこう云う。「近頃は大人物があらわれず、真と偽とがさかさまになり、玉と石とが混淆するといった有様で、なんともなげかわしい」。ここから「玉石混淆」が生まれた。晋が減んで一六〇〇年、日本の政治の今と重なる。森友加計問題でも石が自殺、文字通り捨て石になった。悪い奴ほどよく眠るのです。眞澄さん、闘いましょう。

堂々と美女が便秘のコマーシャル

内海 幸生

大阪ではトイレへ行くことを「高野山へ行く」と言った。廁と高野を掛けた洒落ことばだった。「便所へ行く」は尾籠で使えなかったのだ。だから「ご不浄」と言い替え、「憚り」と恥ずかしがり、「お手洗い」と言い繕った。

排泄にかかわってはそれほど神経過敏で「化粧室」と飾り上げもした。もし吉永小百合が便秘のCMに出たら、幸生さんは号泣する筈だ。だから原節子は結婚もせず純潔を守った。幸生さん、甦れ原節子、の願いですね。

失った若さはベンで取り戻す

川端 一步

「天」の部だけでもゆうに文庫本一冊はありという膨大な緻密な『大漢和辞典』を作りあげた諸橋轍次は病弱で四十五歳までに死ぬと思っていた。だから体を勞りながら大仕事を進めたが校正で眼を酷使、六十代で失明同然になった。かくして誕生させた全十三巻であり九十九の没年まで励んだ。一步さんが百歳になるにはまだ二十余年。あかつき川柳会のためにも鶴彬を語り継ぐためにも一步さん、筆を揮ってどこまでも若くあつて下さい。

役に立ちつつ長生きという難しさ

村上 直樹

確かに諸橋轍次のように役に立ちつつ百まで長生きできればいい。が稀有というほど難しい。しかし問う。早世しても役に立った人はいないのか。「河内山宗俊」「人情紙風船」など映画史に残る名作を残した監督山中貞雄は二十九歳だった。北村透谷、石川啄木は共に二十六歳、「荒城の月」の滝廉太郎は

二十四歳、「一葉のはたちの筆に愧死すべし」と岸本水府が称えた樋口一葉も二十四歳。直樹さん、私も含め私たちは馬齢を重ねました。百均で満たせる程の夢であり

丸山 孔一

いくつになっても成長せんと努めるひとに感嘆する。いづやの朝日歌壇である。「百五歳 母は齒のなき口を開け歌いて『も少し上手になりたい』」。この年にしてこの意欲。畢生の大作『大菩薩峠』を書いた中里介山は「人間の諸相を曲尽し大乘遊戯の境の參入するカルマ(業) 曼陀羅の面影を大凡下の筆にうつし見ん」で大正二年から昭和一六年まで新聞連載、世界最長の小説になった。孔一さん、せて百均を百貨店の夢にしませんか。

順番のない順番は突如来る

升成 好

「忠臣蔵四十七士」は本懐を遂げた討入後、四家に預けられ切腹の日を待った。水野家に預けられた神崎与五郎は切腹の順番に不満だった。齢や格の高い順に切腹するのが慣わしなのに弱輩が先に行き、一番最後になった。水野家の家臣に「いささか閉口でござる」と苦情を言い、土壇場に向かった。順番のない順番は突如来るから順番を定めたい。好さん、決められた順番は守られねばなりませんね。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

板尾岳人兄

山男 山の画集に汗おとす

浄瑠璃寺四句入れる

見残した夢を見ている塔の朱よ

塔の朱の水に映れば浄土の朱

立たせたき人 睡蓮と塔の間

残酷な声 睡蓮の眠れるに

灯台よ 牛乳壘に乳充てる

人妻よ 海中の石見えながら

大文字 恋のはじめのごとく点く

大文字 はや消えかかる第二劃

大文字 聞えぬ音と見えぬ影

堀江正朗氏還暦

心眼に六十一の秋が澄み

腸詰が繋がっている母子家庭

秋の恋 受話器の奥で時計鳴る

サボテンも蟻も乾けり 恍惚の人

水飲めば涙に変わる 恍惚の人

一生に一度の御籤 父のみくじ

逸見灯竿氏を祝し

灯竿と号し その灯が古稀になり

ギター抱き ぼろんぼろんとこぼす悍

吊皮は手枷 生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

冬牡丹 九死一生かも知れず

一日に精魂尽くす瘦せようだ

夜桜へ 街の時計は刻打たず

反葬は雪の巔から梨花の里

水浴びの鳥を見ている人妻か

少年の幾人いても毬一つ

路郎の忌 瞋恚近づき遠ざかる

路郎の忌 酒債なければ詩債なし

七月の蜂起の空となりけり

恋人がいま肉眼に入り来る

自選集

小島蘭幸

父の墓凍と豪雨の中に立つ
避難場所我が家と決めて孫が来る
ボランティアにもカリスマがいる語録
準優勝 虹が迎えてくれました
一合の幸せ明日も明後日も

板尾岳人

二階から落ちてても蟻は生きている
影二つ重ね 生産性を問う
蠅ひとつ初秋の部屋で居坐りぬ
鱧食べて鰻も食べて生きている
生きているのが好きで章魚食べている

川上大輪

図書館でゆとりを少し補充する
どの顔を持って行こうか初対面
ゴミの日に昨日のボクを出しておく
助け船出したらきつと付け上がる
あの子はきつと源泉掛け流し

木本朱夏

石臼がははの話をしてくれる
母逝けば遠ざかりゆく水の音
メルアドに秘めたる君の頭文字
自己責任ですなと影が囁いた
金魚さえ寄り添い眠る夜の秋

斉藤 劭

父の塔越えて飛ぼうよ竹とんぼ
燃えつきて虫人形は昇天す
大根の白を誰も疑わぬ
葦一本揺らす微風が存在感
しあわせな風が運んで来た種子だ

新家完司

平穏であれと山鳩ボーボー
蝉時雨そうか君等は夏が好き
完璧な球形タンポポの綿も
金曜は金魚の日なりエサをやる
バスマットほどにはこころ平らかに

高瀬霜石

ライバルと言われて衿を正します
スクラップ・ブックの瘦せたきみとぼく
穴開いた障子どこかで見た景色
背景がよければ様になる芒
味方してくれる三日月も満月も

竹 治 ちかし

受けた生 虐待の子にパンダの子
娘もいつかパパの匂いも親父臭
子や孫の辛を願った位置に座す
年寄りになつたと主張する身体
変わらない暮らしに辛を思う齡

津 守 柳 伸

のんびりが魅力ひとりのバスツアー
若狭にて焼鯖すしはノルウェー
開けゴマ云えば開門ゴマの郷
本物にまがう造花のお出迎え
盆供養おはぎ餡餅キナコ餅

都 倉 求 芽

初恋は妻を娶った時だった
日々猛暑年のせいではないらしい
暑さだけ天気予報も熱中症
墓参り息子まかせの盆の入り
卒寿なお地を這う龍に御座候

土 橋 螢

丸描いて四角を書いて介護され
死ぬ事が難しいから生きている
お寺から仏になれる話聞く
生と死は夢まぼろしの中にあり
十五夜に唐麥木が立っている

西 出 楓 楽

四歳の孫は近頃少女めく
朝寝昼寝その上宵寝無聊の日
8・15何やら蟬も声高に
切り札を出すすべもなし子が病んで
泥酔が出来ればどんな楽だろう

仁 部 四 郎

女子会の旅です紅をよく選び
日帰りの旅へ留守居の缶ビール
つきあいのツアーでしたと出す土産
今月の旅はお医者へバスで行き
計画はできたか川を渡る旅

前 たもつ

秒針の動かぬ時計ほくに似る
すんなりと米寿迎えるはずでした
友見舞い癌に勝利のいい笑顔
新元号おまけ時代と決めている
耐えられぬ試練はないと神が言う

政 岡 日 枝 子

大空のその一角で夢結ぶ
無心にはなれず大きい箱を取る
群れにいる限りはルーツ捨てられぬ
少しづつ育つて森になってゆく
組む人と背の高さが違いすぎ

三宅保州

油紙に包んであった父の遺書
手紙書き終えても決まらない宛名
謹んで悔む弔電空しすぎ
意味のないどうもどうもに意味がある
鉛筆を舐める仕種も親譲り

宮西弥生

四〇度今日もいのちとのいくさ
百均の閉店家計に出る赤字
被災地のボランティアみなみんな光る
小綺麗に女が暮らす四〇度
石ころの一つ無駄ない京の庭

福士慕情

夏まつりねぶたねぶたに立佞武多
ヤーヤドー子どもねぶたのお通りだ
沿道の熱気を煽る大火扇
送り絵にそつと秋風しのび寄る
来年へもう取り掛かるねぶたバカ

村上玄也

屁理屈で保身を図るお偉方
最高裁に大岡裁き無いらしい
民意など構わぬ政治家の不遜
公僕と言えぬキャリアの身勝手さ
世界平和脅かしての自国主義

森山盛桜

シヨッピングモールの椅子でよく休む
大切な物のひとつに処方箋
逆走をしたよスマホの入り口で
男気の根底にある時代劇
雁首のまままで終わる気などは無い

様がわりし

八木千代

百年の樞が寄生木に負けた
枯れてなおどの葉も空を向いていた
その像は消えぬ 偉大な王として
私には見える臍にそのままに
様変わりして他の木々も無口になる

山本希久子

さらさらと残り時間もあと少し
非常袋役に立つ日が来ないよう
かっけない暑さに耐える八十路の背
洗濯ものたたむあとから汗のシヤツ
時どきは妻という名を忘れたい

第168回
大阪川柳の会

日時 10月10日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題 (各題2句)
△「食」事 吉田 佐知選 △「菌」 天根 夢草選
△「命」 伊達 郁夫選 △「秋の空」 森中恵美子選

会費 1000円
欠席投句(82円切手5枚同封) 10月9日到着分まで会員に限る

会員募集 年会費千円 会報を年6回奇数月にお届けします。

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田 智彦 宛



森の集句

『川柳的履歴書』

岸本吟 一

夕映えて阿呆は今日も木にのぼる
 夜生きる さだめは昭和初期生れ
 女神信じなくなつて少年期終る
 ころろ満たす人なし川は海に入る
 新雪をふめば雪には言葉あり
 うそつきの後姿の肩の幅
 通勤電車 ある日突然旅になる
 今日もまた幾度汚れ拭く眼鏡
 父を想え母を想えと彼岸花
 孤独なんぞ 餓鬼の頃から流れ者
 髪洗う日の多くして愛すすむ
 鮎に似て 女はいつも雨を待つ
 有馬城崎 水府の下駄がよく響く
 うちが一番 水府宵寝の大あくび
 年に一度水府 水打つ石畳

(平成十六年十月十日 発行)

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

句会への誘い白柳さんと旅
 ひばりではない牧人さんの声
 軸吟はいつもつたない摩天郎
 申カツを食べに行きまひよ一三夫さん
 駅前で美人の美代とのむ珈琲
 美しく傍島静馬老いたりき
 葵水から賀状はまだか甲寅
 あの世でもそろそろかしこ福寿草
 遍路傘 若菜香林風になる
 スケッチをする楽しさや古方さん
 香奠の敵をとつた耕花さん
 たまつくり句会にたのしいネックレス
 霊柩車パンクさせた善紫さん
 酔々を待つ全集と雛人形
 お立ち酒 丹波篠山シゲの無鬼
 おとこはんですか潮花のおんな舞
 白い杖あの世の闇を斬る亜鈍
 飛驒の旅 化石を探す弘生さん



西出楓楽選

札幌市 斉藤宏子

生まれたて午前三時の空の色
たつぷりとアカシアの香にひたる夏

夏休み脱皮したての一年生

亡き人が誘うホタルの夏の夜

つきぬける青空の下暮参り

全身に降る星浴びる夏の夜

大阪市 森廣子

暑い日のビルのガラスの乱反射

強い意志暑さにぶれぬ百日紅

ありのまま映す鏡の真正直

計画の無い一人旅です 雨になる

空想の中でもやがて来る終わり

ほたる袋に夏の秘密を仕舞い込む

佐賀県 真島久美子

抗生物質恋患いに効くらしい

ひよっとして真面目だったのかと海月

まだ子供だった許せていなかった

邪道だと言われてからのメロンパン

LINEする恋になつたらヤバイ人

彷徨っているのは後付けの言葉

山口市 中前幸子

昨日と違う街並みになる人力車

意地悪な風が道しるべを変える

森のシンボル真つ赤な屋根の喫茶店

月のうさぎとふる里で久し振り

神無月うしろめたさを陽に晒す

生き下手の節くれた指愛さねば

横浜市 川島良子

正義より保身クルクル風見鶏

シナリオの通りに事が進まない

角度替ええ長所短所が裏返る

言い訳をすればポロポロでる埃

異常気象台風までも迷走し

ネコの手も孫の手も借り生きています

横浜市 長 島 亜希子

ありがとう言つて言われる無料パス
まだまだと思うが違う周りの目

不要不急の家事はしません酷暑です
暑さのせいにしてるぐうたら直るかな

女子会は夫の愚痴で盛り上がる
愚痴りつつも良い夫婦だと感じさせ

河内長野市 原 熊 知津子

私色へなるまで言葉磨いてる
思いより言葉はいつも空回り

心の奥触れてはならぬ場所がある
飼ひ慣らされてお行儀のよいペットたち

窮屈な時代スマホで呼吸する
陰となる敗者が勝者光らせる

大阪市 小 野 雅 美

クレヨンで化粧覚えた幼き日
時計見てただそれだけでなじられる

胸に白ほんのり足して逢いに行く
お別れを促すようなにわか雨

降る雨に逢つてならぬと諭される
生き下手が遺伝しましたおかあさん

大阪市 横 山 里 子

梓川煌めいていた頃のまま
河童橋前穂へいつか夢の夢

スイーツがこころの角を丸くする

ニュース以外強いて見たくもないテレビ

玉音は訳も分からず我五歳

口だけは達者なせいで嫌がられ

府中市 岸 田 武

避難指示岩の流れる音を聞く

年寄は拝みたくなるポランティア

神さまと談判したいことだらけ

威勢よく孫たちが来た夏休み

一段落何か食いたくなってくる

新盆の友だちがいる法師蟬

岡山市 大 石 洋 子

これ以上黒くなれない鴉の夏

この世から吸い込む息が熱すぎる

茶碗洗う音が洩れこの家げんき

字面だけなぞったような復興事業

おばちゃんの強み誰にも声かける

アメジスト母の形見が似合いだす

八尾市 前 田 紀 雄

膝ボンのフリーズ涌いて秀句編む

生産性ないと妻から叱られる

レジェンドも球児も燃える甲子園

この猛暑息も絶え絶え墓参り

竹やぶを突くと補助金の煙

開けゴマ南北平和非核化へ

神戸市 田本古鈴

生きてれば願いは尽きぬ夏の雲
熱帯夜ユウレイだつて涼んでる
てっぺんに立てば見下す癖が出る
思い出を思い出してる盆の月
夏の夜の空がキャンパス揚げ火花

神戸市 敏森廣光

コツコツと歩んで来たが道半ば
病院の待合にあるシニアの輪
古希迎え犬猫飼うの止めにする
妻退院味噌汁の味かみしめる
猛暑日は五欲どこかに置き忘れ

尼崎市 清水久美子

カレンダーが瘦せていくのに無為無策
球児らが給水タイム取る今夏
日盛りのデートへ慣れぬ厚化粧
この世とや相性で持つ縁で持つ
ぶら下がる人でなかつたずっこける

伊丹市 延寿庵野鶴

なるようになるさとあとは風になる
極楽へ一直線で行くつもり
太陽を齧り西瓜が甘くなる
ふわふわの雲の形は無量大
元号が改まる頃呱呱の声

加西市 山端なつみ

原発無し停電も無し暮らせてる
節電の言葉が消えたこの猛暑
命の危険冷房使用キャンベーン
台風もフラフラ東から西へ
年金の日まで待つてねお盆玉

篠山市 久保木剛

趣味の会淑女ばかりで疲れます
好きなのでセクハラなんて言いません
のめり込み注意とチラシばちんこ屋
寂しいよ笑顔の遺影友の葬
子と違い叱りも出来ぬ孫の守り

篠山市 澤良子

信じてるからこそ出来ることもある
目をつむり首振ることで避ける業
ねらい目はちよっと控え目気だて良さ
嵩上げの土産の軽さ義理で買い
星空は明日の晴れ間の天気告げ

三田市 九村義徳

幼子の笑顔がパワーくれました
正直な振りをしてる永田町
正直にわたしを映す古鏡
世渡りを教えてくれた猿の群れ
権力に向かい鉛筆削ってる

宝塚市 太田 としお

寝不足だサッカーに熱入り過ぎ
粹なこと芭蕉の跡をたどる旅
歩き遍路感謝感謝の二人旅
絶対にあたるつもりで宝クジ
予想通り逆転負けのタイガース

宝塚市 岸田 万彩

用件は五分余談が一時間
天災が日本列島可愛がる
サンプルに風格劣るエビフライ
清貧に馴れて余生の軽い肩
生産性ないのはボクも同じです

西宮市 福田 正彦

打水も無残に消えて風暑し
蝉の声儂い命忘れてる
一目散時を惜しむか蟻の列
汗光る熱中症がふとよぎる
深緑の樹樹に漲る力瘤

奈良県 中堀 優

迷うことこれ人間の証です
なんだって大きい物に手が伸びる
親不孝の息子と詫びる親の墓
午前二時越えて眠れぬ悩みごと
逆走の台風に似て臍曲り

和歌山市 北原 昭枝

鬼灯を供えて巡る盂蘭盆会
振り向けばまだ手を振って母がたつ
平静を装い本音言えぬまま
読み返す手紙の中にあるロマン
追憶の風にゆれてる吾亦紅

和歌山市 倉橋 悦子

足掻いても自然の脅威には勝てぬ
被災者の無事祈ってる願ってる
良いニュース集めて話題ふくらます
後悔を飲み込む大輪のひまわり
吟味してほしい言葉は生きている

和歌山市 西川 千鶴

水が合い終の住処と決めた郷
カーナビに背きぐるぐる同じ道
不夜城の鴉は今朝も眠たかろ
夜遊びを咎められてるシンデレラ
欲持たぬ人なんぞには未だ逢わぬ

和歌山市 福島 一雄

雨恐いそれでも欲しい通り雨
ボランティア額の汗にありがとう
水替えも餌も金魚に目で合図
世話すると金魚は舞って礼を言う
過疎化でも近所付合い欠かさない

和歌山市 福呂 秀子

夏祭り寂しさ少し置いて去り
自分流楽しみ見付け老い二人
気のゆるみ正直示す尿検査
八十路坂きつさ覚悟で登り出す
ガラケーが小さな顔で人前に

和歌山県 森下 よりこ

暑い夏昼は涼しくサスペンス
百名山見てますクーラーの部屋で
まだ行ける買物医院自転車で
嘘泣きの上手な人はさけている
八月を青息吐息の八十歳

倉吉市 大羽 雄大

昼メシの食べた直ぐから晩のこと
水割りがロックに変わる酔いはじめ
平成が終るオイオマエを止める
陽炎の先に揺れてる水旗
子の巢立ち卓上広く空いてきた

倉吉市 若松 由紀子

怒るより泣く方が楽 女です
その話さつきも聞いた言う娘
被つてる帽子探して大騒ぎ
慈しみ育てた息子なぜカーブ
高島田角をかくして五十年

米子市 伊塚 美枝子

夏バテと言うが遊びはちゃんと出る
猛暑にも耐えるトマトの健気さよ
趣味の農手をかけた分答出す
天も地も何かおかしいこの猛暑
ドック入り二日前からダイエツト

米子市 戸田 真理子

冷蔵庫の冷える間がない夏休み
バランス良く雨と太陽降り注げ
向日葵も日陰欲しそう酷暑の日
酷暑日へうちわの風じゃ及ばない
スタンドのうちわ蝶々のごとく舞い

米子市 野川 宣子

線は細いがエスコートなら出来る男
もやもやが晴れぬ不思議な種あかし
6Bの芯尖らせて小半日
芯は強いが暑さに弱いおばあさん
天辺も土台も主役組体操

雲南市 永見 安子

波になる青田は風のさわやかに
黒子までシミまでもまた母にて
花生けの水にも氷入れてやり
度外れの気温に頭まわりかね
青空に問いかけてみるこの暑さ

松江市 中筋弘充

物の無い時代を知らぬ子が奢る
電車内で髭剃る男今に出る

熱中症になった感じがする地球
休止日を作って欲しいテレビ局
同じこと何度も話すクラス会

島根県 原 徳利

マドラーの奏でる寝酒琥珀色
充電をしると朝から雨が降る
冷や奴一丁つつく夏の膳

枝豆に惚れてビールの友とする
もめごとの火の粉を払い大火傷

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

深海の水をくすりのようにのむ暑さ
見た目には幸せそうである苦労
生きたとは予期せぬ風の曲り角
どうあろとわたしは私の色で咲く
命ある限り子のこと孫のこと

広島市 田 桑 恵 子

この猛暑蚊も刺す程の元気なし
梅ひとつポトルに入れて持ち歩く
水水に地球丸ごと浸したい

一缶のビール分け合い昼ご飯
コーヒー好きデミタスよりもマグカップ

尾道市 小畑宣之

決めつける上司にいつも泣かされた

蝉しぐれならぬ耳鳴り朝の床
人の世も川の流れも浮き沈み
力瘤は立派足りない脳の皺
体力も知力も無いが気力あり

尾道市 日谷 寛

鯛のせつない恋を森が聴く
赤とんぼ群れてる恋の円舞曲
心太恋の心を太くする

恋のこすもす風に揺れ愛に揺れ
これがまあ恋かも秋の空模様

竹原市 若年 幸子

ジャングルのトカゲ食べたと伯父語る
復員兵片足の訳語らない
配給の行列視ていた蟻の列
身につまされて視る戦後史のドラマ
終戦のひもじさ忘れ今メタボ

宇部市 高山 清子

肩書が国の財布で世渡りを
勝てば良いそんな選挙と大相撲
胸襟を開けど奥にある孤独

ゴミ捨て日忘れカラスに教えられ
暮れぬうち鍵しめクーラー老い独り

今治市 渡邊 伊津志

嫌な事忘れ上手に生き延びる
笑いには癒しと生きる力あり
予定にはなかった今日の大笑い
笑ったら消えてしまった腹の虫
依怙最員の村度はない一市民

大洲市 花岡 順子

年金は右から左介護料
お迎えをまた断つて風邪治る
ライバルの小骨喉元離れない
しなやかな手首持ち球はカーブ
災害の怖さ方丈記に学ぶ

徳島県 小畑 定弘

茶呑みでもこのときめきは恋である
どちらにも転ぶ答えを持っている
初恋も最後の恋も遠花火
自分史の節目節目にいたオンナ
肩書はいっぱいあるが無職です

福岡県 本田 さくら

久しぶり蛇みたこわいなつかしい
虐待の親の心のやみ深し
カマキリの子がわたくしに鎌をふる
墓参り酷暑先祖も暑かろう
この地球いつかヒト科にこわされる

沖縄県 禱 モモト

気にいらぬ喧嘩する時島言葉
電話ガチャごめん言われず心落ち
句作りは詠み込み苦手自由詠む
冷房は二十八度で羽根布団
二歳児の会話は母が通訳し

弘前市 高森 一吞

月曜日戦闘服はLサイズ
鍵穴を覗けばヤケドしてしまう
正解は墓の中にあるらしい
しっかりと抱くためにある腕二本
媚び方が同じ蠅は叩けない

富士見市 中島 通則

国産のこだわり捨てた物価高
満月のうさぎも跳ねる夏祭り
スイカ割り薄目でたたくど真ん中
溶けていく昭和の記憶蝉しぐれ
頑張りますと白寿の母がVサイン

東京都 高岡 弥生

この冬はきつととつても寒くなる
教えても分からぬ人と分かる人
指導者が良ければ周りうまくいく
子の才能集中力とやる気です
正義感強い子供に叱られる

福井市 伊藤良一
まだまだと背伸びに耐える靴を選ぶ
平均の寿命越えればケセラセラ

自分には直ぐに優しくなる自分
逝く時は喜劇だったと笑いたい
何しても減るなら楽しまん余命

豊橋市 小松くみ子

こんなこと初めてですが多くなる
ソーメンと違う音で食べるうどん
納得した出すぎた杭はうたれない
老人会暗黙のうち決まる席
一番の友になつたね保冷剤

豊橋市 藤田千休

着続けて汚れが目立つ政
褒められて褒めて熟女の処世術
暑あつ暑蟬の代りにヒトが鳴く
饒舌な割に聞き手に伝わらぬ
妻の座にくらべ夫の座が軽い

大阪市 磯島福貴子

蝉しぐれ終止符間近秋気配
猛暑にも動ぜずゆらり百日紅
早寝早起きはとうに夏時間
窓越しに見る夏の空凜として
ゴキブリを叩き思わずナンマイダ

大阪市 柴本ばつは

本当のわたしを見せる娘の家で
口喧嘩いきいきやれる親娘です
老いては子に従つてますこの事実
確実に見せつけられた老いのつけ
包み隠さず海に向かつて吠えて来た

大阪市 中島栄子

いくら待つても帰る人無い老い独り
今年特別毎年思うこの暑さ
夜明け静かで冷んやりいい匂出来るかな
独り居はクシャミオナラも自分流
かき氷あの天こ盛り食べきれん

大阪市 樋口眞

八月は今年も心ざわめいて
無量寿経唱えさつさと盆の僧
老いたなあ敬老バスを歎かせる
熱中症怖れ最多の電気代
傘寿超え高校野球眩しすぎ

池田市 上山堅坊

ちよつとした段差が崖になる齡
ボクもだと病氣自慢のクラス会
ピンコロリ夢みて脚を鍛えてる
もやもやの胸にスカッとみつをの詩
歩けますまだお迎えは厭ですよ

泉大津市 助川和美
私の名ちゃんと呼んでねおいじゃない
金婚にオーイと言えばお茶が出る

特技なしそれでも母になれました

考えとく断る時の名セリフ

図書館が私の避暑地ありがたい

門真市 坂本星雨

嵐にも地藏の笑みは崩れない

闘病がわたしを丸い石にする

私へと突然跳ねてくる小石

鬼の座った石に残っている温み

川底の石も夕日に抱かれない

河内長野市 中島一彌

棚経が正座の痺れきて終わる

干涸びたミミズの葬儀アリの列

猛暑日は仮死状態で生きてます

冗談のすき間を縫って出す本音

白寿の手うまいおむすび握った手

河内長野市 穂口正子

口元に滲む妬心を隠せない

入院し全てのサブリもう止めた

伎芸天わたしすっかり老いました

八月六日黙持せよと蟬が鳴く

赤とんぼもう秋ですかさう言えば

河内長野市 渡邊修

朝丘に感謝済ませて彼も逝く

元上司未だに上座機嫌良い

韓流のドラマ見たさに店屋物

子が書いた馬に番号書いてある

パスポート期限余裕で資金切れ

堺市 梅木澄空

あー言えばこー言う嫁が羨ましい

スランプに目標ゆらぐ遠ざかる

飛び乗ってハッと気付いた逆方向

ありがとうこの一言が嬉しくて

空染める火花に胸のモヤが晴れ

堺市 羽田野洋介

ファミレスのメニューすんなり決まらない

聞き上手話が長くなってくる

どっちだろ誤解したのかされたのか

どうしてもテレビ見ながら飲み食いを

若い頃学んだことは今どこに

堺市 大和峯二

豪雨去り安全となり視察する

傲慢が無意識に出る軽い口

被災者が泣いて堂々自民亭

法治とは法を破ると安倍辞典

人類の未来原発奪い去る

四条畷市 西川 ひろし

炎天の高校野球水タイム
季語という文化消し去る温暖化
遣伝子の組み換えなんて神の域
豪雨禍のテレビ視ていて正座する
子ども孫いない連休部屋広い

豊中市 荒木 郁子

被災地に善意が集うボランティア
猛暑でも約束守る食事会
高齢化ますます盛ん船の旅
現実理想の暮らし懸け離れ
エステ通い優雅な主婦もいるものだ

豊中市 木 藤 こみつ

カートゴロゴロ中国人が街を行く
危機管理意識が薄い地震国
うすつぺらいトランプさんの政治力
ふすまの揺れで震度がわかるようになる
下手なのか天才なのか書道の字

豊中市 齋 藤 奈津子

アラムより先に起こすな蝉しぐれ
土砂降りに帰り着いたら雨が止み
うたた寝にテレビの音が心地いい
夕食に鯛雲見て鯛買う
体重計乗って片足上げてみた

寝屋川市 川 本 信子

採血の血には努力の汗もある
百歳へじっくり景色見て登る
十年後宇宙散歩という時代
甲子園汗のリレーで一世紀
朝ドラはハッピーエンドと決めている

箕面市 寺 井 柳 童

初勝利笑顔いっぱい初校歌
顔のしわ誇りに今を生きてきた
免許証一番怖い顔写真
泳ぐ度記録更新お立ち台
べっぴんさんにこっと笑顔素敵だな

大阪府 小 栢 こずえ

空に友いるよな気分星を見る
困ったら知恵が次々湧いて来た
考えを少し変えれば道があく
クラス会老化具合を比べあう
老人が増えても増えぬ介護の手

大阪府 神 野 千恵子

ひらがなで書くやわらかい日が暮れる
生きている危うさ生きてゆく強かさ
恵むほど持つております悔み事
借金と思わず使うリボ払い
錆びついたような気がする脳細胞

神戸市 輿水 弘

偏屈も熟れて八十路に味を出す
老い二人無言劇で意地を張る
透明な朝のかがやき老いに活
顔なじみ愚痴も茶化して励まして

神戸市 近藤 勝正

この暑さあいさついつも同台詞
西瓜切る孫は端から水菓子
大空を我がもの顔に行く火花
甲子園祖父とお祝い同い年

神戸市 山根 弘華

ネイルして食事の支度母まかせ
赤のれんぼやき仲間で盛り上がる
好奇心まだまだ枯れぬ卒寿です
待つ人がなくて気楽な一人旅

尼崎市 近兼 敦子

ギョツと手を大丈夫だと励まされ
前向きな人には運も流れこむ
鬼ごっこ夢中になれたピュアな頃
力むのはやめる足どり軽くなる

伊丹市 平井 富夫

今年別暑さ寒さと台風も
顔色を読めと言うけど厚化粧
近道とあの世行きへは遠まわり
お布施見て若坊ちゃんはなんまいだ

篠山市 長澤 喜弘

無私の境地農に勤しむ炎天下
悔やむ家族をきつと生み出すカジノ法
ネズミのかじるアルバム開けて亡母偲ぶ
暑中見舞い孫から届く鏡文字

篠山市 長谷川 善輔

天災は忘れないうちやってくる
日照りも雨も竜神次第の日本列島
家中に猫の破りし修理あと
あの人を選んでいたらどうなった

篠山市 藤井 美智子

カレーライス老若男女人気食
カレーライス意外認知へいいと聞く
豪雨禍へ心ばかりのボランティア
この夏の酷暑へクーラー過労気味

三田市 大西 重男

鏡り市のカネの合図に殺気だつ
浅はかな思いを捨てて楽になり
丁寧なおもてなしに尻が浮き
襟正す何度言ってもすぐ崩れ

三田市 幸田 厚子

自由席となり誰来るちよつと紅
高齢化ベツト犬より猫派ふえ
爺婆のせおもちゃ部屋行き縄電車
適齡期言い寄る人を蹴ったツケ

三田市 宗福清司

無言の人しゃべり過ぎりまだまだましか

小学生には知ったかぶりは通じない

昔言われた甘いマスクも今辛い

我が子には立身出世など無用

三田市 辻 開子

エアコンが連日フルで頑張つて

堅物の気性を通し七十年

連日の暑さに体少し馴れ

フル回転エアコンあれれ疲れ気味

三田市 東内 美智子

万物が喋ればよけい暑かろう

熱中症危険猛暑となお暑い

CMの犬猫アヒルギヤラは誰

もやもやとまだ残つてた恋心

三田市 馬場 貴美江

曾孫には手出し口出し禁止令

曾孫来る眺めるだけの八十路です

極楽はすることなくて飽きがくる

万札を崩す直ちに羽生える

三田市 松本 ゆかり

とんがった男が好きな頃もあり

増水の川を見るなど娘の電話

治水工事時の市長が甦り

里帰り電気水道はね上る

奈良市 尾畑 なを江

懸命に鳴く蟬の声いじらしい

飼い猫に報告を聞く旅帰り

全国の花火大会お茶の間で

年金日賞与をもらう六回も

和歌山市 佐藤 まき

抗えぬ自然の畏怖にただ祈る

台風余波ヒューヒュー窓の悲鳴聞く

炎熱に耐えて風鈴作る人

名も知らぬ草丈軒を超している

和歌山市 定松 宏枝

招待状無しで台風やつて来る

ビンの蓋開ける力が欲しくなる

暑気払い梅干し出番多くなる

電気代それより怖い熱中症

和歌山市 鍋嶋 澄子

洒落てみる若いセンスに負けないぞ

外出も酷暑じゃま嗚呼籠の鳥

碁に夢中嗜む人に友来たり

太陽がギンギラ体焼きこがし

和歌山市 松本 雅子

手のひらに人と書き飲む舞台裏

ピノキオが生まれかわって恋実る

太陽も月も私の親友に

白馬から軽自動車に乗りかえる

岩出市 村中悦男

猛暑にも命はつてる庭の草
猛暑に遭つてひまわりまでも横をむく
痛い腰忘れてひ孫抱き寄せる
筆談も交え難聴乗り越える

鳥取市 上山一平

浮世絵の団扇はそつと棚に置く
死の暑さばててはならぬ塩に水
そこはかと茜に消えた月見草
ジ・ジ・ジ・夏蟬終の寂かも

鳥取市 大前安子

兜脱ぐ敵は師となり友となる
ふんわりと喜怒哀楽のオムライス
身の丈の暮らしへ塩を少し足す
紙持てば兜じゃなくて鶴を折る

鳥取市 副井裕

芸道は真似と創意で受け継がれ
図書館で認知頭脳のリノベーション
プリンターすぐ減るインク高過ぎる
妻主役老いのドラマが始まった

鳥取市 山野すみれ

緩やかに優しい方へ転ぶ胸
請求書記念切手で届けられ
ジャンケンでいっつもパーを出して負け
逆らつてみたくて川を昇る鮎

倉吉市 岡崎美知江

釣り合いよく苦と楽と住むひとりもの
野心捨てたら魅力なくなるただの人
荒れる国会数で押し切る国の策
一本のペンが世論を動かした

倉吉市 田中紀美恵

炊飯器タイマー忘れ食いそびれ
札束を捲っていたら夜が明けた
ペン先に命いただき生きてます
野良猫が我が家をのぞきニヤーと泣く

倉吉市 堀かずこ

言い訳をぐつとこらえて口にせず
復旧にみんなの力ありがたい
話し合い見栄を切りすぎ後退り
悲しみを笑顔でかくし耐えています

倉吉市 宮田風露

炎天下ルビーのようなブチトマト
夏草と競り合っている老いの意地
嫁姑腹に一物持つて笑む
脳味噌の溜まった垢を流せたら

境港市 中井虎尾

丸い月夜に浮かなきや白い雲
大口も出るとこ出ればもの言わず
お役所の机計画ダメもある
嵐山桂の流れ水はやし

米子市 生田和之

九月まで待てぬ猛暑に雨を乞う
父母の齡越えて来春八十路来る
週刊誌今日も読んでる医者通り
百回を迎え死闘の甲子園

米子市 池田美穂

すぐ欲しい私が入る冷蔵庫
火照ってる地球はもしや更年期
扇風機暑い暑いと首を振る
かかしにも塗ってあげたい日焼け止め

米子市 川本美津子

梅雨明けを予報どおりに知らず蟬
眼に見えぬ言葉の凶器忘れない
ささやかな外食をする年金日
心地よい田舎暮らしの田んぼ風

鳥取県 飯野菖子

崖つぶち生きて人生今がある
身についたマナーも親がくれたもの
生き生きと夢を果して看護師に
無我夢中種も仕掛けもなく生きた

鳥取県 門村幸子

終活を急ぐ気はあれど鈍い足
使い道ない壺なれど亡母の壺
末っ子がかわいがられて根が甘い
やれやれと今日生き切って熱帯夜

鳥取県 下田茂登子

悩んでも川の流れに逆らえぬ
過去流す滝に打たれる八十歳
息子二人優しい言葉癒される
猛暑の中政治家の嘘腹も立つ

鳥取県 橋谷静江

精一パイ生きた証しを残したい
欲のない暮し八十路を生きている
家族皆留守で頑固な夫という
冷房の部屋に一日籠もりきり

鳥取県 橋本整

不器用な暮しを風に覗かれる
ふる里の山が私を待っている
白と黒並べて今日も呆け防止
頑なに生きて寝酒が止められず

松江市 相見柳歩

さわやかな裏で涙をふく男
想像をひろげひろげてパラダイス
川柳を雑な俳句にしないよう
映像はなくても浮かぶラジオ聴く

松江市 山根邦代

励ましが支えた今朝の目覚めよし
労りの言葉かけ合う心地良さ
糸切りのハサミ気儘なかくれんぼ
正座して記念式典涙拭く

出雲市 黒目 ひでお

一〇〇回記念球児のドラマ刻んでる
奥深い川柳詠んで日日常し
友が逝く終活よぎる読経の音
自分史に消えない汚点残してる

玉野市 片岡 富子

日記帳白紙の部分たまにある
蟬しぐれ聞ける内まだ異常無し
盆来ると故郷愛でに帰る友
真夏日に蚊の気配無し風も無い

岡山県 小野 美那子

流されてどんどん根性太くなる
決めるのはいつもあなたがいない時
役に立つ時はそれなり誉めてくれ
思ってる人はころよ物じゃない

竹原市 土井 輝恵

泥掬う夫八十路の背は丸く
サンダルの線を残して夏が去る
ヌートリアか猪なのか芋盗人
缶切りも断捨離出来ず笑われる

竹原市 六田 半徳

気温西日本過去二番目の暑さ
梅雨明けを待っていたよとセミの声
夫婦共水分補給忘れずに
今年こそカーブ勝ち取れ日本一

三次市 伊藤 寿子

神も仏もないのか天災無情なり
振りかかる火の粉覚悟で受けとめる
まだまだと自分をほめて今日を生き
オアシスは整体電気のリハビリ

山口市 青木 隆子

六十路坂無理無理無理の恋でした
ひとときのときめきでしたありがとう
歌うたい心の鬱を吹き飛ばす
母電話私メールが得意です

西予市 井関 はるえ

被災など他人事だと思ってた
重いほど人の情けを受けました
大洪水の怖さを思い知り
水電気止まり人とは弱いもの

高知市 三谷 松太郎

何にでも感動しだし要注意
スギ植えたあの頃でかい夢だった
詩の余白もつたいたいとメモにする
地方紙の死亡広告歳競べ

唐津市 岩崎 實

甲子園熱血球児の坩堝です
地域カラー炎暑に耐えて応援し
甲子園敗者は砂を持ち帰り
十七日間テレビ釘づけ甲子園

那覇市 前川 真
ロボットがこっそりと読む資本論

逆走の道に誰かが置く地蔵

古書店で僕の蔵書にめぐり逢う

玄関に立つ虫網が告げる夏

沖縄県 宮 すみれ

書き急ぎミスって悔し泣きべそ句

待ち時間言葉あそびに火が灯る

明日は雨洗濯盛りにスイッチオン

親切が誤解とけずに弾かれる

千葉県 廣 瀬 良 磨

この星が熱中症になっている

満月と静かに酒を飲んでいる

炎天下足の裏まで汗をかき

影法師うなる暑さに溶けている

静岡県 渡 辺 芳 子

この自然守って下さい地球人

生きる人傷つけ合うのはやめにして

戦争は一つも良い事何もなし

終戦日電灯かがやきホツとした

名古屋市長 富 田 末 男

思考力持って答を弾ませる

断捨離はしない宝と思うから

駄菓子屋の中で育った少年期

ハッキリの性格だから頼られる

名古屋市長 山 本 三 樹 夫

破滅するギャンブル法に幸は無い

行政の嘘を政治が正せない

現実逃避が出来ぬ荷物しよい

信念捨て利益で動く族議員

江南市 脇 田 雅 美

前は外車ほどほどにとる車間距離

足腰を鍛えておけば世話いらず

ところてんむせないように箸二本

半端じゃない四時間待ちの医者通い

豊橋市 西 郷 紀 美 代

姑息的自業自縛の後始末

ほっとする路傍の仏写真展

蟠り良くも悪くも盆の風

砂浜で落とした鍵は諦める

豊橋市 高 柳 閑 雲

不義理した昔が脚に絡みつく

反省の許しを乞うて海が風ぐ

そっとしておこう昼間っからの酒

舞鶴市長 伊 藤 恒

さよならを言いに来たのか夢枕

まっかつか天気予報が燃えている

御婦人の視線にはっと専用車

惚れたらば男の意地も飛んでった

大阪市 田中廣子

西郷せごどんのような政治家でてほしい

青い空飛行機雲が美しい

学ぶこといくつになっても楽しみだ

年重ね学ぶと忘れくり返す

大阪市 前川善之

大相撲優勝するも運がいる

サッカーも勝敗分けるキック力

天神祭盛り上げるギャル御輿

神様も祭大好き大花火

大阪市 松田聰

フラダンス老いて楽しむ仲間持つ

国会の在りよう怒るらし自然

勝ちすぎて緩みがめだつ自民党

降り方の想定外が多すぎる

池田市 太田省三

霊柩車別れつのならすクラクション

一つ屋根の下で二人に時差がある

年齢はBCGの痕に見え

方言の通訳果たす標準語

泉津市 磯野不二夫

同性を悪く言うほど堕ちてない

冗談と断りながら本音入れ

秋風にやぐざ映画が恋しくて

来ましたよ抜け毛難聴眼のかすみ

堺市 古川光雄

朝散歩近所のお宮に頼みごと

会議室昔は紫煙が満ち溢れ

膝笑う時代は過ぎて今痛む

口喧嘩後の無口が気づつない

吹田市 岩口のぞみ

夏休み早く終われと妻嘆く

渡航者数たまにはうちも入りたい

花火して初恋の夏思い出す

気がつけば秋刀魚も今じゃ高級魚

高槻市 三谷白黒

暑くても呑み会だけは参加する

満点でなくていいのよ人生は

想い出の中ではいつも主役です

一日はメール打っててほぼ終る

豊中市 貝塚正子

生きるため食べているのによく太る

達観は諦めなのか悩む日々

白内障術後に期待新世界

耳の穴通り抜け行くお説教

豊中市 源田啓生

好きだよに気は確かと妻が言う

狂って来た俺も地球も同じだな

絶滅を危惧しやっぱりうなぎ食う

お前農過ごして来たは五十年

羽曳野市 磯本洋一

核のゴミ捨て場知らぬと永田町
八十も九十も春花が咲く

倦怠期茶の間に今日も居座りて
豪雨禍の復興願うポランティア

寝屋川市 岡本 勲

わかつてるような顔してみてるムンクの絵

この辛さ妻の怒りのバロメーター

口だけのテンポのよさがわざわいし

あと少し泳ぎ切れるか傘寿坂

枚方市 坂本 ミヨノ

もの忘れ笑いとばしてすぐ忘れ

盛付けは出来物買ってすましてる

趣味楽し寿命延びます歌ってる

白寿まであと幾年か梅漬けた

枚方市 谷 英也

卒業とは別離の事と悟ったり

鯉のぼり我が家もいるとはためかす

空梅雨で雨乞いしてるカエル君

早よ行けと箱入り娘せつつかれ

八尾市 田邊 浩三

温暖化春夏秋冬奪うなよ

曾孫来てパッと明るくなった家

淡い味コクを秘めたる京料理

泥水の中でも元氣カエルの子

八尾市 山川 寧

さぼったらアカン認知症攻めてくる
交通費半額のうちまた来いや

兄弟喧嘩一番うるさいママの声
熱帯夜クーラー悲鳴あげている

大阪府 高木 道子

最高の温度を競う棒グラフ

晩学の森を彷徨う誤字脱字

焦げる夏ボーフラ達も身が軋む

嵐とは解せぬ風鈴おおさわぎ

大阪府 中内 孚彦

ドンを生む体質どこに民主主義

為政者という人災も天災と

朗らかに笑ろて空虚さ埋めている

こどもの日あるが親の日ありません

大阪府 畑中 節子

何もせぬ事に疲れて日が暮れる

無農薬野菜売場の道の駅

道の駅噂持ち寄る夏帽子

畑仕事野菜に生氣貰う老い

ひとこと募集

一行15字 25行まで 採否は編集部に一任の事

誹風柳多留一二篇研究 64

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子

清 博 美

542 鳥にだもしかず納豆汁ができ

小栗「鳥にだもしかず」は、「大学」(伝三章)「可以人而不如鳥乎」(人をもってして鳥に如かざる可けんや)のもじり。「納豆汁」は、納豆をすりつぶして味噌を加え、だし汁でのばして豆腐やネギなどを実にした味噌汁(「日」)。

鴨の骨を叩く音と納豆を刻む音を取り合わせた類句多数の一。

鴨は肉を賞味するほか、骨を細かく叩いて汁に入れたらしい。

ほねハみちんにくだかれて芹を入

この鴨の骨を叩く音と納豆汁にする納豆を

八四二五

543 九州にはびこる鳥を鎌で切

清 賛。

刻む音とが紛らわしいので、音を聞いた近所では「豪華にも鴨の調理をしているのか、あるいはいつものように納豆汁を作っているのか」と耳をそばだてることになっている。

納豆だ鴨だと隣り論ンが干す 一二九二六
鴨歟イヤ納豆歟のといらぬせわ 一三三七三〇

主題句はこのテーマを「大学」のもじりで作句したもの。もじりが分かればそれまでだが、句意は、同じような音を立てたが鳥には及ばない納豆汁が出来たということ。

納豆のかもにハた、きまける音ト 天三松二

小栗 竹田出雲作の浄瑠璃「大内裏大友真鳥」(享保十年初演)の句のようである。

お話しは、九州の探題である大友真鳥が神社仏閣を破壊する暴虐を行っていることが朝廷に知らされ、真鳥の甥の兼通が討手を命じられる。ところが真鳥が兼通の父雅道を人質に取ったため兼通は窮地に立つが、母の雲井御前が兼通の双子の兄弟である助八(捨て子にされ、百姓になっていた)を兼通の身代わりとして首を刎ねる。兼通は助八になりすまして機を窺い、やがて真鳥を討つ。

こういう経緯から、

やつす布子も我レが名も助八と成ル百姓
姿。刀に代ゆる草刈鎌かねの鍛ひは鈍くとも……

という次第で、兼通は鎌を武器に真鳥を討つのである。

真鳥からくと笑ひ(略)、どうどと蹴
倒し膝に引つ敷く。左右より虎王五郎又
さしつたりと取付くを、ひとつにつかんで打重ね既にかうよと見えける後へ、兼通ぬつと現れ出、髻を引上ウ逆手鎌、あへなく落たる真鳥が首……。

主題句は、このストーリーをやや謎めいた形で句にしたもの。

清 賛。

544 ぬす人を大根からい目にあわせ

小栗 お馴染み「徒然草」(第六十八段)大根武者の句。贅説を要しまいが、大根を愛用していた筑紫の押領使が盗人に襲われたとき、大根が武者となって現れて追い返したという話。「大根」と「辛い」の縁語が取り柄。

辛き目を見せてくれんと大根武者 五四9
大根武者は是くつきやうのかうの物 三九10
敵を先おろしてかゝる大根武者 六二3
清 贊。

545 たから船日本からも忝人のり

小栗 宝船に乗っている七福神の中、一人は日本人だという意で、えびす神のこと。
七福神の出自は以下の通り。

福祿寿・寿老人 南極星の精。中国の道教に由来する。
弁才天 インドの女神。音楽と弁舌の神。

毘沙門天・大黒天 インドの神に由来し、ともに仏法守護の神。

布袋 後梁の實在の禪僧契此。
えびす神 西宮の主神で事代主神ともされ、あるいは蛭子が海から漂着してまつられ

たものともされる。「世界大百科事典」(平凡社)
異国本朝割り込みのたから船

清 贊。 別中15

546 美しひ顔でれいしをやたらしくい

小栗 「荔枝」は中国の果実。「和漢三才図会」(東洋文庫)に「果肉は生のときは白く、乾くと紅になる。漿液は甘酸っぱくて、醴酪(甘酒や乳酪)のようである」とある。

美しい顔で中国産の荔枝をやたら食う人といえは楊貴妃。因みに「玄宗軍談」には、「中にも民間の痛となりしは、貴妃常に荔枝を好んで食せり。此れ復嶺南の果物なるにより、京洛の近き辺に無し」とあって、楊貴妃が我が儘放題に遠方から取り寄せる様子が記述されている。
主題句はこんな本を材料にしたものかもしれない。

(この句は、至文堂「江戸川柳のからくり」に書いたのでご参照願いたい)
双六のそばにれいしのうつつかさ 一三37
ろくさんと書いてれいしの遣ひもの

清 贊。

安六仁3

御茶壺のよふに驪山へ荔枝来る 三九26

547 なんぞ名の有べきものをからす瓜

小栗 もうちょっと何とカマシな名前が有りそうなののに「烏瓜」とはねえ、という句。どこが似て誰名を付たからす瓜 七〇8

も、同様の句であろう。同じような構成の句に、
なんぞ家名もあるうのにみたおし屋 一九ス7

まくら言葉もあるうのにそんりやうや 二二12

外に家名もあるうのにしもふた屋 五八34

名も有ふのに無遠慮な榮螺堂 一三〇13
など。

「烏瓜」の名は、「和漢三才図会」に「熟すと鴉が喜んでこれを食べる。それで老鴉瓜(ろうあか)という」とある。

伊吹 贊。花や実とは可憐でありますのに。
山田 贊。しかし鳥の他は食べないのですかねえ。

清 贊。余り旨そうには見えぬ木の実。実際にも不味い木の実だと思いますよ。

平成三十年度 路郎賞



岡山市

永見心咲
ながみみさき

線引きはうまいが円が描けない

風船になりそこなつたまま浮かぶ

さよならと言えば振り向く人ばかり

突っ張っているが角砂糖は溶ける

満月を飛び越えていく女の背

天来の福音を聴きました。熱波に苛まれた晩夏に受賞の報をいただき、驚きと同時にボルテージも急上昇。素人のまま立たされた足は震えており

ます。平素より自分の中に傍観者たるワタシを置いて作句しておりますが、思うに任せられません。

どうぞ塔の皆様の変わらぬご指導を賜ります様お願い申し上げます。そして、選者の皆様に心より感謝申し上げます。

柳歴

平成二十三年 川柳塔 誌友

平成二十七年 川柳塔賞準優秀作

平成二十七年 第一席受賞

平成二十七年 川柳塔同人

平成二十八年 岡山川柳「塾」入会

路郎賞準優秀作第一席

松山市 栗田忠士

反骨の鬼一匹を飼っている

徒手空拳素っ裸には素っ裸

一輪挿しほどの夢なら持つている

脱線を繕いながら生きてきた

愚直という旗を一本持ち歩く

路郎賞準優秀作第二席

松江市 石橋芳山

正論が人格までも食べていく

月を見ろ月に吠えてる俺を見ろ

面白くしろよと棒を渡される

お前には無理だと結び目が固い

甘いとこばかりを見せている明日

路郎賞準優秀作第二席

大阪市 平井美智子

夕暮れの街で迷子になっている

少しずつ捨てる淋しくないように

柔らかくなるまで今日を採んでいる

重ね塗りしたらまだまだ良い女

煌いていよう私は美しい

平成三十年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

尼崎市 清水 久美子

鉛筆の芯が丸いと案が出ず

ハンドルの遊びぐらいは羽目外す

死生観持たずにありのまま生きる

ちよつとした美人に見える眼鏡買う

終活へ一直線のレール敷く

川柳塔賞準優秀作第二席

大阪市 森 廣子

嬉しくてトイレカバーを春にする

天翔るお誘いの笛軟らかい

今夜だけ恋人にするお月様

本音の中で粉雪が舞いあがる

焦ったら虹の階段踏み外す



大阪市

小野の雅美

欲望を抑える蓋は甘のまま

見た目ほど浅くなかった胸の傷

殻ひとつ破れぬままに朽ちてゆく

三日月にぶらりと揺れる片想い

少しだけ輝きたくて爪飾る

川柳塔賞のお知らせにビックリしております。

惜しみなく川柳の基本からご指導頂いている

先生、先輩の皆様には心から感謝申し上げます。

軽い気持ちで始めた川柳に今は救われています。

本当にありがとうございます。

柳 歴

平成二十八年 川柳塔すみよし入会

平成二十九年 川柳塔社誌友

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 121名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点
(表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸	3	4	5					2			1				
新家 完司	3				5	1		4							2
福士 慕情		4		2				3						1	5
松山 芳生	4				1				2		3				5
米澤 俣子	3			2					5			4	1		
柿花 和夫	3		1	4								2			5
伊達 郁夫				1			2	4				5	3		
片山かずお	2		5	4			1	3							
古久保和子	3					4	1				2				5
堀 正和		4	5						1			2		3	
黒田 茂代				5			1		3			4	2		
森山 盛桜							1		3		4		2		5
中居 善信			2	4				5		1				3	
計	②1	12	18	②2	6	5	6	②1	14	1	10	17	8	7	②7
	石橋芳山	藤井智史	福田好文	栗田忠士	丹下凱夫	山田耕治	川名洋子	平井美智子	渡辺富子	太田扶美代	栃尾奏子	松尾美智代	鴨谷瑠美子	両川無限	永見心咲

川柳塔賞得点表 (応募総数 52名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点
(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸					5		1		2	3	4				
新家 完司		5						4		3	2		1		
福士 慕情	4		2		5					3					1
松山 芳生	2				5			3						4	1
米澤 俣子	3				5				2	4				1	
柿花 和夫					3			2		1	5			4	
伊達 郁夫	3				2				1		5			4	
片山かずお	4		1						3	2		5			
古久保和子	1				5			2		3				4	
堀 正和		2							5			4		3	1
黒田 茂代			1		5			4			3			2	
森山 盛桜		2			3	1				5				4	
中居 善信	2							1		4	5		3		
計	19	9	4	0	38	1	1	16	13	28	24	9	4	27	2
	伊藤良一	太田省三	木藤こみつ	池田美穂	小野雅美	相見柳歩	笹重耕三	郷田みや	大前安子	清水久美子	坂本星雨	藤田千休	門村幸子	森廣子	助川和美

受賞作品

河内長野市 原熊知津子



原熊知津子

完璧でブレがないから訝しい
席譲る機能忘れてきたスマホ
キヤツシユレスぎゅつと掴めるものがない
時代追うことに疲れた裏通り
お利口な若者が増えつまらない

評 原熊知津子：「完璧な人」や「スマホ」「キヤツシユレス」
「裏通り」などに対する見解に独自性があり、説得力もあるの
はその観察眼が正確であることを示している。
都倉求芽：タクシーに対する「あたりまえの見解」。スマホ
に対する「皮肉な想い」など、川柳の面白さの「鯉のほ
り」などに向けている視線こそ「川柳眼」である。
平賀国和：誰もが見過しがちな「絵馬」や「埴輪」「鯉のほ
り」などに向けている視線こそ「川柳眼」である。
木藤こみつ：危ういことを忌避せず、率直に吐露している
姿勢を買う。心を晒す勇氣もまた作句の力。（新家 完司記）

準賞作品

京都市 都倉求芽

タクシーも地下街までは来てくれぬ
スマホなしでも退屈はせぬ車中
反対派いつの間にもやら僕一人

大阪市 平賀国和

異国語の絵馬で賑わう法善寺
縄文のビーナスまるでピカソ作
熟年にも元気をくれる鯉のぼり

豊中市 木藤こみつ

失恋したら東尋坊へ行く
転落防止柵できて自殺のできぬ駅
私には浮いた話が多すぎる

柳歴
平成二十七年 長柳会 入会
平成二十九年 川柳塔 誌友
長柳会 退会

一報が入った時の激震！
マシンガンを浴びる衝撃といえはいいのでしょうか。
留守電に入っている理事長の生の声に、こんな事が起
こつていいのかと元々とつちらかっている頭が興奮と感激で
こんがらがってしまいました。元に戻るまでしばらく時間
が掛かりそうです。ありがとうございます。
長柳会の村上直樹代表とそのメンバーそして川柳塔誌か
ら多くの刺激を頂きました。感謝いたします。

賞 樣 檯 平成三十年度

受賞作品

ふわふわと掴みどころのない自由

大阪市 平井美智子

評 一年間、たくさんの力作に接し勉強になりました。男女の共選は両者の感性、視点の違いにより一致することは殆どないだろうと思っていました。くにごさんと一致したのが受賞句でした。受賞句 社会的秩序を乱さぬ限り、心のまま、意のままに行動する自由、さすがに唸らせる作品だと感心しました。準賞の句、候補の句とも心情的に共感を覚える素敵な作品でした。

評 受賞されました皆様おめでとうございます。共選を一年間させて頂きましたが、二人で同じ句を秀句に選ぶことはほぼありませんでした。ただ、平井美智子さんの句は二人で二度取っていました。子育てでも仕事も終えた安堵と心もとなさ、そして誰でもが感じるであろう少しの不安。それを「掴みどころのない自由」との表現が秀逸です。準賞句には外連味の無い味わいを候補作品には新風を感じます。(斎尾くにこ)



平井美智子

思いがけない嬉しいお知らせに思わず一年間の入選句を思い出そうと試みたのですが……。
未だに実感はありませんが、明日へのエールになる素敵な御褒美と喜んでおります。
本当にありがとうございました。

準賞作品

吐き出して仕舞えば風が柔らかい

米子市 竹村紀の治

浮いている個性が成してきた偉業

下松市 有海静枝

候補作品

猛暑日の寺に如来像の色香

沖繩県 森山文切

時化のあと浮き輪が一つ流れ着く

桜井市 安土理恵

柳歴

平成二十六年 川柳塔誌友
平成二十九年 川柳塔同人

受 賞 作 品

奈良県

渡 辺 富 子
わた へ とも 子



渡 辺 富 子

評 本賞の富子さんの句、凛とした生き方が、冬木立に象徴されている。作者の敢然と寒さに立ち向かう姿勢までが示唆されていて気持ちの良い句。
準賞の静枝さんの句、新しい本をめくるその一瞬のときめきや期待を、五感を研ぎ澄ましてと素敵な表現。
同じく準賞の修さんの句、ベテランにしてなお氣力の充実した生き方を見習いたい。
評 本賞の富子さんの句、榮華を誇っていた樹々が、冬の季に入ってもどつしりとした冬木立を見せている。人間社会にも通用する冬木立に深みを感じた句です。準賞の静枝さんの句、全く力みのない作品構造になっています。設定というか見つけがよい句ですね。準賞の修さんの句、自分の命は自分で決めるという思いに辿りついた素晴らしさ人生に味をそえてくれることでしょう。
(政岡日枝子)

準 賞 作 品

新刊をめくる五感を研ぎ澄まし
百歳を定年と決め生きていく

ありうみ 静枝
よしか 修

候 補 作 品

話せばわかる同じ血が流れてる
死ぬまでは母は守ると過疎も城

おたふみよ 太田扶美代
みづら 三浦 強一

唐古遺跡の近くに住んでいる。田畑を掘り起すと、弥生土器のかけらが出てくる。唐古池の周りには桜が植えられ、春はピンクに染め、秋は紅葉が楽しめる。冬はすっきり葉を落とし枯れ果てたような冬木立になる。
老いを意識し始めた私は、しがらみを捨て去ることはできないが、少しずつふるい落として私なりの冬木立で春を迎えたいと思っている。
どうぞよろしく願っています。

柳 歴

平成 五年 郡山川柳会
平成 十一年 川柳塔なら入会
平成 十二年 川柳塔同人
平成 二十二年 路郎賞準優秀賞受賞
平成 二十七年 檸檬賞受賞

平成三十年度 各地柳壇賞

受賞作品

弘前市 稲見 則彦

満月がしんなりもたれかかる帰路

評 帰路につく作者の背後から寄り添うように優しく、柔らかに照らす満月。その気配を受け癒されている作者である。その時の情景と心理描写が、思いもかけない適切な言葉によって表現され、秀逸である。準賞の句、満天に煌く無数の星を見つめる瞳には純粹な宇宙の神秘への畏敬の念と、憧憬がある。次の句、過去の失敗を見直す作者の余裕を、ユーモアのセンスから伺えて好ましい。

(藤村 亜成)

評 毎月二人の選者により選ばれた佳句二百四十句の中から特に心に響く句を選びました。受賞句は、しんなりに作者の想いがあり心満たされた帰り道での感情が素直に伝わってきます。準賞2句、現実と非現実を融合させた巧みな表現に惹かれました。(山本希久子)



稲見 則彦

川柳を始めて十年が経ちました。やや情性で作句している今、この受賞の報はとてつもない程の活を、私に入れてくれました。拙い一句ですが、私にとつては宝となりました。至上の喜びです。ますます、毎月の句会が楽しみとなりました。川柳を友としてよかったです思っております。

選者の皆さま、有難うございました。

準賞作品

星くずを食べた瞳だ澄んでいる

中川ひろ介

過ぎた日を揺すれば悔いが落ちてくる

杉本 義昭

候補作品

神様よ補聴器付けて聞いてくれ

寺本 実

虚実混ぜ今日の私を醸し出す

小野 雅美

心の奥の山がなかなか越えられぬ

小林 わこ

ブライドと一緒に散ってゆく桜

吉田 吹喜

柳 歴

平成二十一年 川柳塔誌友
平成二十三年 川柳塔同人

受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成30年度の六賞を受賞される皆さま、おめでとうございます。

極暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で第一次選考会を開催いたしました。第一次選考委員が、それぞれ路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から秀句、佳句をチェック、その中から私が最終の15名を選んで第二次選者の皆さまにお願い致しました。

路郎賞の永見心咲さんは、各地の大会で選者もされている実力者です。準賞の忠士、芳山、美智子さんも毎月川柳塔へ佳句を発表されています。

川柳塔賞の小野雅美さんは、川柳塔みちのく大会でも佳句を発表されていました。準賞の久美子、廣子さん、今後の活躍を期待しています。愛染帖賞の原能知津子さん、檸檬賞の平井美智子さん、一路賞の渡辺富子さん、各地柳壇賞の稲見則彦さん、おめでとうございます。

今回の六賞は、ベテラン作家の活躍が目立ちました。中でも平井美智子さんは、路郎賞準賞と檸檬賞のダブル受賞でした。

路郎賞、川柳塔賞の応募は、一年間の自分の作品を振り返る良いチャンスだと思えます。多くの皆さまの参加をお願いします。

二賞選考経緯

西出 楓 楽

日向に出ると溶けてしまいそうな酷暑の中、例年の通り8月12日午前10時から、川柳塔事務所です平成30年度2賞の1次選考が行われた。

メンバーは蘭幸主幹、完司理事長、朱夏副理事長、私。

路郎賞12名、川柳塔賞52名の応募は、在籍者の数から言って残念さが否めない。

この選考方法が始まった平成11年度の応募者数は、路郎賞25名、川柳塔賞123名。それからちょうど20年目に当たる本年度まで、右肩下がり状態が続いている。

「私なんかに応募しても…」とためらう人があるやに聞くが、誰にとつてもチャンスは平等、1年間の作句を振り返る意味でも、来年はぜひ全員応募して下さい。

作者の名前を隠して5句全てを評価したものを、選者各自がチェック。その数が多い中から、蘭幸主幹に15名に絞ってもらった。

早速、13名の2次選者に郵送。20日の開票結果が発表の通りとなった。

2賞並びに他の4賞の皆様にご心からお祝い申し上げます、今後もご活躍されますよう、大いに期待しています。

二賞候補者在住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	松江市	笠岡市	三田市	松山市	岡山市	尼崎市	八王子市	大阪市	奈良県	藤井寺市	大阪市	豊中市	藤井寺市	鳥取市	岡山市
川柳塔賞	福井市	池田市	豊中市	米子市	大阪市	松江市	三原市	松山市	鳥取市	尼崎市	門真市	豊橋市	鳥取県	大阪市	泉大津市

英語 de Senryu ⑧②

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

電車賃もないとは無心哀れなり

*such a pity
he has no money
to ride a train*

焼箸で晝を澄ました 顔もせず

*eating sweet potatoes
for lunch
he pretends that he had a good meal*

pity 哀れな *ride* 乗る *train* 電車 *eat* 食べる *sweet potato* サツマイモ
lunch 昼食 *pretend* 装う *good meal* ご馳走

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句②

一人バンドで著名なミュージシャン Arthur Nakane(アーサー中根)

アーサーさんは日本国内ではあまり知られていませんが、ミュージシャン、シンガーソングライター、シナリオライターとして米国では著名な日本人であり、日本語俳句の翻訳者でもあります。彼は一人で楽器を制御する *one-man band* を、ロスのリトルトーキョーを中心に演奏しています。ポップ、ロック、オールディーズ、フォーク、ウェスタン、カントリー、ラテン、ハワイアン、日本歌謡などを 1000 曲以上も歌います。*Secret Asian Man* というドキュメンタリーフィルム (2000) やテレビの *America's Got Talent* (2010) でスターになりました。日本でも彼の雄姿をユーチューブで見ることができます。ほぼ半世紀にわたってアメリカに暮らしながらもアーサーさんの生き方に、私は少し上の世代の姿が交錯します。今回は私宛に送られてきたアーサーさんの俳句・ハイクを紹介しましょう。

thirsty homeless man/ begging for money to buy/ Coca Cola drink
(のど乾き・コカ・コーラねだる・ホームレス)

disappointing food/ delays my decision on/ gratuity I leave
(口合わぬ・料理でチップ・出し惜しむ)

work of abstract art/ have no time to figure out/ meaning of the theme
(抽象画・考えてみる・ヒマは無し)

愛染帖

新家 完司選

(投句279名)

三田市 東内美智子
齒ざしりのひどい子なのに嫁が来た

(評)「お嫁さん、来てくれるのだからか…」と、ずっと気がかりだったがひと安心。「縁は異なるもの味なもの」末永くお幸せに!

宝塚市 丸山 孔一
自動車を手放し街が見えてきた

(評)運転中には細やかな景色など見えない。横丁を歩いていると「おつ、洒落た茶店…」等と発見の連続。新しい世界の出現だ。

鳥取市 前田 楓花
一匹のハエを二人で追い回す

(評)昔は一発に仕留めていたが、だんだん命中しなくなってきた。「へたくそ」「ドジ」と言い合いながら仲良くウロウロ。

神戸市 細川 花門
暑くても我慢してたら救急車

(評)命にかかわる危険な暑さが続いた夏。「水を飲め」「エアコンをつけろ」等の命令を無視した頑固爺さんはとうとう救急車。

佐賀県 真島久美子
酒の匂を出せと悪魔が囁いた

(評)「あの選者は酒の匂を出すと抜く」と耳元で囁いたのは天使、ではなく悪魔。確かに、「天」で抜けてもチヨイと後味が悪い。

鳥根県 原 徳利
モノリザの笑みは鮎玉舐めている

(評)そうか、世界中の人々が「謎の微笑」と噂していた口元の奥には鮎玉が入っていたのか。五百年の疑を解いた大発見!

上尾市 中村 伸子
火星接近だからどつどつという話

(評)肉眼でも大きく見えると騒がれた「火星大接近」。しかし、火星人に攻撃されたわけでもなく、日常生活には何の影響もなし。

芦屋市 竹山千賀子
切る爪に八十年の音がする

(評)八十年の間つつがなく伸び続けてくれた爪。来し方を想いながらプチンプチン。あとどれぐらい息災でおれるだろうか。

堺市 加島 由一
婚活はうまくいったか蟬の殻

(評)地上に出て脱皮してから必死にラブコールする蟬の雄。その内の三分の一は目的を達することが出来ない。自然界は厳しい。

西宮市 緒方美津子
どこからでも帰ってくる酔っぱらい

(評)どこをどうして帰ったのか? 当人は

覚えていないが無事にご帰宅。へべれけでも帰果本能だけは微かに残っているらしい。

東大阪市 北村 賢子
八月の空は歴史を悔いている

八尾市 前田 紀雄
原爆忌棒読みをする安倍総理

鳥取市 奥田 由美
半日で献花ぐつたり八月忌

米子市 中原 章子
温暖化危惧した暑さやってきた

堺市 澤井 敏治
クマゼミの鳴き声とめる40℃

米子市 池田 美穂
四十度日本丸ごとサウナ風呂

箕面市 中山 春代
エアコンを着て歩きたい四十度

羽曳野市 宇都宮ちづる
日焼け止めいつもの倍で物干し場

岡山市 丹下 凱夫
日中はイオンモールへ避暑に行く

豊橋市 小松くみ子
この暑さ赤信号も憎らしい

豊橋市 藤田 千休
沖繩が避暑地に見える猛暑かな

松山市 柳田かおる
冷奴では無理記録的猛暑

高槻市 松岡 篤
この暑さ根性論で片付かぬ

日射病格上げされて熱中症
明石市 梶谷 和郎

何もかも暑さのせいと恍惚とく
西宮市 福島 弘子

忙と閑中ほどに居て暑い日々
三田市 北野 哲男

子の電話クーラー・オンにしているか
鳥取市 大前 安子

ためらわず冷房つけて籠る部屋
鳥取市 田中 天翔

見ぬ振りをするヒマワリのアスマスク
寝屋川市 伊達 郁夫

梅シロップでガンバルつもりだった夏
寝屋川市 龍島 恵子

この夏も体重計は故障中
三田市 上田ひとみ

敬称で呼ばれる寝間着甚平さん
米子市 成田 雨奇

墓洗うきれいい好きでもない父の
青森市 守田 啓子

ぼっと散るぼっと揚がった火花だもの
池田市 太田 省三

空襲の記憶を消したタワービル
池田市 太田 省三

相川はいつもトップだ出席簿
鳥取市 山野すみれ

酷暑ですいつそ今夜は夏の鍋
鳥取市 山野すみれ

初コオロギのんびり風呂のサービスね
熊本県 岩切 康子

蜻蛉からもうすぐ秋と来るエール
海南市 堂上 泰女

霞網張つてイケメンゲットする
尼崎市 清水久美子

給水の球児横目に冷酒飲む
松江市 石橋 芳山

愛着を感じてしまうオニオコゼ
松江市 石橋 芳山

たぶん俺内ポケットのゴミレベル
福原市 居谷真理子

半眼という冷たさよ盧舎那仏
福原市 居谷真理子

モナリザが笑いすぎてる複製画
豊中市 水野 黒兎

傘寿記念天保山に登頂だ
豊中市 水野 黒兎

不意に来て夕食すませ子ら帰る
鳥取県 斉尾くにこ

バルムドールにはなりそうもない実話
鳥取県 斉尾くにこ

帰宅してハットとお名前思い出す
豊中市 木藤こみつ

名古屋到着うどんのつゆはまっくらけ
豊中市 木藤こみつ

猫背にならぬように毎日ジャンプする
奈良市 大久保眞澄

おや君もかい第三者委員会
奈良市 大久保眞澄

書き換える隠すなかつたことにする
奈良市 大久保眞澄

歌仲間にはいないマイクの一人占め
鳥取市 岸本 宏章

鳥根との合区で誰も困らない
鳥取市 岸本 宏章

男だと妻が履かせた高い下駄
奈良県 中堀 優

言った言わん聞いた聞かんで日が暮れる
河内長野市 大島ともこ

ナビと妻引き返さない謝らぬ
福井市 伊藤 良一

一言で僕をびびらす妻の声
岡山市 折鶴 翔

シルバーも命知らずの踊り連
玉野市 片岡 富子

お買い物妻の夏バテ解消法
京都市 清水 英旺

亡き夫が手招きするがお断り
三田市 馬場貴美江

オアシスは超高層の隅っこに
河内長野市 山岡富美子

独り身はベランダ野菜で夏越せる
寝屋川市 川本 信子

中の下の暮らしてウナギ年一度
横浜市 菊地 政勝

とりあえず今日は元氣だ飯うまい
米子市 伊塚美枝子

カロリーハーフつられて買って倍食べる
奈良市 辻内げんせい

メロンより西瓜ええねん知つといて
大阪市 柴本はつは

食事会みんな幸せ色になる
三田市 足立つな子

池田市 上山 堅坊
激務の日日終えてのどかに一行詩

三田市 野口真桜子
穏やかに過ごしたいのに句に追われ

大阪市 内田志津子
作句する意気込みだけで終わる午後

羽曳野市 吉村久仁雄
人間が未熟川柳に教えられ

河内長野市 原熊知津子
羽ばたけと十七音に叱られる

大阪市 平賀 国和
花へんろドラマの節に五七五

篠山市 二階 幸子
川柳に浸れば退屈頭上とぶ

箕面市 広島 巴子
頭から湯気出し作句四苦八苦

鳥取県 細田 裕花
誤字脱字猛暑のせいにしておこう

岸和田市 雪本 珠子
ポキャブラリー身に付き作句こなれだす

鳥取市 山下 凱柳
上手い句だ自画自賛して没食らう

宇部市 平田 実男
挨拶は五七五で締めくくる

広島市 松尾 信彦
趣味の会最優先の妻の留守

黒石市 北山まみどり
鏡見る自己満足でいいじゃない

弘前市 高瀬 霜石
飲んべえの土産豆腐と決めている

京都市 都倉 求芽
もめんでも絹漉しても豆腐なら噛める

大阪市 古今堂蕉子
十年で一万回も食事する

唐津市 仁部 四郎
学校の力不足を衝く自殺

海南市 小谷 小雪
いい糊だ思い通りに貼れている

神戸市 奥澤洋次郎
猛烈が大変好きな気象アナ

熊本市 杉野 羅天
天災へやはり地盤という力

大阪府 米澤 淑子
火葬場の子約要るかも私達

沖繩県 森山 文切
乙姫に薄めの布を売りつける

岡山市 永見 心咲
皺のないコーンを選ぶ肝斑の手で

高槻市 初代 正彦
留守電のピーに急かされ指に汗

大阪市 宇都満知子
買うつもり無い時出合うお気に入り

奈良県 安福 和夫
餌を運ぶ軒の燕はわが三十路

桜井市 安土 理恵
年ごとに秋の七草好きになる

尼崎市 山田 耕治
おやすみなさい月の絵文字が来るメール

鳥取市 倉益 一瑤
人形は喋らないから美しい

笠岡市 藤井 智史
偽物の神はゆっくり昼寝する

豊中市 藤井 則彦
文法も意味も通っている寝言

堺市 矢倉 五月
煩惱とまだまだ相撲とる八十路

松山市 栗田 忠士
体脂肪もないがお金も貯まらない

大阪市 大川 桃花
止め時をまだ悩んでるへアカラー

倉吉市 牧野 芳光
死んだ気になっても出来ぬものがある

三田市 久保田千代
迷わずに明日のお米研いでいる

門真市 坂本 星雨
転んだ後に危ないと言われても

紀の川市 楠原 富香
拾った財布一息ついて交番へ

高槻市 片山かずお
仔猫仔犬を見るところのほのする心

大阪市 津守なぎさ
母親にはぐれ小鯨迷い込む

松原市 森松まつお
日本国憲法少し読んでみる

青森県 香田 龍馬
太陽とお酒楽しむ定休日

大阪府 谷口 義
一身上の都合でビール飲んでる

弘前市 福士 慕情
誕生日 仏間で一人酒を酌む

富田林市 中村 恵
涙腺のブレーキ壊す独り酒

堺市 奥 時雄
二者択一は無理エアコンとビール

豊中市 松尾美智代
ビールなら一缶程が心地好い

三原市 笹重 耕三
適量という曖昧が好きなの

江南市 脇田 雅美
話題求めアンテナ立てて縄のれん

倉吉市 大羽 雄大
遠慮なく言い始めたら酔いはじめ

奈良県 渡辺 富子
ほろ酔いの話題はいつも安楽死

羽曳野市 徳山みつこ
へべれけに酔っちゃ吟醸に失礼

大阪府 江島谷勝弘
鉄則は飲んだら乗るな自転車に

堺市 羽田野洋介
飲みながら食べると量が多くなる

大阪府 平井美智子
今朝もまたゆうべの記憶消えている

大阪府 岩崎 玲子
呑むことにブレーキかけぬ夫が好き

香南市 桑名 孝雄
霊前にジョッキは供えてはくれぬ

朝霞市 前田 洋子
木のドアは白雪姫が出て来そう

伊丹市 延寿庵野鶴
花筏とぎれとぎれの言葉繋ぎ

和歌山市 土屋起世子
蜘蛛の巣をつくる様子を見て孤食

鳥取県 竹信 照彦
無人駅金が要るのは降りる時

西予市 黒田 茂代
電子辞書よりわたし向き国語辞書

富田林市 山野 寿之
若大将海の男ももう八十路

防府市 坂本 加代
資金力体力気力尽きるまで

宝塚市 太田としお
先輩と持ち上げられて飾りもの

沖繩県 禱 モモト
まどろみの観音様のスマホ声

米子市 生田 和之
粗大ゴミだから年金手放せぬ

岩国市 上村 夢香
イノシシが車の前を闊歩する

男鹿市 伊藤のぶよし
傍若無人トランプも台風も

河内長野市 村上 直樹
逆鱗に触れて学んだ師のころ

岡山市 大石 洋子
付度と愛想笑いの聞き合い

鳥取市 夏目 一粋
歳かさね閃き一つずつ萎む

大阪府 藤原千恵子
私は私独立独歩山野草

塩竈市 木田比呂朗
樹木葬安くしますと来たチラシ

河内長野市 木見谷孝代
オクラ程の粘りはあると信じたい

富士見市 中島 通則
ゴミ出しは化粧いらぬオレの役

岡山県 田中 恵
ゴキブリに客観く癖がある

三田市 福田 好文
超精巧な嘘発見器認可せぬ

鳥取県 門村 幸子
老いてなお楽あり「好き」の時間もつ

篠山市 長谷川善輔
雨上がり傘を忘れた場所忘れ

寝屋川市 森 茜
スーパード立ママチャリ屯する歩道

宝塚市 岸田 万彩
近所見てそつと日の丸出す旗日

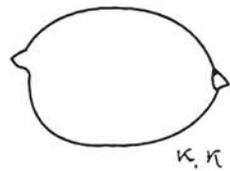
東京都 川本真理子
ここにきて住職の知り合い増える

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カッタとも)

(投句 365名)



レ、リ

「返す」川端 一步 選

引き返す切符持たずに嫁に来て
失った財布の返る国ジャパン
来た道を思い返している米寿
年金の家計引き算くり返す
繰り返す繰り返すまじ終戦忌
被災地に東北からのボランティア
返品したい似合うと言われ買った服
泣きながら返す五歳の口答え
ゴキブリもひっくり返る妻の声
はだしのゲンまた読み返す原爆忌
お返しに私を強くする読書
読み返す一泣きしたい独りの日
墓の守りこれも立派な恩返し
新しいお札で返す借りた金
勝ち組に乗って持論を裏返す

高槻市 松岡 篤
西宮市 緒方美津子
三田市 北野 哲男
橋本市 石田 隆彦
岡山県 大杉 敏夫
神戸市 能勢 利子
豊中市 木藤こみつ
三原市 笹重 耕三
岡山市 折鶴 翔
堺市 澤井 敏治
海南市 小谷 小雪
東京都 川本真理子
鳥取市 岸本 孝子
大山市 関本かつ子
三原市 鴨田 昭紀

「返す」山岡 富美子 選

返品はきかないからと義父の念
柔軟にカラーボールを投げ返す
子が果立つひよいと生まれてきたように
晴れた日に持って来ました借りた傘
丁寧にお答えできぬ訳がある
洗面器さつと素顔にしてくれる
手の平をすぐに返した秋の空
民意って何よ国会議員さま
金返す気がない友達のアイツ
一枚の舌を上手に裏返す
返されぬよう息子に仕込む家事育児
返すあてあればあなたに借りません
誰も見ていないところで返す恩
多過ぎるお釣りは返さなくていい
引き潮に夏の思い出乗せてやる

弘前市 稲見 則彦
富田林市 中村 恵
堺市 柿花 和夫
三田市 久保田千代
大阪市 近藤 正
羽曳野市 徳山みつこ
豊橋市 藤田 千休
弘前市 高瀬 霜石
松江市 石橋 芳山
紀の川市 宇野 幹子
櫻原市 居谷真理子
寝屋川市 岡本 勲
佐賀県 真島久美子
藤井寺市 鈴木いさお
弘前市 福士 慕情

この世にはドナーカードで恩返し 恩返しと思えば辛い介護 大波小波人に復元力がある 聞き返すたびに不信が増す政治 了解の二文字返してまた明日 手の平を返され踏み台だと気付く 愛してるへおでこコツンとする返事 カケさんは補助金返す度量なし 汚した分お返しに来る地球から 返納が出来ぬ赤紙もらったね お返しはありがとうだけ下さいな 遺憾ですこの返答に飽きました 返不用ふるさと納税被災地へ 炎天下真心返すボランティア 介護して親を見送る恩返し 逆切れの仁王に返す言葉なく 外野から矢の返球が予想外 握ったら握り返してきた絆 夜間教室文字取り返し生き直す 子が巣立つひよいと生まれてきたように 返す言葉ちゃんと言えればもう大人 照り返し足元からも攻めてくる 照れながらあいさつ返すランドセル	札幌市 紀の川市 土佐清水市 門真市 奈良県 堺市 尼崎市 堺市 大阪府 大阪府 大阪府 鳥取市 豊中市 和歌山市 西宮市 山口市 大阪府 河内長野市 奈良県 大阪府 篠山市 堺市 豊中市 八尾市 尼崎市	三浦 強一 楠原 富香 辻内 次根 坂本 星雨 中原比呂志 清水久美子 内藤 憲彦 江島谷勝弘 宇都満知子 平尾 菜美 池田 純子 福島 一雄 福島 弘子 青木 隆子 原田すみ子 黒岩 靖博 安福 和夫 平井美智子 長澤 喜弘 柿花 和夫 藤井 則彦 山根 妙子 藤井 宏造
---	--	---

森の深さが利息をつけてくる罅 逆上がり一閃空をうら返す おばあさんのハイはハイご勝手に 美辞麗句いただきお返しに困る 山彦にコンチクショウと返される ひかえめな母には返すものがない ハイはひとつ二つ言うから角が立つ 貸した金よりも大事な借りた金 アレのアレにこれのあれかと聞き返す 眼と眼合いとでも手の平返せない ライバルは返せない球ばかりだす 照り返し足元からも攻めてくる ひっそりと涙を乗せて返す波 ちよつとした物を挟んで返す本 この世での借りはこの世で返したい まだ来るな亡夫に言われ引き返す 自己嫌悪だけが残った倍返し 打ち返す言葉自分も傷ついた 父さんの昭和ちゃぶ台返しだな ふるさとは恩を返せと言いはせぬ 手の平を返され踏み台だと気付く 借りた本しつかり読んでから返す 愛してるへおでこコツンとする返事	松山市 大阪市 奈良県 堺市 岡山市 大洲市 香南市 堺市 河内長野市 河内長野市 大阪府 八尾市 八王子市 藤井寺市 倉吉市 岸和田市 大山市 大洲市 男鹿市 鳥取市 尼崎市 岡山市 堺市	柳田かおる 升成 好 大久保眞澄 矢倉 五月 工藤千代子 中居 善信 桑名 孝雄 坂上 淳司 藤塚 克三 梶原 弘光 原田すみ子 山根 妙子 川名 洋子 鴨谷瑠美子 牧野 芳光 宮野みつ江 金子美千代 花岡 順子 伊藤のおよし 池澤 大鯨 清水久美子 丹下 凱夫 内藤 憲彦
---	---	---

受けた恩しつかり返す志

香芝市 大内 朝子

返信をすぐに書きたくなる便り

三田市 堀 正和

誰も見ていないところで返す恩

佐賀県 真鳥久美子

元の姿にせな借り物の地球

朝霞市 前田 洋子

引き返す勇氣を試す冬登山

富士見市 中島 通則

一の矢を返す刀は胸のうち

唐津市 仁部 四郎

胸奥の怒涛沈めて返答す

青森県 松山 芳生

反抗期返事をしないのが返事

箕面市 出口セツ子

いのちみな未来のために地に返す

奈良県 渡辺 富子

会釈だけ返す仲です朝の駅

唐津市 山口 高明

民意って何よ国会議員さま

弘前市 高瀬 霜石

拾い球ワンバンでしか返せない

堺市 奥 時雄

山彦の様な人だな隙がない

鳥取市 吉田 弘子

笑顔には笑顔で返すいい仲間

鳥取市 倉益 一瑤

長生きしよう命をくれた恩返し

東大阪市 北村 賢子

言い返す言葉は畳み持ち帰る

鳥取市 山野すみれ

そうでしよと無理やり返事強いられる

篠山市 久保木 剛

土を食べやがては土に返す骨

神戸市 富永 恭子

値切られて熟練のうで返り咲く

堺市 遠山 唯教

秀 句

逆上がり一閃空をうら返す

大阪市 升成 好

ゆつくりと相手見ながら返す球

三田市 上田ひとみ

ふるさとは恩を返せと言いはせぬ

鳥取市 池澤 大鯨

言い返す言葉は畳み持ち帰る

鳥取市 山野すみれ

呼びかけて響き返してくれる本

富田林市 関 よしみ

伸びる芽を摘んでいないか返し針

神戸市 山崎 武彦

完熟の夕陽をそっと送り出す

弘前市 高森 一吞

裏返す手間を惜しまぬ母となる

豊中市 池田 純子

強烈な皮肉を鉄面皮に返す

枚方市 藤村 亜成

「ハイハイ」のあつけらかんに腰砕け

横浜市 川島 良子

お返し無用そうですかとも言えず

大阪市 高杉 千歩

その中にお返しします我が命

高槻市 初代 正彦

穏やかに言葉を返し滾る胸

大阪市 森 廣子

汚した分お返しが来る地球から

大阪市 宇都満知子

「ハイ」とだけ小さく書いて返すメモ

大阪市 平井美智子

夜間教室文字取り返し生き直す

篠山市 長澤 喜弘

裏返す頃だな愛はパンケーキ

大阪市 栃尾 奏子

満月を繰り返す月憎いなあ

池田市 上山 堅坊

返事はないが只今と言っておく

米子市 竹村紀の治

ややこしいお話でした裏返す

大阪市 柴本ばつは

本棚に返し損ねたO・ヘンリー

南あわじ市 萩原 狸月

好きな道だから躓きくり返す

和歌山市 福井 菜摘

秀 句

ラブレター添削されて舞いもどる

西宮市 福田 正彦

一の矢を返す刀は胸のうち

唐津市 仁部 四郎

大波小波人に復元力がある

土佐清水市 辻内 次根



爬虫類

生き物の中でも人からあまり好感を持たれていないのが爬虫類でしょう。特に蛇が苦手という人は多く、私のブログで「散歩道で青大将に遭遇」と写真をアップしたところ、「気持ち悪い」蛇は写真を見るのも嫌い！」とメールが来たことがあります。どうしても載せたいときは「この文章の下に蛇の写真があります」と注意書きをしています。

早朝の散歩に蛇を驚かす

石田ひろ子

罪もない蛇がたいがい嫌われる

松本よしえ

六月の蛇きやしやだから怖くない

小谷 小雪

国道を横切り家に帰る蛇

安黒登貴枝

ふる里に信号無視の青大将

松井 湖青

長いまま死んで恥ずかしそうな蛇

小寺竜之介

何度でも轢かれて蛇は消えていく

丸山 進

散歩の農道でしばしば蛇に出会います。低体温で自分では体温を保てなく路面の温もりを吸収しているのだとか。

蛇としては「なぜ自分が嫌われているのか」は分からないでしょう。ただ、「人間は敵」だということを本能的に察知して、人を見つけたらサッサと草むらに逃げ込みます。その様子を見てみると、「驚かせてごめん」です。

人間社会の国道や車や信号がどのようなものであるかは理解していない蛇。長いまま轢かれて、何度も轢かれてだんだん消えていくとは残酷なことです。

恥ずかしそうに逃げる尻尾のない蜥蜴
 蜥蜴の子チヨロチヨロ僕とお留守番
 冬眠のヤモリに詫げる大掃除

村田 絹子
 武田 帆雀
 堂上 泰女

掃除機で吸ったヤモリが気にかかる
 標本のようにヤモリが腹を見せ
 生きてるか網戸の守宮突いてみる

足立千恵子
 広島 巴子
 大川 桃花

老いだけの家にヤモリが居てくれる
 トカゲやヤモリは蛇ほど長くなく足もあるのは、それほど不気味には感じません。チヨロチヨロ動く姿は「可愛い」とも思えるほどで、人懐っこくおとなしい種類のものは、ペットとして飼われているのも珍しくありません。

津田 暉

「イモリ」はヤモリと名前も姿も似ていますが、水の傍でしか生きられず爬虫類ではなく両棲類に分類されています。

亀も両棲類のように思えますが、幼生期から肺で呼吸できるので爬虫類とのこと。両棲類は魚類から進化して最初に陸

に上がった動物で、幼生期にはエラ呼吸とのことです。

田圃から拾ってきたと亀くれる
 生きようね三百円で亀を買う

池田 文字
 谷川 勇治

住み分けてのどかな堀に亀と鯉
 家出した亀の消息分からない

都倉 求芽
 太秦 三猿

ゾウガメがひとりぼっちのサヨウナラ
 トンボやら亀から習う生きる術

井上 森生
 太田としお

「鶴は千年、亀は万年」などと言われていますが、もちろんこれは張喙。ペットとして人気のあるミドリガメで寿命は20〜30年とのこと。しかし、ギネスに認定されている最長寿

はホウシヤガメの188歳とはちょっとビックリです。

「ネット」

(投句 233名)

川崎 ひかり 選



ストレスが排水のネットに溜まる
 ネットなど出来なくとも生きられる
 出不精のネット中毒患者です
 時は翼休めるネットカフェ
 ゆりかごから墓場までネット販売
 ネットで買う水も財布も仏壇も
 すんなりと粗い目抜ける法の網
 見えにくいネット社会の人の顔
 ぶかりぶかりネットの海に漂う子
 ネットから見えない顔が媚を売る
 ネットないテニスを一度してみたい
 ネットからズカズカ上がり込む他人
 ヘアネット被っています居留守中
 あの人に話せばネットから漏れる
 ネットカフェ企業戦士の唸り声
 うっかりとネット社会に迷い込む
 捕虫網夢追っかけた夏帽子
 回遊魚妻の投網に引っかかる
 ネットなら届けてくれて後払い
 軽井沢のネット清らに閉ず平成

沖繩県 森山 文切
 大山市 金子美千代
 河内長野市 中島 一彌
 神戸市 能勢 利子
 三田市 久保田千代
 朝霞市 前田 洋子
 大阪府 米澤 俣子
 神戸市 奥澤洋次郎
 藤井寺市 太田扶美代
 高槻市 富田 保子
 大阪市 大治 重信
 河内長野市 梶原 弘光
 鳥取市 福西 茶子
 大阪市 藤原千恵子
 大阪市 内田志津子
 東大阪市 佐々木満作
 倉吉市 大羽 雄大
 紀の川市 宇野 幹子
 大阪市 坂 裕之
 羽曳野市 徳山みつこ

アナログで育ちネットの世を泳ぐ
 安全ネットなし年金の網渡り
 住所からネット我が家を丸裸
 大根もスリムに見える網タイツ
 インターネットしてない僕は蚊帳の外
 詰め放題だけはネットで売ってない
 愛情に飢えてさ迷うネット上
 広がった世界ネットで狭くなる
 カラスとの戦いゴミの日のネット
 オレオレが進化し潜る法の網
 ネットしか話し相手の無い世代
 老い二人ネット社会の孤児になる

佳 句

ネットの隅かすかな風になり生きる
 網目からこぼれています自尊心
 過労死かマリオネットの紐が切れ
 死ぬ！なんて言われて死んじゃ思うつぽ
 ネットからひよいひよい摘まみ出す知識

人

情報の樹海で探す明日の地図

地

網の目をくぐって雑魚は生き延びる

天

メル友と友だちごっこしてひとり

軸

ネットからのぞく世相の裏表

和歌山市 福井 菜摘
 香芝市 大内 朝子
 大山市 関本かつ子
 豊橋市 藤田 千休
 鳥取県 竹信 照彦
 岡山市 永見 心咲
 和歌山市 土屋起世子
 弘前市 福士 慕情
 吹田市 須磨 活恵
 三田市 谷口 修平
 富田林市 中村 恵
 鳥根県 原 徳利
 大阪市 古今堂蕉子
 黒石市 北山まみどり
 三田市 北野 哲男
 弘前市 高瀬 霜石
 樺原市 居谷真理子
 富田林市 関 よしみ
 堺市 矢倉 五月
 奈良県 渡辺 富子

「爪」

(投句 232名)

杉野羅天選



爪に火を灯しながらも行く酒場
後何年一人で切れる足の爪
西日さす爪切りながら明日のこと
マニキュアに秘める恋です風の盆
生きている証を爪に教えられ
琴爪は古代ロマンを知っている
爪赤く染めて生きるも生きる道
力道山爪先立ちで観たテレビ
爪を噛む親の真似ではありません
カジノ場が爪を磨いて待っている
赤い爪戦闘モード漂わす
爪までは隠せなかつた角隠し
年金のくらしの中で爪を研ぐ
爪立てた情熱何処に捨てて来た
熱少し深爪して淋しがり
爪痕へ一日だけの視察団
諦めることあり爪を丸く切る
念を入れ過ぎて深爪してしまふ
何も塗らぬピンクの爪が目にしみる
タコ焼き屋の隣のネイルサロン客

池田市 上山 堅坊
和歌山市 福島 一雄
八幡市 今井万紗子
生駒市 飛永ふりこ
香南市 桑名 孝雄
大分市 榎本 舞夢
大洲市 中居 善信
富士見市 中島 通則
唐津市 仁部 四郎
奈良県 安福 和夫
東京都 川本真理子
奈良市 大久保眞澄
堺市 遠山 唯教
大阪市 若本 安代
大阪市 柴本ばっは
犬山市 関本かつ子
大阪市 平井美智子
和歌山市 武本 碧
豊中市 水野 黒兎
岡山市 永見 心咲

爪丸く切って介護をする覚悟
老いひとりひと日ひと日の爪のいろ
爪の要素髪に回すことできぬか
控え目のネイルに変えるお盆前
ネイルアートして来た妻に気付かない
深爪をして戦争は許さない
見るだけで主婦には要らぬ爪化粧
補欠でも爪切りすませ出番待つ
マニキュアを塗るとこの手も外が好き
子に意見し過ぎ深爪悔いている
辛辣な一言爪あとが痛い
肉球のそばに鋭い爪がある

佳句

青空へ蹄鉄の音響かせて
爪弾きの三味に教わる野暮と粹
胸倉を刺した尖った爪の数
老木の幹にカラスの爪の跡
爪染める愛する人がいるように

人

牙は無いせめて爪でも磨ぎますか

地

爪伸びる明日の命の保証など

天

爪研がぬ猫にねずみが跋扈する

軸

口触る指へ深爪してしまふ

香芝市 大内 朝子
富田林市 片岡知恵子
大阪市 江島谷勝弘
大阪市 高杉 力
大阪府 鈴木いさお
藤井寺市 藤井寺市
門真市 坂本 星雨
防府市 坂本 加代
男鹿市 伊藤のぶよし
三田市 久保田千代
札幌市 小沢 淳
大阪市 古今堂蕉子
榎原市 居谷真理子
弘前市 高森 一吞
豊橋市 藤田 千休
青森県 松山 芳生
沖繩県 森山 文切
藤井寺市 太田扶美代
弘前市 高瀬 霜石
佐賀県 真島久美子
横浜市 菊地 政勝

初歩教室

題一 びつたり

居谷 真理子

題の「びつたり」にこだわらなくても「きつちり」「ジャスト」「びつちり」「丁度」、似た言葉はたくさんあります。句の内容に応じて使い分けましょう。また「びつたり」を使わず「びつたり」の様子を詠んでみるのもいいですね。

(原は原句 参は参考句)

原文案の息びつたりの語り口 (田) 廣子
参義太夫の息人形の息となる
原理想だが阿吽の呼吸ない夫妻 紀美代
参夫婦です阿吽の呼吸ないままに
原びつたりとメロンを切った母の芸 和之
参七分メロンを切った母の芸
原びつたりと愛の照準七十点 一平
参七十点ほどが丁度の愛し方
原びつたんこ時々ずれる時もある 雄大

原何日でも何処でもびつたりジジとババ 雄大

二句を一句にしてみました

参びつたんこ時々ずれる老夫婦

原びつたりと付いて来てか影法師 龍馬

いい句ですのに中六が残念

参びつたりと付いて来てるか影法師

原かまかけにビツクリポンの目が泳ぐ くみ子

参かまかけてみたらビツクリポンの顔

原流石に役所金はびつたり使いきる みちを

参役所で予算きつちり使いきる

原電波時計いつもびつたりじゃ味気ない 勝正

参電波時計いつもびつたりの味気なさ

原おきに入りヒップびつたり私イス すみれ

漢字、片仮名、平仮名、上手な使い分けを

参びつたりの椅子でヒップのお気に入り

原びつたりの補正下着をぬぎずてる (大) 洋子

参びつちびち補正下着を脱ぎずてる

原試着室びつたりだけど値が合わぬ 福貴子

参試着室値段以外はびつたんこ

原お金さえ出せばびつたり合う服が 里子

参お金さえ出せばあるのよ似合う服

原笑うツボ同じでもう一度笑う (松) 雅子

面白いう着眼ですな

参笑うツボ同じで二倍笑ってる

原新婚がすぎてびつたり息が合う 三樹夫

参新婚ともう言えなくて息が合う

原貴女には僕がビツタリだと電話 優

参貴女には僕がビツタリですきつと

原嫁姑呼吸びつたり良い暮し こそえ

参嫁姑呼吸合わせている暮し

原びつたりの流行歌おもしろい ひでお

参この僕にびたり昭和の流行歌

原びつたりと合わない予報時差通知 勝治

参ごめんさい、内容が読みとれません。

参びつたりの予報ができぬ荒れ模様

原宝クジびつたり合った夢なのか 寧

原番号はびつたり合って組違ひ 不二夫

宝くじはよく詠まれます。相当ひねらない

とよくある句になってしまいます。

参宝クジ夢で何度も当てている

参番号ビタリ何遍見ても組違ひ

原びつたりのスニーカー履き一万歩 隆子

参びつたりの靴がうれしい一万歩

原壁の傷びつたり隠す絵を見つけ 美枝子

参壁の傷うまく隠しているゴッホ

原M1の息がびつたりグランプリ 通則

参びつたりの息でM1ケランブリ

原びつたりと女の勘が言々あてる 昭枝

言々あてる…?

参びつたりと女の勘が言い当てる

原びつたりと洋服余計太く見え 奈津子

参びつたりと服のせいです太く見え

原カラオケは息びつたり二輪草 廣光

参カラオケの息もびつたり二輪草

原びつたりの突つ支い逝きて立ち尽くす(高道)子

参びつたりの支えが逝つてうすくまる

原びつたりとライバルに付きすぎねらう(貞)正子

下五は漢字で引き締めましょう

参ライバルにびつたりと付いて隙狙う

原身体泥心はびつたり被災地へ 洋一

参被災地に心寄り添う泥の靴

原腹を立てびつたり戸口締めている 朋子

推せん句の雅美さんの作品もご参考に

参びつたりと戸口が腹を立てている

原びつたりのズボンセクシー目をそむけ 貴美江

参びつたりのズボンセクシーすぎますよ

原びつたりと答はでないが生きている 整

原びつたりの洋服来年着れるかな 弥生

両句とも中八、リズムが重いですな。

参びつたりの答ないまま生きている

参びつたりの服来年も着られるか

原ビールには枝豆という良い夫婦 翔

参ビールには枝豆意見合う夫婦

原びつたりとお手々合わせてなんまいだ 光雄

参なんまいだおてもちちゃんとあわせたよ

原バーゲンでも欲しいし寸残ってた 厚子

参バーゲンでびつたりのLが残ってた

原びつたりと彼岸の頃に曼珠沙華 こみつ

参今年また彼岸知らせて曼珠沙華

原夏休み君も乗ってた同じバス (東)美智子

参夏休み私服の君と出会うバス

原ウオーキングシューズなじんで夏の風(門)幸子

原びつたりのサイズに出合い帽子買う 風露

弾む気持ち強調しました

参ウオーキングシューズなじんで初夏の風

参びつたりのサイズに出合う春帽子

原折鶴の角びつたりと折れぬ 徳利

アレレ、下三ですよ

参折鶴の角びつたりと折れぬ歳

原寝言までびつたり揃う我が夫婦 清司

参寝言まで息が合ってる夫婦仲

原びつたりとはまるピースを探してる のぞみ

参びつたりのピースを探し続けている

原びつたりとズボン合すぎ出るおしり ミヨノ

参びつたりのズボンに照れているお尻

原婚にびつたり親が勝手に決めている 亜希子

参びつたりだと親が勝手に決めた婚

原びつたりと雲の上まで寄り添って 恒

参願わくば雲の上まで寄り添って

原この歳で今も着られるオシャレ服(澤)良子

参歳だけどピタリと決めるオシャレ服

【佳句】

落とし蓋びつたり合えば困ります (大)安子

スーツ脱ぎ野良着地下たび板につく 剛

赤信号びつたりやめた酒煙草 由紀子

ジグゾーがピタリとはまり昼の酒 (前)真

叱り方目で強弱をつけてみる (斎)宏子

今月の家計簿なぜかびつたりだ 開子

スマホより算盤早くご名算 なつみ

びつたりと割り勘にして女子の会 美穂

【今月の推せん句】

礼服はいつもピッタリ合っていない 大島まさる

びつたりとドア閉められたのが答え 小野 雅美

占い師止めときなはれ言ったはず 川本 信子

川柳塔鑑賞

同人吟 平井美智子

—9月号から

カラフルな部屋カラフルな夢の跡

酒井真由

うがいても音痴は音痴治らない

大久保 眞澄

万能薬なんにも効いたことがない

丹下 凱夫

ジェームス・ディーンも音痴だったそうですが、カラオケに行つた時の多少の音のずれは十分（一般的許容範囲）なのだそうです。案外アルコールでうがいと音痴が治るかも……です。

母に会うただそれだけの里帰り

片山 かずお

ひと言もしゃべらない日の恐ろしさ

三宅 満子

二・三日の里帰りでも交通費などの出費もバカにならないし、体力的にもきつくなってきた。でも母の嬉しそうな眸を見るとすべてが帳消しになってしまふ。「長生きしろよ。また帰ってくるから」

どっこいしょ重たくなつたなあ心

吉田 陽子

下で待つ流しそうめんやや不潔

藤井 宏造

日に何度かは呪文のように唱える（どっこいしょ）身体ではなく心が重くなつていたのですね。目から鱗です。「重いのは心、重いのは心。かあるくなれ」

ニンマリと納得！流しそうめんを頂いた経験はないのですが昨年、奈良西大寺の大茶盛で点てられたお茶を回し飲みした時はちよつと……でした。

飛び立った息子の部屋には色とりどりに塗られたプラモデルが並んだまま。リビングには娘が好きだったプーさんのぬいぐるみが鎮座している。その中で（夢の跡）の認識もないまま未だにカラフルな夢を引き摺って生きている私がいる。

痛む足どこへ置いても痛い足

安土 理恵

痛みだけに焦点を当てた素直な表現だけに、却って作者の痛みがジンジンと伝わってくる。自分で自分の身体を持つて余す辛さ。以前、痛みを抱えていた足に針を刺し電氣を通して痛点を麻痺させた記憶が蘇る。

借りていたのを忘れてたのは私

関本 かつ子

借りていたものは何でしょうか。父母の恩、友達からのエール、子供たちの笑顔。当り前になってしまつて借りていたことを忘れていました。明日は早速、友達にエールのお返しを致しましょう。勿論、子供達にも笑顔のお返しをして、夫には久しぶりにすぎ焼きでも奮発致します。

足の裏が痒い誰かが笑つてる

西田 美恵子

私も時々足の裏が痒くなりますが、あれは誰かに笑われていたのですね。それとも天狗になるなという神様の忠告だったのでしょうか。反対に、土踏まず辺りが汗を掻いている時は、誰かが悲しんでいる時なのかもしれません。

なんとなく気乗りせんから笑つとく

初代 正彦

「今度一泊旅行に行こうや」「今晚一杯やらへんか」嫌と言う訳ではないのだが何となく心が重たい時がある。そんな時は、曖昧に笑って誤魔化すのが大人の礼儀？最もこちらの気持ちを感じてくれない能天気な友もいるのだが……。

笑つたら鰻食べたくなりました

福西 茶子

鰻を食べたから幸せでニンマリしたのでなく、笑つたら食べたくなった。昔、恋人だった男が私の友人と結婚すると聞き、もう笑うしかなくて……。笑つた後、猛烈にお腹が減り極上のステーキを食べた記憶があります。因みに、国産の鰻はしばらく口に入っておりません。

はきだめの鶴のひらめきは鋭い

古今堂 蕉子

いつも小気味よく本音を突いてくる作者。息で取るリズムは584だが、その破調が、はきだめの中にスックと立っている鶴を連想して心地良い。長い首で、世間を見まわし、鋭い嘴で正義を主張するのであるうか。

面倒な男誰にでも律儀

田中 ゆみ子

律儀な人は正直でまじめで曲がった事が嫌い。更に義理人情に厚い。社会人として大切な事なのでしようが、偶には義理を忘れて好きな女のためだけの時間を作つてほしい。「面倒な男」言い得て妙ですね。

雨樋から漏れているのは素顔です

工藤 千代子

屋根を流れる雨水を下水まで導く樋。継ぎ目からポタポタ漏れてくるのは、どうしても流すことが出来なかつた哀しみでしょうか。それとも少し老朽化して心が緩みはじめたのでしょうか。ホラー素顔の雫はキラキラと虹色に輝いています。新鮮な見付けと豊かな感性に乾杯！

白紙には到底勝てるわけがない

古久保 和子

白紙とは邪念のない真っ直ぐさを意味するのか。それともどんな事態も恐れず自分を押し通すという事なのか。信念を持った真つ白な主張。修正液を重ね塗りしながら生きている私に勝ち目はない。アツシー君だから免許は返せない。

澤井 敏治

大切な人をのせていると運転も慎重になるはずですし（返せない）という言い切りには、アツシー君としての自負も垣間見えて恰好いい！丁寧に運転をする作者の笑顔が目につかびます。

薬局の裏でタバコを吸う大人

森山 文切

高校生が隠れて煙草を吸うのは校舎の裏でした。大人が薬局の裏で吸うのは、タバコが身体に悪いことを認識しているからでしょうか。（薬局）がいいな。

寝ときやと粥を運んでくる息子

山本 昌代

「今日は洗濯も掃除もせんてええから、寝ときや。あとで、おかんの好きな水瓜買うてきたるから」

水煙抄鑑賞

— 9月号から

安福和夫

「うっかり」を言い訳にしたまた今日も

上山堅坊

歳を重ねると敏腕と言われた人でさえもボカをして「うっかり」と言い訳します。とても便利な言葉で、後くされも暗さありません。物忘れがだんだん増える世代はこの一言で救われます。

復旧へ熱中症という魔物

若年幸子

被災地に炎暑が追い打ちをかけ、復旧に汗する被災者を熱中症が襲う。神も仏もない酷さに自然を恨みたいでしょう。

笑顔でも心突き刺す針を持つ

小野雅美

ふと、政治活動家の櫻井よしこさんが頭に浮かびます。鋭い舌鋒が笑顔と美貌が味方となって相手に突き刺さりま

シャンシャンのニュースの次は虐待死

坂本星雨

最近のマスコミ報道には節操がなく、悲惨なニュースの直後も構わずキラキラのおめでたいニュースを流して流す。

影響力あるマスコミだけに不安ですね。

地震台風日常茶飯狂い出す

前田紀雄

地下の活断層が日本のあちこちで動き出し、台風は台風で予想ルートから急に曲がって逆走する。列島に住むわれらの生活ペースも狂わされつ放しですね。

ため息はよそよ老いが回り出す

岡崎美知江

お気持ちがよくわかります。前向きな気分にはなれず、出るはため息ばかりなり、でしょうか。何とか脱皮しようと努力をされている様子がよく窺えます。

伊賀甲賀佐賀のくノ一です私

真島久美子

頼もしい名乗りに大いに期待します。ただ、どこかの理事長の様に忍法風化の術とかは真似されないように。尤もあれは忍法などではなく単に狡いだけのようですがね。

我を張って狭くしている着地点

伊藤良一

意地っ張りなら誰も身に覚えがあると思います。体操競技の着地ならば一歩が出て減点が済むでしょうが、大見得を切って自分で勝手に追い込んでいれば納めどころは狭いでしょうね。

すぐ出せるジョーカーいつも持ち歩く

中堀優

羨ましいですね。勝負どころがくればこれでピシッと決める。顔パスでは無理な時に使う紋所の奥の手ですね。

値が上がるうが下ろうが秋刀魚焼く

廣瀬良磨

少々の値上がりで、好物の秋刀魚をお取り上げられてたまるか。同感です。家計を預かる奥様に怒られそうですが、偶にはささやかな贅沢させて上げて下さい。

クヨクヨもウカウカも不可孫といふ

西郷紀美代

ちよっと目を離している間に孫が行方不明や事故に遭ったりします。最近二歳児が見つかったニュースでご祖父同様にこちららも胸をなでおろしました。孫は可愛いが油断は禁物ですね。

川柳塔なら

20周年を迎えて その沿革

川柳塔なら 中原 比呂志

気象台観測史上始まって以来の猛暑も収まる11月1日、「川柳塔なら」が創立20周年を迎えることになりました。これもひとえに先人たちの情熱と努力、柳友皆さんのお力添えあつてのことと感謝とお礼を申し上げます。

さて、「川柳塔なら」が、やっと20歳の成人式を迎えた訳ですが、奈良県下には戦前からの川柳会の歴史があります。

1927年(昭和2)に「下市川柳吟社」が発足し本田溪花坊先生が大坂から指導にいられています。

戦後、1946年(昭和21)大和タイムス(現奈良新聞社)が創設されて川柳会が発足し、1948年(昭和23)には奈良市役所に故片岡つとむ先生の提唱で「柳茶屋川柳会」(現奈良番傘)が発足しました。川柳塔に所属する中で故岩本雀羅子氏(桜井市)は鬼丸の雅号で戦前・戦中から活躍、やまと番傘句会に参加されていま

した。呼名の折は「ジャクヨーシ」とびつくりするような大声を出されるので有名な人でした。

当会の発足時に会長職をお願いした故宮口笛生氏(奈良市)は、1947年(昭和22)頃から川柳に親しまれたようので、奈良には川柳塔句会がなかったので奈良番傘の句会に出席されてよくお世話もされてきました。

以下、橋高薫風主幹の創立句会お祝いの言葉より
麻生路郎先生が県立奈良高校の生徒の部活動の川柳会に指導におもむかれたのは1960年(昭和35)からで、当時、内海敬太、中内孚彦といった坊主頭の学生が5・7・5の指を折り数えていたのである。内海敬太君は阪大川柳会の内海貞三博士のご子息である。内海博士は、阪大から奈良医大の教授となり、耳鼻咽喉科が専門であられたが、その頃の学生に城北句会の創始者・川口弘生先生がおられた。路郎先生の直々の(奈良高校への)ご指導はそういった経緯があったのだ。中内孚彦君は関西学院大学へ進学し、そこでも関学川柳会を始めたので、私たちは応援に行ったこともある。(中略)それがようやく奈良在住の川柳塔の仲間が句会を持つほどに増えたのである。再び蒔かれた一粒の麦が今度は大きく育って

ほしい。

1998年(平成10)当時、比呂志は川柳塔社常任理事を任命され、理事会に出席していた際、事務局の岩佐ダン吉氏から奈良に句会を立ち上げてほしいと依頼されたが「出来ない」「立ち上げてほしい」と喧嘩腰の議論をしたことがあります。当時、薫風主幹は肺炎患のため酸素ボンベを下げながら役員会や句会に出ておられたのを見て常任理事会でも議論になり、故高杉鬼遊氏から「1年間だけ八尾のメンバーが応援する。あとは自立を。」と援助の声もあり、主幹はじめ各氏の熱意のもとならと奈良在住の宮口笛生・大内朝子・米田恭昌・坊農柳弘各氏と笛生宅へ何度も集まり、スタートは、語呂合わせで平成10年10月10日目標に歯車を回すことになったのです。

薫風主幹からは片岡つとむ先生へ事前をお願いしていただき、奈良の番傘関係の方々にも創立句会以後も温かくご協力いただいていることに厚く感謝する日々です。

「川柳塔なら」の名称は田中正坊編集長の発案です。柳紙名「篝火」は奈良に思いを寄せたもので薫風主幹の揮毫を戴きました。

『麻生路郎読本』余滴 (48)

「川柳職業人宣言」前後⑧

葉原道夫

前回の「余滴」で「川柳たまむし」を紹介したが、二年前の春休みに松本市立中央図書館で調べたものである。「川柳たまむし」は、四冊所蔵されていて、その四冊のなかに路郎に触れていた号があったので紹介できたのである。インターネットで検索できる範囲で調べたところ、「川柳たまむし」を所蔵しているのは、岩手県北上市の日本現代詩歌文学館に二冊、長野県上田市立上田図書館「花月文庫」に一冊あるだけである。

松本市立中央図書館には、石曽根文庫として現代川柳誌だけでも五八四点が所蔵されているが、インターネットでは検索できない。石曽根文庫の存在を知ったのは、こういう訳である。

三年前にインターネットのオークション

で、「石曽根コレクションの世界」という図録が出ていたのだが、落札できなかった。そこで、調べてみると松本市立博物館で二〇一一年一〇月（石曽根民郎は二〇〇五年に亡くなっている）に、開催された展示会の図録だとわかり、すぐに博物館から送ってもらった。そこに、「川柳塔」八月号の「石曽根民郎さんのこと」と同じように、清博美氏が石曽根民郎の思い出をつづっている文章があり、石曽根文庫の存在を知ったのである。

松本市立中央図書館に問い合わせると、石曽根文庫の目録があるということなので、コピーを送ってもらって、「川柳たまむし」が所蔵されていることを知った。しかし何冊所蔵されているかは、目録には記されていないかった。目録には「91・04・30」の日付がある。目録作成時の日付だろう。

一方、松本市立博物館に問い合わせると、展示会を開いたが、寄贈コレクションのほとんどが未整理の状態だという。民郎宛の路郎の書簡があれば記録しておきたいと思い、お願いすると、段ボール箱に入ったままだが、それでもよければ見てもらって結構だということになった。

そうして、二年前の春休みに、梅田から高速バスで松本に向かった。

松本市立博物館をまず訪れた。使用していない展示室のショウケースに、未整理のコレクションが入った段ボール箱が一〇〇箱以上積み上げられていた。お願ひしていた書簡の段ボール箱数箱は、別室に用意されていた。白い手袋を用意してくださったが、あつという間に埃で真っ黒になった。手袋をはめたままでは見るのに時間がかかるので、素手で見ていると、すぐに真っ黒になった。残念ながら路郎の書簡は見つからなかったが、民郎の幅広い交流がうかがえた。国文学者や文人の書簡を何点か職員の方二名が写真に撮って下さり、CDに焼いて下さった。機会があれば、紹介したいと思う。

松本市立中央図書館の「石曽根文庫」は、地下の書庫にあった。スチール製の大きな本棚が一〇本以上あり、そこに、あいうえお順に、川柳雑誌が紐で縛られて並んでいた。四冊しかない「川柳たまむし」に、路郎の記事を見つけたときは、心が躍った。路郎が「川柳職業人宣言」をしたことに對して、他の川柳雑誌ではどのような反応を

示していたかを知りたかったが、収蔵されている川柳雑誌は戦後の物が多くて、それが叶わなかったのは残念であった。対応してくださった職員の方は、まだ図書館に勤務して二年だったが、その間に「石曾根文庫」を訪れた人は初めてだと言っていた。

長々と書いたのは、「川柳塔」八月号の「石曾根民郎さんのこと」の、(松本図書館は、現代川柳誌の宝庫となっている。これを利用しない手はない。川柳愛好家は大いに利用すべきであろう。少々遠隔の地にあるのが難点であるが。)という清博美氏の文章に刺激を受けたためである。また、「余滴」の資料収集は、このようにしているのだということを知ってもらいたいという思いもあり、地方で眠っている路郎の資料があれば教えていただきたいと願うからである。

さて、「余滴」に戻る。

自宅を川柳雑誌社の事務所として提供していた増位汀柳が川柳雑誌社を退社した(昭和11年6月30日)理由として、森雞牛子は「三味線草」で、路郎が汀柳に無断で事務所を玉出の自宅へ移転したことによる」と記している(前々回「余滴」参照)。

そして、路郎が事務所を自宅に戻した理由としては、(主幹路郎氏は引続きの遅刊に焦燥亦焦燥持前の肝癪玉破裂して)と述べているが、「川柳雑誌昭和18年12月号」川柳雑誌「戦時雑誌奉還号の「苦闘四十年」で、路郎は次のように述べている。

〈昭和十一年六月には一擧にして社を深淵に投げ込むやうな事件が起つた。私は監督の責任上、主幹辭退を同人會(筆者註：7月2日)に申出た。どんな事件であるか、發表の限りではないが、それがために同人會を開いて社運の挽回策を講じることとなつた。しかし同人の誰もが社を背負うて立つた」と云ふ人はなかつた。結局、私に善後策の質問があつたので、今後の經營に對して三案を提出した。その結果、最後の一案である路郎の個人經營に落ち着いた。

九分九厘まで倒壊した塔を引き起す作業は容易なわざではなかつたが、私は奮然として起つた。家庭に重病人を抱へてゐた際、私自身も氷囊を頸筋にのせて、七月號の編輯にかゝつた。そしてこれを一轉機として敢然として川柳職業人を宣言した。)

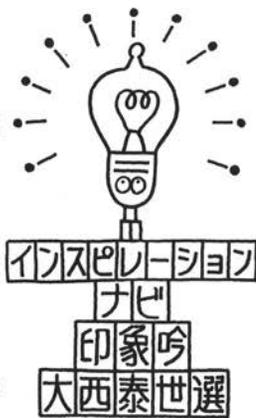
「社を深淵に投げ込むやうな事件」が起こり、その事件が「どんな事件であるか、

發表の限りではないが」と言っているが、「私は監督の責任上、主幹辭退を同人會に申出た」とある。川柳雑誌の相次ぐ遅刊に癪玉が破裂して事務所を自宅に戻したのなら、相次ぐ遅刊は周知の事実なので「どんな事件であるか、發表の限りではないが」と、事件の内容を曖昧にする理由がない。

「監督の責任上」とある点に注目したい。事務所を増位汀柳宅に置き、編集と会計を増位汀柳と山本雨迷の、元「川柳たまむし」の同人であつた二人に任せていた自分の「監督の責任上」という意味になるだろう。そして、「九分九厘まで倒壊した塔」とあるので、単に雑誌の遅刊という事件ではなくて、川柳雑誌社の經營に関する事件、すなわち会計上のことで、「社を深淵に投げ込むやうな事件」が起こつたのだと想像するのである。

7月11日の夜、妻の茂乃が心臓の不整脈で津守駅(南海電鉄高野線)で倒れ、その看護もしながら、路郎は「川柳雑誌」七月號の編集にたずさわる。その七月号に、今回の事件をうかがわせるような記事が掲載されている。

(次回に続く)



(投句210名)

ここ何カ月か、話す度、書く度に豪雨や台風、そして地震のことが出て来ます。

歳を重ねるごとに健康に気を配り、身体に良いと言われることを積極的に実践している知人も一人や二人ではありません。しかし、天災はそんなささやかな個人の幸福まで、一瞬に奪い去って行きました。

だからこそ「今」を意識して生きたいと願うのです。では、ナビと一緒に。

人生には思わぬ拾い物がある

(評) だから人生捨てたもんじゃなく、ということでしょうか。それも歳を重ねたからこそ値打ちが分かるのかも。

山頭火放哉スポーツは苦手

(評) 自由律俳句の旗手のお二人、スポー

ッが苦手だったんですね。詳しくは知らないけど、絶対そうだと思います。

地味だけどあの校長は晴れ男

(評) 地味で晴れ男、それが校長さん、いいですねえ。好ましい人となりまでが思われます。

ビットコインより目に見える銭が欲し

(評) 仮想通貨なるものが胡散臭く思えるのは歳のせいでしょうか。やはり目に見える、触れるお金がよろしいかと。

記憶からキラキラネームこぼれ落ち

(評) 個人的なはずのキラキラですが覚えられません。その途端に顔までがノッペラボウに見えてきそう。

まっ白だったアベベ選手足の裏

(評) ああ、懐かしい。裸足で風を切ったあの瘦軀が浮かんできます。二度目の東京オリンピック、もうすぐです。

電柱を見ると小便したくなる

(評) アハハと笑ってしまいましたけど、残念ながら男性の句だと痛感致した次第でございます。

隠しごと共有して仲が良い

(評) 共通の秘密を持つことで生まれる

連帯感、それも小さな悪の香りがする方が、より魅力的ではないでしょうか。

給水のタイムとるとのアナウンサー

(評) 猛暑の中でのスポーツは、命懸けなんという言葉が笑い事では無くなりました。給水はまさに命綱であります。

嘘いっぱい詰めた器に蓋がない

(評) コワイですねえ。ネット社会では一度拡散してしまおうと取り返しがつかなくなりそうです。

晩学の辞書にもあった玉手箱

暮じましたか隣りの石碑消え

百発百中なんて自惚れなど捨てよ

悪いのはゆとり教育ですゴメン

心配が募るカジノの依存症

蒼天の下に青春燃え滾る

何不目由なくてなんだかつまらない

父兄同伴さあ玉入れた天高し

奈良県 長谷川崇明

和歌山市 武本 碧

藤井寺市 若松 雅枝

鳥取市 福西 茶子

河内長野市 梶原 弘光

豊中市 藤井 則彦

東大阪市 佐々木満作

大山市 金子美千代

豊中市 木藤こみつ

東京五輪の旗を振りた小池知事

大阪府 米澤 俣子

大阪府 柴本ばつは

横浜市 菊地 政勝
台風の前にもがれた青りんご

鳥取市 永原 昌鼓
箸で豆つまむゲームは得意です

宝塚市 田中 章子
AIが酒の仕込みに参加する

米子市 八木 千代
僕も子もキラキラ秋のグラランドに

青森県 松山 芳生
テルテル坊主を吊したことがない

尼崎市 近兼 敦子
今時の順位つけずの徒競走

弘前市 高瀬 霜石
ノーマルなわたしアブノーマルなはく

豊中市 松尾美智代
おそろいの器で食べるおぜんざい

米子市 池田 美穂
松茸の入れ放題だ頑張るぞ

唐津市 仁部 四郎
各軍の色七変化水田町

和歌山市 定松 宏枝
駆けつこの後に残ったパバの靴

土佐清水市 辻内 次根
昭和にもたしかにあった暑気中り

弘前市 福士 慕情
今日だけはクラス仲間も敵味方

明石市 梶谷 和郎
ひと仕事済んで疲れにリポビタン

大阪市 江島谷勝弘
あっそうか運動会の季節だな

河内長野市 穂口 正子
もう止そうウインウインで手を打とう

三田市 多田 雅尚
海外で賞賛された後始末

生駒市 飛永ふりこ
大原女紅葉巡りにおいでやす

寝屋川市 川本 信子
勝ち負けは流した汗に比例する

鳥取市 山下 凱柳
夫婦喧嘩止めようゴール近いのよ

熊本市 杉野 羅天
オリンピック引き分けだっていいのでは

鳥取市 夏目 一粋
僕いつも涙で夢を描いている

松江市 相見 柳歩
甲子園三位決定戦はない

西脇市 七反田順子
男傘ビルの谷間で汗ふいて

西宮市 亀岡 哲子
ふるさと子供頃の頃の風ばかり

東京都 川本真理子
今は自分にフレィフレィと旗を振る

防府市 坂本 加代
欲張って山盛り入れて運べない

大阪市 栃尾 奏子
幸せな湯呑みだ今日も対である

塩竈市 木田比呂朗
終活はイチニのサンで踏み出せず

大阪市 森 廣子
もののふの秋の宴の支度する

松江市 石橋 芳山
来年の春まで忘れられている

堺市 坂上 淳司
よく入るパチンコ台で大儲け

日高市 根岸 方子
順位よりみどりの風を享受する

黒石市 北山まみどり
炎天下みんな団子にみえてくる

青森市 守田 啓子
幸せがこぼれる凭れ合うたびに

大洲市 花岡 順子
受け止めてくれそう思い切り投げる

大阪市 高杉 力
あれからも一等賞に縁はなし

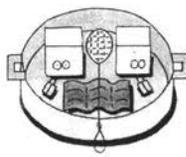
篠山市 長谷川善輔
板の間を探して歩き猫昼寝

神戸市 富永 恭子
非力でも負けた理由は知っている

大阪市 田中ゆみ子
元号も変わるし名字変えようか

寝屋川市 森 茜
準備万端いいお日和であるように

12月号発表
(10月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳篁に2句

平成29、30年度(第29、30回)

川柳塔碑合祀祭実施要領

昨年度、本年度川柳塔碑合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 平成30年11月10日(土) 雨天でも行います。

集合場所 南海電車 難波駅 3階中央改札前

集合時間 午前9時30分(川柳塔の茶色の旗をあげておきます。)

乗車時間 特急「高野」午前10時発に乗車します。

事前申込者には割引周遊券特急券を購入しておきます。

会費 4,800円(往復乗車券および往きの特急券、昼食費)

帰路の特急券は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17

高野山霊園内 川柳塔碑前(奥の院下車徒歩5分)

大霊園事務所 ☎0736-56-2966

到着後すぐに法要を営みます。

(午後12時30分より約30分の予定)

合祀予定者 (敬称略)(逝去された同人で高野山基金に参加されている方)

昨年度 波多野五楽庵、高島 啓子、宮園射月芳、林 瑞枝、

恒松 叮紅、小林由多香、平嶋美智子、松尾和香

(8名様)

本年度 両川 洋々、藤井 正雄、坊農 柳弘、上垣キヨミ、

須郷 井蛙 (5名様)

主幹・理事長の選任について

川柳塔誌平成30年6月号にて社告案内致しました主幹・理事長の選任につき、7月1日から10日までに川柳塔社事務所に届きました立候補届は無く「主幹・理事長の選任に関する規則」の第3項により、主幹の再任、理事長の再任が下記の通りとなりました事を証します。

主 幹 (再任) 小 島 蘭 幸

理事長 (再任) 新 家 完 司

立会人

会計監査 藤 村 亜 成

会計監査 西 村 哲 夫

95周年記念事業基金御芳名

平成30年8月1日～9月7日 受付順

奈良	大阪	奈良	兵庫	京都	大阪	和歌山	大阪	兵庫	大阪	大阪	兵庫	大阪	愛知	愛知	岡山	和歌山	東京	埼玉	大阪	大阪	大阪	
飛上	山内	大加	川本	榊根	山松	原野	小藤	井澤	米村	吉方	緒木	鈴子	金本	関田	前部	磯部	まえ	田前	寺井	徳山	森松	
永	山	堅	朝	靖	宏	妙	寿	雅	宏	俣	久	美	い	美	か	恵	義	と	洋	弘	み	まつ
ふ	り	こ	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様
鳥取	鳥取	和歌山	和歌山	兵庫	大阪	熊本	大阪	奈良	大阪	大阪	山口	兵庫	大阪	和歌山	大阪	奈良	奈良	大阪	大阪	和歌山	大阪	
岸	岸	藤	小	上	原	岩	長	山	津	井	村	田	上	上	川	谷	高	長	川	指	石	中
本	本	原	谷	田	熊	切	高	本	村	井	村	田	上	上	川	谷	高	長	川	指	石	中
孝	宏	ほ	小	和	知	康	俊	昌	志	則	夢	耕	直	大	敬	義	子	崇	明	千	隆	ひろ
子	章	のか	雪	宏	津	子	雄	代	華	彦	香	治	樹	輪	義	子	明	崇	明	千	隆	ひろ
様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様	様
青森	大阪	大阪	兵庫	大阪	兵庫	大阪	大阪	大阪	鳥取	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	埼玉	宮城	大阪	兵庫	
齊	神	岡	山	矢	山	佐	籠	松	八	前	柴	藤	水	宮	平	藤	島	根	木	津	上	
藤	野	本	崎	倉	口	々	島	尾	木	本	原	野	崎	松	村	田	岸	田	守	田	田	
	千	武	五	光	満	恵	美	千	た	ば	大	黒	シ	か	亜	千	方	比	柳	ひ		
蒔	恵	勲	彦	月	久	作	智	代	も	っ	っ	兔	マ	す	成	鶴	呂	仲	と			
様	子	様	様	様	様	様	代	様	つ	は	子	様	子	み	様	子	朗	様	み			

基金ご協力ありがとうございました。

基金は10月末日まで募集いたしております。

一口 1,000円 何口でも結構です。

ご理解ご協力の程宜しく願います。

振替 00980-4-298479番

川柳塔社

本社 九月句会

◇九月七日(木) 午後一時
アウイーナ大 阪

残暑の最中、台風、地震と災害が続き、誰もが心を痛めていた七日、九月句会は百三十五名(内投句者八名)の参加で開催された。句会に先立ち、過日亡くなられた豊中市の同人松村理江さんに黙祷を捧げた。

今月のお話は木本朱夏さん。題は「しぐれの中へ」。ある日、ふと目にとまった書をきっかけに、種田山頭火の「しぐれの中へ」踏み込んで行かれたようだ。「うしろすがたのしぐれてゆくか」の影響か、山頭火にはしぐれが、後ろ姿が似合う。生涯酒を愛し、放浪の人生を送った、友達としては疑問符のつく俳人の句を私達も改めて味わってみたい。しぐるるや死なないでいる

分け入っても分け入っても青い山

病む児寝入れば大きな星が見ゆ

どうしようもないわたしがあゝいる

鉄鉢の中へも 靨 (真澄)

月間賞は木本朱夏さん(和歌山市)

(司会)隆彦・志津子(脇取)すみ子・まつお

(受付)恵・美智代(懸垂幕墨書)耕治

(清記)憲彦・勝弘

席題「幕」 上田ひとみ 選

ジャカルタは瑠花子リカ子で幕を閉じ
幕にして地震猛暑台風さん
大銀杏まだ結えません幕の内
華麗なる人生模様描き幕
幕引きしよう指輪も捨てました
百歳で人生幕を引くつもり
無言劇孫つれて来て幕にする
襲名の歓喜爆発 緞帳に
一生は楽しかったと幕引こう
終わってしまえばあつけない幕切れ
エンヤコラショと腰上げる第二幕
マンマミーヤ子約は来年の二月
アリバイの尻尾でかくて幕下りず
黒幕を知っているのは三毛だけで
僕の一五七五で幕開ける
幕が開く最前列に亡母が居る
家内とはへいへいへいで幕を引く
幕引きは諭吉の出番手打ちする
お目当ては幕間に食べるお弁当
幕間には一氣に混んでくるトイレ
閉幕はどこか悲しくなる空気
拍手木に調子とられて踊る幕
開幕はワルツアンコールもワルツ
開幕でも僕の出番はちゃんとある
友達が来ない公演ベルが鳴る

鈴木いさお 江島谷勝弘 長谷川崇明 渡辺 富子 米田利恵子 斉藤 隆浩 山田 耕治 森田 旅人 上山 堅坊 能勢 利子 鈴木いさお 籠島 恵子 小野 雅美 小川賀世子 前田 紀雄 今井万紗子 内藤 憲彦 島田 誠一 木嶋 盛隆 木藤こみつ 村上 玄也 宇賀 史郎 川端 六点 今井万紗子 籠島 恵子

真つ白なノート残して幕とじる
ぼちぼちと言うのに幕がいやがるの
この指に止まってくられて幕を引き
美しき人うつくしく幕を引く
やることはやった静かに出番待つ
アンコールに伝えてまた踊りたい
紅白の幕はちゃんと置いてある
幕引きは桜舞い散る晴れた朝
幕が開く兆しやる気の眉を描く
バラさないから内幕というのです
アンコール幕が下りたら君を見る
幼稚園の幕には象さんの親子

住

榎本日の出 安土 理恵 榎本日の出 太田扶美代 富永 恭子 関 よしみ 鴨谷瑠美子 村上 直樹 富永 恭子 大久保眞澄 七反田順子 鴨谷瑠美子

銀幕の女王だつて歯も抜ける
幕閉じる日迄は花を欠かさない
ヒロインの幕間にそっと乳飲ます
頑張った頑張ったゆつくり幕を引き
くじら幕片隅で美女泣いてはる

人

柴本ばつは 原田すみ子 石田ひろ子 上野多恵子 小川賀世子

幕間には口もきかない尉と姥

地

居谷真理子

村長も幕を引いてる村芝居

天

三宅 保州

人生の幕間幕間に誘い水

軸

内田志津子

その時はまつ赤な幕を引くつもり

兼題「予定」 中川ひろ介 選

あと十年犬の寿命とわたくしとのむ会を真つ先に書くカレンダー
 予定表につけた秘密の丸印
 まだ米寿予定で埋まる手帳持つ
 素敵だな待つててくれる人がいる
 パワハラで予定の立たぬスポーツ界
 あなたとなら予定を空けて待つてます
 予定表通り済んで裏方ほつとする
 胎動に母になる日に想い寄せ
 いか書く予定妻への感謝状
 惚れてしまったのが予定にない誤算
 予定日と結婚式の二重奏
 盤寿越す次は卒寿をめざそうか
 付度も予定はずれたキャリア組
 予定通り行った事なく明日白寿
 フルムーンの予定狂わずゼロ金利
 災害で知った予定の儚さを
 予定ではハワイに居る日松業杖
 予定日を待てぬとキックする吾子よ
 予定どおり夫が先に逝きました
 予定ではパリだったのに梅田地下
 予定より深く齧つた母の脛
 祖母になる予定叶わぬまま老ける
 献立も狂う突然義母が来る
 関空がパニックになる予定外

一年後瘦せるつもりでSを買う
 スケジュールぎつしりですの医者通い
 台風の進路刻々気が変わる
 案の定酒で天国行きはつた
 予定の無い旅で気分は山頭火
 父の日を考えないで予定表
 まだ十年生きる予定のパスポート
 予定などどうにでもなる独り者
 卵生む予定がなくて絞められる
 予定がないので百均へ行ってみる
 ライフプラン百歳目処に訂正を
 初孫の予定日花丸で囲む

小野 雅美
 太田としお
 加川 靖鬼
 太田としお
 石田ひろ子
 上山 堅坊
 鈴木 栄子
 中村 恵
 田中ゆみ子
 田中ゆみ子
 磯島福貴子
 田中 章子

ごはんには帰つて来るという予定
 定刻にバスが来たから乗り遅れ
 予定表空けて誘いを待つたのに
 言いました聞いていないと言う予定
 逢える日の笑顔はこれでもいいかしら

谷口 義
 富永 恭子
 山田 葉子
 籠島 恵子
 居谷真理子

予定では金利で暮らす筈だった
 びんころりお世話お邪魔になる前に
 天 村上 直樹

良かったなあ予定ぎつしりあった頃
 軸 柴本ばつは

サクラダファミリア予定通りに建築中

兼題「座る」 大田扶美代 選

関空で膝を抱えて二日間
 尾島さん肝の握つたポランティア
 いつも何かしていた母の座り肝脈
 信じ合い背中合せの合せの鬼瓦
 ダージリン話がはずむ午後の椅子
 優先席ひとつ若いと譲りあう
 座つたらすぐに立てない歳になり
 沖繩の歴史を創る座り込み
 座に着くと急にシーンとなる威厳
 憧れの横に座っている無口
 門前に写生の人の座る秋
 考える人もいつかは立ち上がる
 バラリンを目指す気魄の車椅子
 短足は座つていたらわからない
 正座した妻は覚悟を決めている
 一同が座り直した遺産分け
 ふわふわの座布団今日は敬老日
 できたよと嗜れ着を見せた座りだこ
 抜擢の椅子に妬心がつき刺さる
 座布団があり温かい無人駅
 仏壇に愚痴をこぼしている座椅子
 優先座席顔を見合わせ譲りあう
 藤椅子に座れば君もエマニエル
 新人入りがもう座つてる僕の席

坂上 淳司
 前田 紀雄
 山崎 武彦
 北野 哲男
 加川 靖鬼
 山田 耕治
 榎本 舞夢
 中里はこべ
 藤村 亜成
 川端 六次
 藤田 雪菜
 田中 章子
 田中 章子
 佐々木満作
 中島 一彌
 山口 光久
 柿花 和夫
 上野多恵子
 森田 旅人
 荻野 浩子
 三宅 保州
 丹後屋 肇
 山下 純子
 森松まつお
 中岡千代美

両陛下目線落して膝を折る
赤ちゃん抱くママに譲って古稀は立つ

車椅子闘志溢れるバスケット
坊さんも椅子に坐つて経を読む

正座から胡座お酒がよく回る
やつと家長旅終えて座りこむ

イケメンになるまで座る散髪屋
座る場所なくした仲間繩のれん

母が居たかたちに座布団のへこみ
遅れたら前の席しか空いてない

座るかな君の隣が空いている
まあお座りじっくり話聞いたげる

住 坂 裕之
小川賀世子
奥澤洋次郎
柿花 和夫
西出 楓楽

内田志津子
平賀 国和
丹後屋 肇
藤井 宏造
鈴木 栄子
藤原 大子
平尾 定昭
山口弘委智
荻野 浩子
川端 一步
山田 葉子
小川賀世子

妻の手に逆戻りするプーマラン
闘病の父の姿勢に気を貰う
逆走をしても逢いたいひとが居る
逆光を浴びて謀叛考える
今日は仏滅か赤ちゃんに逆らうな
年寄りに席をどうぞと譲られる
引力に逆らい持ち上げる下着
逆立ちをすればピカソがよく解る
逆境に会うたびでかくなる器
挑戦へ今逆風が心地よい
逆境を物ともしない車椅子
逆光の写真でカバーする日焼け
時効でも妻の逆風まだ続く
大空へ親に逆らいつつ自立
逆鱗の紐を引いたか鬼真つ赤
逆転の明日を固く信じてる
逆転の夢を描いて辞書を繰る
秋は詩人逆光に浮くベレー帽
逆ながら片付きました三姉妹
鈍子逆さに酒掌に受けて舐め
逆回り気付かぬ事が見えてくる
逆風の吹く間は頭すっこめる
逆算をすれば本音だけが残る
夕焼けの励ましやつと逆上がり
逆剥けの指が疼いて母が病む

兼題 「逆」 伊達 郁夫 選

伏見 雅明
米田 恭昌
山崎 武彦
上野多恵子
細川 花門
内藤 憲彦
山田 耕治
木本 朱夏
大内 朝子
田中ゆみ子
佐々木満作
富永 恭子
今井万紗子
宇都満知子
山野 寿之
太田扶美代
酒井 紀華
澤井 敏治
長谷川崇明
坂上 淳司
原田すみ子
村上 玄也
中村 恵
飛永ふりこ
平井美智子

地を蹴って夕焼け蹴って逆上がり
逆算をしながら計る年金日
逆算が狂い味噌汁が温い
母さんの一喝誰も逆らえぬ
逆光の海で魚が跳ね上がる
逆光の写真笑顔も恐ろしい
逆らえばオリンピックは出したらへん
リベンジへ今逆風に耐えている
逆流を泳ぐ平泳ぎで進む
優しいのは夫恐いのは私
逆効果休肝明けの五合酒
派手に紅引く日は少し泣きたいの

住 米澤 俣子
平井美智子
藤田 雪菜
太田としお
柴本ばつは

萩野 浩子
山根 妙子
中岡千代美
島田 誠一
森 廣子
石田 隆彦
鈴木 いさお
鈴木 かこ
上田ひとみ
村上 直樹
久保田千代

天 荒川 鈍甲

軸 逆縁に慟哭母たちの昭和

逆風が止んで白紙の地図を買う

兼題 「まあまあ」 屋谷真理子 選

まあまあと派遣が正規たしなめる山崎 武彦
 影法師伸びても続く立ち話 山岡富美子
 まあまあと割かれて無事な今がある 安福 和夫
 一応は聞いておきます妻の愚痴 柴本ばっは
 はつきりとイヤだけは言う無口な子 永田 紀恵
 まあまあで済ませた付けが後でくる 村上 玄也
 褒められずまたけなされず折り返し 原田すみ子
 まあまあ政治の話それぐらい 江島谷勝弘
 まあまあと上目線から褒められる 松浦 英夫
 まあまあと膝とヒールがにじり寄る 平尾 定昭
 まあまあで生きてふんわり咲いてます 小川賀世子
 前途ある身へ寛大な処置があり 久保田千代
 まあびつくりお節のチラシ来る猛暑 松浦 英夫
 ばあばあのアメで喧嘩はジ・エンド 村田 博
 まあまあとほちほち共に儲けてる 水野 黒兎
 まあまあなら上出来私の子だもん 籠島 恵子
 まあまあと言いつつ傷跡を剥がす 山岡富美子
 まあまあのしあわせサンマ焼く匂い 荻野 浩子
 まあまあと注がれてからの負け戦 内田志津子
 これはまあ誰が名づけた犬ふぐり 荒川 鈍甲
 大儲けするなど先祖の言い伝え 榎本日の出
 まあまあとと言う当事者でない気象 矢倉 五月
 二刀流技がタメなら打で見せる 前田 紀雄
 大人になったね敬語が使えるね 上野多恵子
 まあまあを許さないのが愛のムチ 田中ゆみ子

挨拶はまあまあネクタイがタサイ
 平成のまあまあ平和宝だな
 マヨネーズかけまあまあにする話
 まあまあの大学を出て漫才師
 中の上そう思いたい折り返し
 このへんで負けよう夕焼けがきれい
 入試結果子のまあまあを顔で解く
 止める人誰もいなくて喧嘩やむ
 まあまあを褒める言葉が見つからぬ
 まあまあと曖昧な手に分けられる
 まあまあとあの世で皆と御挨拶
 靴下の穴も焼香してる通夜

まあまあと有めに連れてゆく諭吉
 この辺が落とし所じゃないですか
 まあまあ元氣クスリとサケは欠かさない
 人間に生まれただけでよしとする
 まあまあとというスペシャルな言葉

佳

まあまあは禁句だ甲子園を見よ
 夫婦の運足してまあまあの人生
 まあまあは禁句だ甲子園を見よ
 軸

兼題 「成長」 小島 蘭幸 選

わたくしの成長記録川柳塔
 成長したらしいかたつむりの尻尾
 三歳児補助輪外しやつて来た
 成長がやつと終わつた棺の中
 子が育つ私も育てられていた
 伸びしろは少ないが有ることは有る
 成長もせず一生終りそう
 経済の成長嚙う温暖化
 伸び代はまだある喜寿はまだ若い
 私の育児日記は母の遺書
 成長株と言われ続けた日も遠い
 たくましく黒光りして妻のツノ
 子を見上げ説教なんてやめとこう
 成長の先にあるのは夢希望
 甲子園君を成長させるところ
 生き下手の私成長させてくれた趣味
 生まれて半年で出荷される豚
 成長ができたか空へ問いかける
 次世代の成長見届けたい落葉
 夢食べてやつと大人になりました
 恥じらいのしぐさ父親はドキッ
 成長の証脱け殻熱をもつ
 路郎新子彬と出会いの新境地
 穏やかな顔成長なのか老齡か
 ピーマンを食べれるようになった夏

上野多恵子 川端 一步 平井美智子 吉村久仁雄 富永 恭子 鈴木 かこ 島田 誠一 富永 恭子 中村 恵 平尾 定昭 榎本 舞夢 島田 誠一 北野 哲男 大久保眞澄 村上 直樹 西出 楓栞 上田ひとみ 小島 蘭幸 米澤 俣子 小島 蘭幸 青木 公輔 今井万紗子 藤井 宏造 久保田千代 内藤 憲彦 森松まつお 木嶋 盛隆 細川 花門 三宅 保州 能勢 利子 川端 六点 山田 葉子 立蔵 信子 上野多恵子 山本希久子 新家 完司 小野 雅美 矢倉 五月 伊達 郁夫 安土 理恵 平尾 定昭 森田 旅人 鴨谷瑠美子 米田利恵子

大人になったね上手に嘘をつく 大久保真澄
 どんぐりころころやがて林に森になる 田中ゆみ子
 大人になることはなかなかむづかしい 谷口 義
 ほんやりと私の道も見えてきた 上田ひとみ
 台風が目がパツチリと開く恐さ 加川 靖鬼
 ボンテイアやさしいわたしになっていく 田中 章子
 乳酸菌百億個では止まらない 油谷 克己
 退めたとたん成長をした会社 宮崎シマ子
 八十歳牛乳飲んで背が伸びず 川端 一步
 ばあちゃんどうぞぼく吊革に届くから 川端 六点
 樹齢千年まで続く旅である 鈴木 かこ
 熟睡の子どもよ骨の伸びる音 居谷真理子

佳
 パーフェクト求めて彼は伸び悩み 安福 和夫
 あかんねん葉飲んでもあかんねん 太田としお
 子の部屋になんじやもんじやの樹が繁る 平井美智子
 おばあさんは今も発展途上です 大久保真澄
 雨に打たれて風に吹かれて咲きました 鈴木 かこ

人
 一年生になった母ちゃん泣いていた 田中ゆみ子

地
 子を産めぬ国が成長するものか 荒川 鈍甲

天
 大屋根の下で少年期を越えた 木本 朱夏

軸
 わたくしを少し成長させた酒

句会 燦 燦

八月句会を読む 弘 津 秋の子

席題も知らぬが仏初参加

斎藤 隆浩

「知らぬが仏」は慣用語になるが（新家完司さんの「川柳の理論と実践」参照）川柳塔本社句会初出席の隆浩さんのドキドキ感が伝わってくる。「初参加」は一生に一度しか使えない言葉である。私までドキドキしてくる。

仏壇を閉めて再婚話する

伊達 郁夫
吉岡 修

四度目は仏の生の顔を見た

仏さまの顔は、もう一人の私の顔でもあるのだろう。

びよんと上向いたあなたの鼻が好き 上野多惠子

生まれればかりの息子の鼻を新米ママの娘は今日も抓まんでいる。自分の鼻にずっとコンプレックスを持っていたと打ち明けられ私はびよんと飛ぶ。多恵子さんのように「あなたの鼻が好き」と言っただけならばよかったのだ。

におい袋かすかに風が動いたよ 山田 葉子

嗅覚、視覚、触覚の研ぎ澄まされた句。作句の時間はこの静けさの中に入り込まねばならないのだろう。

妻の一喝庭の蟬まで畏まる 村上 直樹

私もこの妻族の一人である。一喝には○十年分の溜め込んだ声が詰まっているのです。

嫁に来る意思がぼやけている写真 藤井 智史

戦死した父を写真で覚えている 柿花 和夫

判定の写真息などしていない 岩佐タン吉

「写真」の兼題から三句。川柳人の目は見えないものを心の目で見てしまうのだ。

代々の墓を畳んで骨は海 藤井 則彦

平成の年号も変わる。散骨の時代が来るのであろうか。「私を忘れないでください」と今日も五七五と居る。

むせぬ煙

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

はびきの市民柳柳会(大阪)中川ひろ介報

百度石走って廻る炎天下
百歳を生きると決めた今青春
吉報に百の羊が眠らない
百歳の涙と汗が被災地に
企てにはまったふりで馬鹿になる
企画書の途切れ途切れにある苦悶
計画を企て後に頓挫する
改竄で企業も揺れる土台骨
西日本豪雨の被害くやみまず
一刻も早い企て被災地へ
企業家の矜持大きな空を抱く
花火師の火傷おそれぬ大花火
よそ見しているから火傷気付かない
スパイクが火傷球児の甲子園
沖繩にまだに残る火傷跡

シルク
かつ美
欣之
みつこ
清
大子
雄太
久仁子
真
洋一
かこ
フジ
さくら
ちづる
一文

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

踊りましょタンゴのメロデイ夜明けまで
なつかしいメロデイだつい口ずさむ
信号機命を守っているメロデイ
赤とんぼのメロデイ明日また遊ば
夏いろにトーン半分あげました
三線のメロデイ沖繩の歴史
口遊む二人で聞いたメロデイを
死刑では悪夢のサリン終わらない
悪夢ではあったが少しなつかしい
どんだ底を教えてくれた悪夢
額縁のとうさん抱いて悪夢除け
災害で夢をのみ込む家権災
悪夢から醒めたか人の顔もどる
気温計もうぎりぎりと音をあげる
ありがとう間に合いましたベッド際

里子
かりん
五月
克己
ばっは
志津子
舞夢
廣子
シマ子
久仁雄
喜与子
舞蹴
まつお
妙子
雅美

ケロイドがああ八月を覚えてる
あのままじゃ発火しそうな青リンゴ
月を抱く貴女に低温火傷する
執着を愛と見紛う大火傷
究極の火傷はカジノ依存症
六千度ああ火の玉の下にいた
改竄は火傷だけではすみません
アデイシヨナル残り時間に火がついた
思いまで写ればこわいレントゲン

いさお
高鷲
久仁雄
壽峰
紀雄
ダン吉
専平
ひろ介
千鶴子

ぎりぎり迄二ニュース追ってる事件記者
ぎりぎり耐える男にある度量
ぎりぎりの暮らして文化遠くいる
錆びついたけどぎりぎりの愛さがる
スマホ切ってボクとしゃべっておかあちゃん
嫌なこと我慢をせずにすべて切る
民の声聞かず切り捨てカジノ法
五七五穿ちのペンで世相切る
美味いのは身銭を切って飲むお酒
首ちやうで俺の方からおさらばよ
しら切ってもお天道さまは見てござる
沈黙が口火切るのを待っている
ふっ切れた顔に迷いの痕はない
縁切った人駅頭で子供つれ
切り目からぱりつと裂けた熟れ西瓜
髪カット明日のパワーが湧いてくる
風を切り自分の足で歩いてる

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

八十の節目をしかとまた走る
記念品よりも嬉しい金一封
奮発の酒と肴で古希祝う
記念日に二人で植える愛の樹を
賞状もメダルも今はゴミと化す
もう大丈夫生前葬をやったから
廃校の記念樹だけは未だ元氣

芳生
則彦
風来坊
小とみ
一呑
のぶよし
ひとし

ひまわりもぐつたりとする敗戦日

貧しさの記憶が消えぬ終戦日

生きて来た記念に拝む御開帳

にぎわいはあの世からかも記念句会

冷蔵庫の役を果たした深い井戸

深みある川柳僕が目標値

雪解けの雫平和が続くよう

深い皺喜怒哀楽が交差して

老々介護ふかい谷間を覗き込む

ブーツでは超えられそうにない今宵

新しいおしやべり仲間出来ました

冷たさを赤い口紅隠します

ハートブレイクこのころ涙ばかり出る

夫婦円満山坂あつて築かれる

申告書出すまで何も手につかず

ブーケトス孫のためにとバアが取る

ベテンスが私の顔でやつて来る

教会で神としている口げんか

幸せな事に食欲健在で

まだ月も酔い足りないで踏んだ影

反比例する脳の皺顔の皺

いきおいよく鯖缶グイッ一人の夜

許せなかつた時間長かつた肩凝り

和歌山三幸川柳会

楠原

富香報

宇宙から見れば軋んでいる地球
皿割ったぐらいで時は止められぬ

保子 和子

姦

洋子

風来坊

柳子

京子

重虎

隆樹

美鈴

慕情

吹喜

久美子

孝子

黙人

初枝

英子

真由美

吞舟

龍馬

ふさゑ

花峯

霜石

和香子

規子

激論が軋み結論出て来ない

若者が散った知覧の語り草

濡れ衣でわたしの前にある踏み絵

若い気でジャンプ仮面がずり落ちる

老いた手で濡れた翼を庇いあう

まだ若い暗示をかけて生きている

追憶へ月の光に濡れながら

頬杖をついた付近が濡れている

潮時を待って女は涙する

身の丈を知らずに背伸びした若さ

自立する少年の橋軋み出す

一枚のハガキが濡れたまま届く

君となら傘一本で丁度よい

若い芽が伸びる白衣の顕微鏡

若竹のまつすぐ伸びる未知の空

繋がれば人間みんな温かい

万国旗濡れて地球が軋みだす

しつとりと七変化して魅せましよう

軋む日もあつたけれども生きている

生きてゆく手本のように若葉萌え

軋む戸を無理に開ければ初夏の風

軋み出す跡継ぎのない農作業

俄か雨濡らしてならぬ一張羅

無駄にした時間数える時間増え

共働洗濯物が濡れている

若いこと何にも勝る宝もの

失敗をしても若さという味方

准一

義雄

智三

碧

幹子

当代

次根

菜摘

俶子

起世子

純子

絹子

美枝子

ひろ子

宏夫

日出男

明子

知香

美羽

あき子

よしこ

敏照

千鶴

一雄

宏枝

まさ

昭枝

栗原道夫選

旅先でわたしを天日干しにする

6Bとワイングラスのシャイな位置

仏様ときにはパンも召しあがれ

今日もまた漫画のように生きてやる

階段を上がりしばらく考える

糠床をかき混ぜながら独り言

告白してから薔薇は色褪せる

涼しい顔して噂の人のお通りだ

アンニユイの午後を金魚と分かち合う

無色無臭で私のそばに居る天使

知香

和香子

半徳

文道

紀久子

郁子

富美子

理恵

ひろ子

遠野

佳句地十選

(9月号から)

矢倉五月選

お返事待ち続ける程若くない

失恋はワーワーと泣きません

流した汗がダイアモンドになりました

ごちそうさま静かに箸を置く感謝

地の中の根は出しやばらず花咲かす

椅子を引く前にオーダーするビール

泣くほどでないと思さんの強気

家を出てはじめて母に様と書く

靴擦れのような気分の一三三三

無添加の愛を注いで気づかれず

理恵

勝弘

かこ

美津子

耕治

時雄

瑠美子

郁夫

美ツ千

久仁雄

逆らつた風に時おり諭される

富香

神様に試されているこの苦境
人間の油断を試す坂の汗

比呂子

グラビアに御一家が出て四季があり
五十年過ぎてワイフの有難さ

四郎
蜂朗

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

何もかも妻に決定権がある

鬼焼

城北川柳会(大阪)

正報

おほほほと美人団扇で口隠す

重忠

決定はピテオ悔しいアウトです

昭紀

重力に逆らえ切れぬ砂時計

博

黒豆茶麦茶と競う栄養価

弘六

迷つたらまずは一歩の靴を履く

夢香

猛暑日はひまわりさえも蔭探す

義昭

嫌な話も臭いも団扇追い払う

一瑤

決断を迫られゴクリ息を呑む

栄香

子を寝かす団扇もあるい風になる

郁夫

総入菌外した鬼の寝言聞く

天翔

言うまいと決めた言葉に鍵をかけ

蘭幸

心根のゆらぎが筆の跡にある

野鶴

涙目も団扇で隠す大あくび

一平

一生を決めるじゃんけんほんだった

規代

汗知らぬ TeePカットの胸のバラ

朝子

ブライドは鬼に踏みつぶされた悔い

美恵子

ハンサムの人が笑つた気が晴れた

宣之

望郷の念理由をポツリ語る母

麗

細かいことにこだわると大成しない

蟹郎

雨男一人もおらず今日は晴

半徳

もういいよ酷暑大雨夏の危機

縣笹

軍配に団扇は今日も活躍す

菖子

慕まじり終えて夫婦の気も晴れる

笑子

様ざまな思いが募る八月忌

志華子

被災地へ麦茶持参でポランティア

幸安

気分快晴 Teeブルクロス変えただけ

敬子

筆まめの母の手紙にある気概

満作

天空の鬼の仕業かあの豪雨

敏子

夫はデイ介護日記が晴れて来る

輝恵

紅させばうつ心の心に火が灯る

賢子

子育てで母も時には鬼になり

雅女

ジュンブライドあの日の空を忘れない

淑子

夕焼けへひとり石蹴る天の邪鬼

星雨

夏休みで鬼の形相変わるママ

真理子

晴れ男雨おんなには負けている

寛

古い一人猫に頼られ元気出す

和

細くなる絆を確かめる募参

彰夫

心強い安否気遣うメール来る

歩美

みぞおちが逆流します宴半ば

宣子

里帰り赤鬼になりイビキかく

千代

手仕事も老化防止と精を出す

初音

戦争展だっつ子たちが押し黙る

肇

細い体に似合わず態度でかい妻

凱柳

想定外土砂災害がすぐ近く

汎美

35度越えたら蚊さん寄り付かぬ

武彦

致死量の酒鬼となり管を巻く

一粋

お別れも言えずただただ雨が降る

厚子

何かある私を残し父息子旅

克己

次々に鬼や蛇が出るスポーツ界

茶子

きょうのそらおつきまがはんぶんこ

史子

借金のため聞かずに貸してくれ

千恵子

少年が細い肩にし気にかかる

節子

お別れも言えずただただ雨が降る

か

やる気こそ一歩踏み出す起爆剤

俊雄

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

免許証先ずは認知度試される

弘子

帰りたい郷はかえれぬ放射能

高明

筆舌に尽し難いと言う暑さ

榮子

まだ泳げるか試してみたくなる水着

慶子

第百回高校野球名乗りあげ

實

心頭など滅却できぬ酷暑の日

宏造

カットする余地なく悩む散髪屋
筆洗う時はこころが澄んでいる
門限をしぼしぼ破るシンデレラ
カットなどしなない熟女の長電話
反抗期血の繋がりが疎ましい
こころ売る理由は胸の奥にある
生きる理由聞かれて困る八十六
被災地を想えば愚痴も消えてゆく
加齢ですその一言で片付ける
記憶からカットしたはず古い傷
逆ろうて逆ろうてきた私です
十三人処刑しても根は残る

川柳塔なら

大久保眞澄報

働哭を休耕田が聞く先祖
聞こえてますよ聞きたくはないけれど
なれ初めと果ては聞くだけ野暮になる
聞き違いあつては話縫い合わす
他人を責める前に我が非を胸に聞く
君の名は問えば昭和が振り返る
聞くだけは聞いておくよと逃げられる
猛暑日の刺那を生きる蟬時雨
この酷暑被災地にさえる容赦無く
猛暑日の耳を疑う雨の音
涼しげな一句を添えてかもめいる
鉄打ちて南部風鈴風に舞う
人間の断末魔聞くこの猛暑

実 一步 洋志 寛昭 捷二 和夫 たもつ 高志 弘委智 修 勝弘 正

暑中見舞に同封します雪女
暑いのにゴチャゴチャ言わんといてんか
暑いねも返す言葉も汗まみれ
被災地のガレキに垂れる泥の汗
かんにんに怒らせ本音探ってる
カンカンの怒声にスマホこわれそう
診察に長く待たされ不健康
微笑むが煮えたぎってる腹の中
かんにんに照り脳ミソまでが茹であがる
かんにんに激怒父にも辛い過去
かんかんにハザードマップ怒ってる
お天道はん下界にお灸据えてはる
太陽に隠れて暮らす日々に慣れ
十五歳無限の駒に差す朝日
忘れたい罪を太陽炙り出す
水平線の朝陽へ夢が発芽する
混沌の胸をなだめている夕日
ヒト科への罰か灼熱の太陽
この夏の太陽働かすぎていませんか

川柳茶はしら(愛知)

関本かつ子報

一言が多く胸にさわる部下
返すのはいつでもいいと貸してくれ
消費税正味をへらしかパーする
乾杯のどの手も老いのしみが
足踏みして休む人生あつてよい
来なくてもいいよ名古屋は40度

敬介 勝弘 國治 成子 ふりこ 恭昌 おたか よう子 優 比呂志 紀雄 敬子 崇明 雅美 美智子 惠美子 貫一 理恵

川柳わかあゆ(高根) 松本はるみ報
足音も疲れましたとゆう帰宅
足音はワルツのリズム春はそこ
進化論成る程智恵のある話
有り難うそのひと言に進むわれ
数知れぬ味方があつて長寿です
故里の空にゆつくり流れ雲
アルバムにうぐいす色の服似合い

川柳ささやま(兵庫)

北澤 稠民報

ランドセル背負う子町の宝物
婆ちゃんを無口にさせたベットの死
燕が別れを告げず巣立ち行く
思いたち昔愛した人を訪う
またお留守あなたの耳は今どこだ
留守電へ一息置いてメッセージ
心配事何年先まですればよい
車窓から自然の美術見飽きない
猛暑でも仏様には熱いお茶
クーラーも夏バテしてますこの酷暑
疲れても何より葉っぱビール
一目はれ妻との出合い理屈ぬき
くすりより労う言葉痛み消す

かほろ 哲男 稠民 眞由 さゆ子 幸子 善輔 照代 美智子 重男 剛 喜弘 良子 安子 ハル子

富柳会(大阪)

関 よしみ報

猛暑の日防犯カメラににっこり

文重

待って待つてロマンずつと待つていた
 ペン持つと指はロマンを追いかける
 頼られるうちが華だと熱い汗
 屈辱をバネにわたくしを磨く
 手こずった息子を今は手こずらせ
 バランスよく仏と神を頼つてる
 送り火に妻は淋しく今帰る
 導いた子供に今や導かれ

南大阪川柳会 松岡 篤報

浮世絵師枕絵描いて名を残す
 電車なら枕なしでも良く寝れる
 避難先では枕どころでないだろう
 ドタバタと家を支える母の愛
 ひと波乱あるぞ隣は朝帰り
 八十の坂ドタバタ騒ぐ事もない
 地震雨猛暑続いて落ち着かぬ
 ドタバタともう平成も店仕舞い
 ドタバタと動いた頃が華だった
 何しても無理の二文字で片付ける
 湯豆腐がメイン京都のおぼんざい
 軟弱な日本外交もどかしい
 口出せば母はやりわり釘を刺す
 一芸に秀でて当り柔らかい
 麻原のやわよ襦袢をされ処刑
 疑いを知らない老母独り住む
 疑わずすぐに信じる娘の言葉

芳香 一步 朝子 賢子 五月 堅坊 司 福貴子 篤報 国和 忠昭 一步 真佐子 恭昌 ひさ乃 実 直樹 志華子 秀子 なぎさ いさお 弘委智 たもつ 東風 柳右子 ルイ子

核の無い世界になると信じた
 まだアベを信じる人が居るなんて
 飼い主を信じてベットひたすらに
 信じられても神が信じる人は居ず
 救援を信じ不安を振り払う
 意味もわからず屁理屈を言う反抗期
 今以て意味が解らぬピカソの画
 Vサインしてるライバル胸さわぎ
 意味ありげだから怪しい時もある
 毎朝のパナは意味をてんこ盛り
 さりげない笑顔に深い意味がある
 意味なんか考えませせんポランティア
 ぼちぼちと言えは儲けて居はるごと
 恋せねば世に生まれ来た意味がない

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

喘ぎながら蛇口をひらく熱帯夜
 お返事に選択肢などありません
 ほんやりの月に予定が危ぶまれ
 転動にびっくり急なプロポーズ
 風化するそしてなかつた事になる
 エプロンのままで出社のおとうさん
 ストレスが溜まるほんやりしていても
 ほんやりと昨夜の夢を抱き寄せる
 身命を賭して原爆語り継ぐ
 今日中に仕上げとてやとは上司
 通行人Aで始まる芸の虫

和雄 勝弘 弘子 亜成 克己 シマ子 あさ子 修 紀乃 柳伸 郁夫 直子 楓 楽 あきこ 小雪 秀子 よしこ 知香 保州 大輪 寿子 日出男 克子 紀子

妻笑顔きつと私は助演賞
 脇役に徹した母は偉かった
 光らせる為に脇役奮起する
 全員が名脇役の佳い映画
 カスミ草に徹した母のマイペース
 脇役も上司もなくてポランティア

京都塔の会 山田 葉子報

休肝日あけてわくわく縄のれん
 丸ごとの西瓜わくわく子等集う
 認知症心の闇はいかばかり
 主婦業はいつになったら定年に
 盆踊り乱れた裾を気にもせず
 おつりのアビールなれど的を突く
 災害の後の闇から無事な声
 暗闇で死の商人が捌く武器
 アビールは特に無いのよ美貌しか
 一〇〇点は見つかるように隠してる
 ジーンズの破れ若さをアビールか
 元氣だぞ早足見せて歩いてる
 節電なんて言うてられない命がけ
 請求書にびっくり夏の電気代
 千羽鶴一羽一羽に有る叫び
 プラゴミの浮遊でビーチへそ曲げる
 家族中を闇に沈めたベットロス
 新月になつても街は歌々と
 どこまでも子等を蝕む闇サイト

京子 なるこ ほのか 愿 富美子 徑子 五月 哲子 ルイ子 弥生 昭 福子 欣之 多津子 弘子 紀乃 泰夫 満子 則彦 保子 洋志 宏子 弘之 美津子

どんだの闇にも鬼はいなかつた
強烈にアビール我こそ二刀流
沈黙というアビールで意地通す
ヒビ割れたブロック塀の語るもの
夏まつり夜店へ駆けて来るユカタ
好きな人出来たと話す娘の笑顔
握りしめ発表を待つジャンボくじ
警報が次次慣れるのも怖い
ダイエツト成功させて着るビキニ

長柳会(大阪)

辻村 ヒ口報

病名も家系とつなぐ律義者
苦難こえやさしさ滲む良い顔に
血の滲む稽古が生んだ初賜杯
御先祖の威光が滲む盆の墓
災害時近い他人に助けられ
父母逝つた故里遠い距離となり
いさかいは微妙な距離で様子見る
お隣と疎遠悲しいほどの距離
スポーツで世界をつなぐ五輪の和
梯子して思わぬ医師に辿りつき
着物着て歩く京都の異邦人
指切りの嘘を知ってる葉指
いとおいしい乳房まさぐるもみじの手
ごめんねの言えない性の持つ疼き
涼やかな彼のまなざし恋心
心頭滅却しても涼しくない猛暑

求芽 英旺 文代 正彦 義昭 美籠 葉子 雅美
美しい所作に涼風付き纏う
真夏でも我が懐の涼やかさ
役人は涼しい顔で汚職する

ブラザ川柳(大阪)

梶原 弘光報

甲子園汗と涙の青春譜
決然と間合いを詰めた妻の乱
始球式名手の球が届かない
舌の先三寸が云うほら話
となりだが挨拶だけのお付き合い
絶妙な距離アベツクの夕涼み
遠いにお帰りなさい先祖様
経験をしわに刻んだ父の笑み
血の滲むような努力のポランテア
弁当の汁が滲んだ新聞紙
あの目付き石破は顔で天下得ず
アスファルトいたたまれない照り返し

正美 淳司 ゆき
久美子 正子 修 政夫 五月 清乃 淳司 和代 悦夫 一彌 克三 弘光

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

人生を表す漢字忍か楽か
出来立てのほやほや全部自信作
生きものの声私も声を出すこの世
この喧嘩言い間違いで矛取め
だるそうに風車が回る炎天下
思いやり濫用されて地に落ちた
舌足らず回りまわってボケにされ
デイに行き友達出来てしあわせよ

紀の治 恵子 ひろこ

七夕に縁ない息子流れ星
おまかせが好きな私の処世術
折りたたみ出来る西瓜は何処ですか
萬緑に一際目立つ山ぼうし
グルの骨海に散骨それがいい
菌磨きし口をきれいにボケ防止
豊作疲れ梅干梅酒シロップと
百歳を目指してみるがこの猛暑
耳の奥良く鳴く虫を二匹飼う
遠慮する犬で布団の隅で寝る
冷や汗で三分間のスビーチだ
紫陽花の色濃く咲いた朝の道

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

顔見知り会つたが名前出てこない
誓つてとねだられたので顔を立て
その顔は恋拾つたね夏の海
おふくろの柔和な顔に安堵する
平穏を誓う他にはない暮し
宣誓などせずともうまく行く夫婦
永遠の愛あり得ないのに誓わせる
幸せにしますと誓い先に逝く
来月は必ず払う今日は付け
弁舌に人間性が透けている
別居してにんまり独り好き勝手
台風で飛んでしまった夏祭り
お祭に市と踊り手と合わぬ息

ゆたか 治代 美穂 瑞枝 宏之 美草 美佐子 多美子 久直 日枝子 菜々 柳童 正子 美佐子 一弥 桂子 則彦 孚彦 奈津子 守啓 久子 郁子 春代 黒兎

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

国と国歴史に学ぶ難しき
 平凡の中にこそある処世術
 沖繩から何を学んだのか政府
 美女のしぐさ真似してみてもモテません
 次女ゆえのひがみだつたか甘え下手
 胸の影消えてすかっとするカルテ
 レベルの違い知ってすかっど負けもよし
 すかっとはしないが許す事にする
 すかっとならぬ死刑執行したけれど
 断捨離で余計ゴチャゴチャした我が家
 婆さんが悪質詐欺をつき出した
 五曲ほど十八番唸れば晴れる憂さ
 終電にメーク崩れたお化けたち
 腰抜かすお化け同士の鉢合わせ
 お化けやろ八十過ぎてあ的美貌
 暑すぎて夏は休むというお化け
 かき氷食べて出番を待つお化け
 この猛暑お化け顔して唸ってる
 お化けにも別嬪さんはおるやろか
 妖怪のようなトランプいつまでか
 持て余すお化けカボチャの使い途
 お化けより恐いものです甘い口
 人生の垢山間の湯に流す
 ひと言に苦勞すかっど報われる
 帰った可笑顔の子等がしがみつく

包丁に西瓜すかっど夏の味
 垢抜けた彼女息子の大手柄
 飛行機雲が青空を真つぶたつ
 洗い浚い吐いてお繩になりなはれ
 ああ夫婦越えた七坂有為の山
 高いの音が賑わう魚市場
 朝顔も頭を垂れるうだる昼
 赤いバラ心の風を奪われる
 明日の夢こどもに託すウサギ小屋
 愛想よく腰低くして売る老舗

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

竹竿で魚を釣った良き時代
 総裁選へ野望が渦を巻いている
 被災地におふとん叩く音はいつ
 売国に立ちはだかりて翁長逝く
 薄い髪遣伝か老いか解らない
 高校の野望が集う甲子園
 叩いたらホコリ出そうな金バッツ
 しなやかに生きよと竹の飄飄と
 この星はオレの物だと星条旗
 親父の拳固あつたから今がある
 竹コブター乗って避暑地へ逃れたい
 罪のない人生叩く自然災
 竹の子が俺の踵を突いてくる
 日本制覇野望を抱いた教祖の死
 竹林の風協奏曲になる葉擦れ

唯教 薄くなる頭で国を考える
 澄空 大阪一美味いお好み焼く野望
 みつこ 点滴から薄いおも湯に生き返る
 進 少々のことでは折れぬ竹の意地
 倅子 水子供養薄いえにしに手を合わす
 憲 竹トンボ見果てぬ夢を乗せて飛ぶ
 光雄 叩かれて揉まれ大きくなる器
 ゆみ子 薄つべらだが油断できない安倍首相
 敏治 それなりの野望を抱く入社式
 愿 ポケットの財布泣いてる奇数月
 紀雄 薄味はわが身のためとがまんする
 信子 竹藪も山も呑み込む大豪雨
 直子 ベビーなら頭髮薄いはずやけど
 太郎 まだ女垣根を超えて生き直す
 善之 人払いしてコンニャクを出す野望
 和雄 熟れてるか西瓜みんなに叩かれる
 浩子 ドローンと戯れている竹トンボ
 ふさゑ スポーツ界叩かれ世間騒がせる
 一志 薄給に耐え今薄味に耐えている
 栄子 一度だけ妻を家来にしたい僕

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

心ない氷のような言葉だね
 青春の二人に甘いかき氷
 水つく霊体験が忘れられぬ
 かき氷欲しいと夫の独り言
 冷房の寒い部屋でのかき氷

鈍甲 純己
 ひろ介
 一文
 一歩
 高鷲
 壽峰
 康信
 敏子
 清
 万作
 たもつ
 秀夫
 恵美子
 のぶ久
 みつ江
 喜八郎
 珠子
 眞澄
 常男
 風露
 龍枝
 恭子
 瑞子
 玲子

こたえたよ人のみこんだあの豪雨
 こたえるネ馬鹿のトップのお守役
 あの一言わたしの一生こたえます
 過去にない酷暑居座りこたえます
 認知症友の話が身にしみる
 平等も高い敷居が邪魔をする
 敷居なども見飽きたと言う鴨居
 バリアフリーに馴れて敷居にけつまずく
 地震後の敷居鴨居もがたがただ
 ありえない敷居高くて帰れない
 善人を装い疲れ見えてきた
 真夏日に黒装束のお葬式
 装い改め表彰台に立つ
 悪ガキが派手に装う祭りバカ
 人のふり見て装う紅を引く
 ステテコに浴衣で夏を乗り切ろう
 前歯だけ装う老いの低予算
 貧相な格好するなと妻がいう

六甲川柳会(兵庫)

奥澤洋次郎報

康子 次男 醉芙蓉 祐子 茂夫 由紀子 完司 萩江 智恵子 雄大 石花菜 重忠 紀美恵 日出子 鬼一 野蒜 照彦

託された心の借りがかえせない
 印を押す紙一枚の幸不幸
 被災地にボラの善意の花が咲く
 母親に全てを託し子が眠る
 次次とまさかの起る三幕目
 おひさまが怒るが如に照りつける
 メールでは届かぬ紙の温かさ
 句の種を拾い集める夢手帳
 無関心それが危ない平和ボケ
 主治医の眼に生き仏見た腹座る
 少年の拳に託す明日の地図
 大虎の目覚めた先は鉄格子
 とらさんが何処かで見てる夏祭り
 日本を託せる人は誰やろう
 そんな顔しては鏡に叱られる
 紙芝居見る水あめと蝉しぐれ

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

初音報

美穂 美恵子 弘 廣光 としお 正彦 千賀子 道子 盛夫 和宏 武彦 憲三 博 じろう ひとみ 狸月

賞賛を浴びることなどない暮し
 血の通う世話役がいて広がる輪
 この中に私がいま福袋
 介護見て少し痩せろと息子言う
 好きやもん今夜はあんた婦さへん
 中見たら血圧上る袋とじ
 仏様座って居そう蓮の花
 二歳児を一人帰して悔いている
 もう災害は終りにしてと神頼み
 マイナスの金利で利息十五円
 洗濯機の中で家族の和が廻る
 基準値がないから気楽美人の湯
 マドンナの思わぬ誘い血が騒ぐ
 いつの日かまた母さんに逢えますね
 飾らない言葉真実味があふれ
 奥床しく熟成を待つ老いの恋
 包み込む弥陀のまなざし生きめやも
 一回り歳のサバ読みアンケート
 句会終え選者罵りつつ帰る
 保育所で母の帰りを待つ夕陽
 ええ人や丸いお顔で隙だらけ
 どの人の事聞きます神の鈴
 血統の確かな犬に嫉妬する

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

つな子 堅坊 紀華 富夫 祐康 修平 千賀子 ひろ介 良種 雪菜 靖鬼 宏造 ひとみ 美籠 哲夫 ヨシエ 正和 万彩 耕治 かずお 千津子 英坊 芳山 けいこ

あなたたつてあなたのみままで愛される
 貼り紙をするなど書いて貼つてある
 誰にでも愛想振りまくのはすかん
 親切心持った荷物が重かつた
 妬まない自分が小さく見えるから
 大好きと顔に貼り付け逢いに行く
 美しい女に嫉妬してる美女
 富裕層見ると舌打ちしてしまう
 のろのろと昨日を探す二日酔い
 いざとなれば亀も全速力になる
 嫉妬心もやがて枯山水の石
 届かないところに欲しい温湿布
 火星人意外と近くにいたもんだ
 妬まれぬように猫背でよたよたと
 尾島さん意外な場所の人捜し
 お先にと譲つた席が大当たり
 嫉妬する元氣も奪うこの猛暑
 悪い奴手配写真でなるほどな
 一銭の得もしないが悪く言う
 老い独り相合傘が妬ましい
 病人が意外な品をおかわりす
 席題の意外な題にてこずつた
 来る年の願いを込めて障子貼る
 飲んでる割には指が震えない

ふうもん吟社(鳥取) 両川 無限報

辛子 風露 雄大 由紀子 昭子 くにこ 芳光 楓花 照彦 正人 麦青 紀の治 小鹿 石花菜 富隆 野蒜 正男 道唱 久子 重忠 鈴野 清明 規夫 完司

容赦なく地球の怒り降りかかる
 お静かに家計簿の愚痴聞いている
 親の死が疎遠の身内引き寄せ
 常識は時どきキレたほうがよい
 賢沢のつけを猛暑が戒める
 頭から湧き出る汗はハンパない
 猛暑続き夕立恋し虹恋し
 カラオケのマイク離さぬ一人占め
 孫一人保護者六人官参り
 大金を一人占めとは卑怯だぞ
 施設には一人占めする場所がない
 一人占め長過ぎますよ総理の座
 一人占めしたいアイドル皆のもの
 権力を一人占めする怖い国
 一人占めやつと出来たぞ妻一人
 御馳走を一人占めして罪の味
 姉ちゃんに嫌い何でも一人占め
 大の字で野に寝て宇宙一人占め
 ズカズカと泥んこ足が来て遊び
 知らぬ間にズカズカ入るツイッター
 ズカズカと決めるな民の声も聞け
 ズカズカと他人の持ち場荒らすなよ
 ズカズカと町を呑み込む土石流
 ズカズカと妻の悪態胸を刺す
 日めくりがスリムになって心急ぐ
 心急ぐ古い我が家の後始末
 毎日が終活ですと心急ぐ

真理子 みつこ 由美子 一粋 幸子 楓花 凱柳 房江 穀章 勲章 茂登子 天翔 義徳 鐘軌 清信 八千代 一瑤 宏章 茶人 節子 善平 薫 一平 亨 敦鼓 昌鼓 回春子

漁のない船にお神酒をふり注ぐ
 弁当のお釣りまだだが発車ベル
 そう言うな亀はカメなり急いでる
 焦燥の裏で脈拍整える
 心急ぐ時に台風やってくる
 思い出を辿り悲しい酒になる

川柳の花の輪(大阪) 岡本 薫報
 泥の中遺品を見つけ抱きしめる
 世界遺産踏み絵の歴史取り上げる
 ボタン掛け違つたままで友が逝く
 子の一言が静かな老いを曇らせる
 幼子の母の似顔絵宝もの
 辛いなあ今更愛を誓うのか
 神様もお困りでですよ誤字の絵馬
 辛いことノートに書いて解決す
 孫の書くじいじとはあば同じ顔
 絵日記に行けないハワイ書いてみる
 東山魁夷の自然に魅入り浸る幸

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報
 打ち上げる花火平和の象徴か
 華やかな花火はかない煙のみ
 花火師の苦勞花火と共に消え
 人は好き素敵な人にツヤも出る
 色っぽくツヤツヤしてる君が好き
 ツヤツヤになるまで金をかける肌

蟹郎 りんこ 千賀子 心咲 金祥 無限 薫報 みちる 正太郎 信子 泰子 やすの 勇太郎 薫 笑子 昭好 あや乃 亜成 節子 清 昭彦 恭子 久芽代 みち子

ツヤツヤとヨレヨレ共に支え合い
ツヤツヤに磨いて刀飾りです
ツヤツヤのスキンヘッドを手入れする
人を斬る時の新札ツヤが増す
衣食住足りても恋はままならぬ
住む家も私と一緒に年取った
車庫に住む猫も猛暑にダラリンコ
蟹が住む小川が町の片隅に
夢を抱きこの星に住む迷い人
この町に住みこの町の墓に行く
君の住む場所は心に空けてある
澄んだ眼の中に住んでいる私です
ルームシエア貧乏神とわたくしと
貝塚が秘めたロマンを語り出し
岩牡蠣に鮑菜螺に冷一献
貝だつて雑魚と仲良く泳ぎたい
口あけて満月みてる桜貝
あれだけは死ぬまで言わぬ貝になる
ヤドカリのようにチョコチョコ生きてる
ケータイを閉じる孤独な二枚貝
貝になり海鼠になって生きてきた
砂丘の駱駝は貝殻節唄う

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

擲揄される人はやっぱり目立つ人
全没でもうやめようか実のこと
明日へ繋ぐ布石はちゃんと打つてある

美美子 大鯰 玲坊 三津子 泰山 悦子 公恵 龍枝 久江 完司 芳光 美知江 紀の治 滋 岳人 紀美恵 重忠 貴恵 義人 野蒜 石花菜 くにこ

おかささんこちら暑い夏でした
鉛筆の重さよ武器の悲しさよ
四十度耐える身体に生まれてた
鳴き切った落ち蝉せめて埋めてやる
いぬぶぐり実是可憐な花咲かす
ほんとうは困り問われている真価
実はねと遺影に本音打ち明ける
口喧嘩じつは惚気と読まれてる
爺ちゃんにアデランスのせ大笑い
煽てられからかわれての披露宴
これ以上からかわないで真つ赤っか
ちよっかいを出してきたなら大丈夫
からかいにイジメがひそむ怖さ見る
からかつて褒めたら亭主本気出し
平均では駄目なんですとセレブ族
平均台あれば神とのコラボです
エリートのは打たれて均される
平均より個性大事にして欲しい
平均に減っていかない靴の底
日本中猛暑が満ちて涼を待つ
クーラー代言うてられないこの暑さ
涼求めるかき氷屋は汗をかき
冷房の中で風鈴あくびする
平均寿命伸びた分には金足らん
一本だが貰ったバラが素敵です
人は人と言えど気になる隣の人
川柳を杖に平均寿命越え

ひとみ 恭子 みよし 弘子 宣子 千代 堅坊 和宏 順子 新録 敦子 美津子 正彦 盛夫 千賀子 いわゑ 洋次郎 利子 紀華 弘委智 勝弘 哲子 邦男 靖夫 秋果

ある日妻が実はと出した離縁状
実はねと膝のり出して自己主張
水筆 嘉代子
柳藤井寺(大阪) 太田扶美代報
そのうちに果さぬままに逝つた友
人間も六割水で生きている
実行はあなた任せと肩透かし
煩惱と涅槃くるくる熱帯夜
決断へ女が先に判を押す
まず実行せねば進まぬ壁がある
死ぬ死ぬと言うけど死んだ試しなし
澄んだ水目指して終章を生きたる
ドレスと彼お出かけの度変えてます
打水が一層暑さ増す猛暑
日本中に感動くれた尾畠さん
男ならこうと決めたならやり抜こう
自己主張水もしたたるいい男
先ずは咲く覗くの止めて妍競う
水たまりよしと越えて明日を待つ
汚染水そのまま再稼働なんて
くるくるとトンボの目玉まわす指
水道を民営化などさせません
麦茶作り今年はなんと忙しい
二周半して平常心に戻る
くるくると不戦の誓い変えられぬ
尾畠さん水際だったポランティア
くるくると動ける嫁がけむい老い
水筆 嘉代子 俣子 昌代 瑠美子 信二 キーキイ いさお フジ子 六点 シルク 一歩 かずお 光男 よしみ 一文 みつこ 絹子 雄太 喜代子 扶美代 紀雄 まつお みつ江

川柳さんだ(兵庫)

田中 童子報

調教の犬に負けてる英語力
得意だと英語を鼻にかける友
ダーリンと呼ばれハニーと言いつ返す
英語は苦手大事にしたい日本語
英語では心の機微がくみとれず
青い目の英語先生過疎の村
首長くしてポランティア待つ被災
一生懸命汗を流して時の人
齢とればギャグもいつかは円くなり
僕のギャグ笑ってくれる君が好き
うまいギャグ笑い一つに和む会
バカボンの父が大好き良い人だ
今日も元氣絶好調の親父ギャグ
ギャグの意味分らず一度も言わされる
ボクなんて逆らうために生きてる
猛暑日は逆らえきれず溶けていた
酷暑にも芽を膨らます五輪の樹
台風も僕も迷走する後期
袋出してしばし悶える花かつお
逆らった筈が親の背追っている
フルムーン夫一人が上機嫌
満面の笑みでひ孫を抱く白寿
きみのことずっと見ていてなんて彼
よいしょされ小遣い貰い酒よばれ
カラオケでなかなかマイク離さない

あの人は達者だらうか遠花火
恵まれて秋を迎えるハガキ書く
胃を切った僕笑わせにきた見舞
前頭葉九九が言えたら大丈夫
拝まれて買った骨董高値つく
元気です心配無しと菩提寺に
まだ童顔残る球児の愛おしく
甲子園の砂は敗者の肩を抱く
危機感の足りぬ府警に喝を入れ
ちよっぴりがありがたいですお裾分け

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

玉の汗拭く手も惜しむポランティア
五十年ずつと味方と思つてた
万歳ばんざいいっぱいいる味方
がたがたになるまで住むぞこの家に
いつも味方心強いが頼りない
感じておんえ切れぬ位置にいる
ていねいに茶碗を拭いて今日の無事
十指みなみだらを秘める昼の月
風鈴も汗拭いている熱帯夜
がたがたはとんと聞えぬ老いの耳
窓開けて火星の位置を確かめる
薬指しながらあなた思う盆
約束の小指はいつも洗わない
ナプキンで口を拭くにもふと色気

勝正
千津子
ひろ介
紀恵
加代子
つな子
美智子
恭子
雅尚
宣子
健二
英旺
求芽
健三
武彦
多美子
多津子
ヨシエ
きらり
野鶴
堅坊
千鶴子
千子
満子
則彦
がたがたの夫婦互いに助け合う
心に刺さる苦言もありがたい味方
耳澄ますこおろぎの声したよう
終活にジグゾーパズルまだ途中
あのときも暑かったなと終戦忌
ブレないで歩く味方は影法師
落書は拭かれて無垢の顔を出す
がたがたと鍵穴まわし明日ひらく
楽しいと思えば運も味方する
十指でも足りない数の親不孝
二歳児の命を抱いたポランティア

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

ロケットで人気出てます宇宙葬
八十路坂恋の滴がまだあった
おしなべて昭和の母は悲しけり
靴ひもを結び直して二幕目
無駄足としりつつ初志の歩は止めぬ
純情な瞳に一点のくもり無し
邪心捨て上へ上へと立葵
無駄足と解つていても会いに行く
無駄足も没句も無駄にさせません
緑陰の風惜しみつつ昼寝する
母さんの無償の愛にある人気
生命力の凄さ二歳児の生還
宇宙旅夢に終わった貯金箱
死ぬ迄は純情一途で生きていく

美智代
見清
久子
黒兔
耕治
葉子
時子
美佐子
雅美
いさお
正彦
かすみ
薫
鈍甲
修仁
壽峰
信子
秀雄
堅坊
弘委智
朝子
賢子
祥昭
高志

約束が守れず詫げる母の墓
 妥協などしない勝負なピンヒール
 きつちりと約束守る米寿でも
 戦争反対無駄足にさせぬデモ
 子助けの約束守り英雄に
 堀越しの人気の主は百日紅
 お日様も人気もいずれかげるもの
 どっちでも良い約束は覚えてる
 無駄足を踏むかも知れぬ講演会
 思春期を終えて純情脱ぎ捨てる
 強面な男純情な目がきれい
 (アニメーションの世界になつてゆくこの世)

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

座頭市すかつと切ったボス西瓜
 すつきりともう肩書の無いくらし
 とびきりの幸せ要らぬ並で良い
 管みんな取れて退院秋の空
 とびきりと言わぬが僕にすぎた嫁
 百回記念とびきり暑い甲子園
 何処の子も可愛いけれど孫は別
 三枚目俺は心でカパーする
 ああ父のおむつカパーも泣いている
 オール沖繩翁長氏の死をカパー
 カパーしてやりたいどこか駄目なやつ
 笑顔だけは忘れないでと嫁ぐ娘に
 永遠に忘れてならぬ黒い雨

郁夫 寿子 ルイ子 弘一 尚世 麗 銀杏 博泉 さち子 高鷲 亜成 恵子 笑司 智三 秀夫 義泰 みつ江 和美 和喜子 誠夫 保州 喜代志 カズ子 隆昭

孫五人名前ど忘れブリーイング
 生き方を忘れるほどの泥の中
 忘れたい忘れたくない淡い恋
 妻わら帽子ひとつ忘れて夏が行く
 数々の思い出消去して傘寿
 八月に忘れることのできない日

規子子 三成 碧 日出男 義雄 ダン吉

散り際の美学を忘れ名を汚す
 とびきりのニュース二歳の無事を知る
 とびきりのごちそう母のちらし鮎
 あなただけとびきりという畧に落ち
 割り勘はとて平和な打開策

大英 忠多 ひろ子 信二

第42回 鳥取県川柳大会

と き 10月27日(土) 10時開場
 と ころ 米子コンベンションセンター2階 国際会議場
 米子市末広町74 TEL.0859-35-8111
 JR山陰本線「米子駅」下車 徒歩3分
 席題なし 出句締切 11時30分 開会 13時30分

一般部門
宿題と選者 (各題2句・席題なし 披講13時45分)

「大きい」	齊尾くにこ	選
「線」	平尾まさと	選
「開く」	牧野 芳光	選
「山」	谷口 次男	選
「船」	長谷川博子	選
「産む」	竹治ちかし	選
「白夜」	木本 朱夏	選

会 費 2,000円 (大会誌・昼食)
 欠席投句 1,000円 (締切9月30日必着、用紙自由、小為替)
 投句先 〒683-0804 鳥取県米子市米原5-1-3-304
 竹村 紀の治 宛

ジュニア部門 (小中学生に限る)
宿 題 「年(とし、ねん)」 遠藤 量 選
 (2句まで投句料 無料・用紙自由・学校名記入)
締 切 9月30日 必着
 投句先 〒684-0071 鳥取県境港市外江町2182
 遠藤 量 宛

主 催 鳥取県川柳作家協会



川柳塔WEB句会 兼題「窓」

*平抜きと佳作は到着順
*webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

8月例会入選句 投句数405句(208名) 平 宗星 栃尾 奏子 共選

平 宗星 選

神様の覗いてくれる窓磨く
窓ガラス磨いて探す流れ星
病室の窓は淋しく暮れていく
誠実な四角四面の窓ガラス
帰らない窓に映りし子が笑う
吹き抜けの窓にワタシが晒される
天窓を開けると降り注ぐ民話
融通のきかない窓が軋み出す
あなたしか見えない窓を泡立てる
灯がともるきっと幸せなんだろう
タイトルは窓わたくしの雑記帳
蔭の窓から焼く野原みた戦後
窓あけて待っててくれる母がいる
別れよう窓に西陽が当たるから
一方的に見られるだけの棺の窓
窓辺から過去を見ている車椅子
パスワード忘れた窓が開かない
地下鉄の動体視力試す窓
真夜中の窓に魔女の宅急便
偽りの家族が見える飾り窓
すんなりと開かない窓に産み付ける
ウィンドウズ過去の私が蘇る
満月をあざなう窓のベルシャ猫
新聞で拭くと昭和の見える窓
窓越しに愛の讃歌のフェルメール
この窓を開ければきっと青い鳥
窓のない部屋と女と覗き穴
秘めた熱も透きとほれ窓のはざま
ドラえもん窓から答え教えてよ
パスワード忘れたままの鳩時計
窓付きの封筒銀河見てきたか
わけありの窓からもれてくる秘密
佳 窓越しのキスに発車のベルが鳴る
佳 嵌め殺し窓へロミオの恨み節
佳 胸の奥開いた窓が見えますか
佳 裏窓は秘密基地への非常口
佳 窓があり花火に向ける亡女の椅子
人 窓明かりハ行が洩れてくる夕餉
地 キロチンと知らず窓から首を出す
天 人間の背中に不透明な窓

かきくけ子
みぢんこ
龍 せん
颯 来
佐藤 彰宏
な お
雨 径
武本 碧
米山明日歌
里山 水月
西口いわゑ
澤井 敏治
夏川 涼子
白鳥 象堂
北田のりこ
葵
平井美智子
岸田 万彩
海賊 芳山
上原 稔
西沢 葉火
副井 裕
斉尾くにこ
辻内 次根
あ そ か
上山 堅坊
宮坂 変哲
秋 鹿 町
真島 芽
美馬りゅうこ
怜
丘 きらら
勢藤 潤
颯 爽
大島ともこ
佐藤ちなみ
岩根 彰子
山田こいし
平尾 定昭
く み く み

栃尾 奏子 選

空中の夕焼け窓が食べている
窓の外平和な日本確かめる
誠実な四角四面の窓ガラス
天窓を開けると降り注ぐ民話
この窓からいつも入って来るのです
訳あってA 窓口がいいんです。
お向かいもどうやら眠れないようだ
融通のきかない窓が軋み出す
灯がともるきっと幸せなんだろう
焦がれてもセコム貼られた君の窓
窓ガラス割った息子が父になり
天窓に猫が遣した謎の文字
胸の奥開いた窓が見えますか
野良猫が来るじいさんの部屋の窓
窓全開家にもさせる深呼吸
富士山が見えて値打ちが増した窓
飛び越えておいで小さな窓だから
百日紅のピンクが入る夏の窓
キロチンと知らず窓から首を出す
熱帯夜浮世の窓に蚊が群れる
とうもろこしですよ九月の窓ですよ
天窓に猛暑を叩きつけたら
幸せっていつも窓から逃げるのよ
新聞で拭くと昭和の見える窓
窓越しに愛の讃歌のフェルメール
顔パスで窓から出入りするツバメ
温暖化窓の閉まった夏が来た
窓灯りほんとの事はわからない
窓閉めて秘密がちよっと面白い
鍵の無い窓です決して開きません
窓越えて子猫よ世間見ておいで
わけありの窓からもれてくる秘密
佳 注意報スベテノマドヲアケナイデ
佳 いい風だ心の窓を開けておく
佳 窓閉めて女ひとりの顔になる
佳 おやこんな所に窓がある心
佳 クールベの骨太な海みえる窓
人 左遷地の夜を窓から入れてやる
地 ドラえもん窓から答え教えてよ
天 格差とはショーウィンドーの内と外

麦 乃
みぢんこ
颯 来
雨 径
乙川 初音
く み
絹田 あさ
武本 碧
里山 水月
前川 真
森野 ハナ
須賀 琉
大島ともこ
森山 文切
橋倉久美子
岸田 万彩
こ み ち
原 徳利
平尾 定昭
宝花 義一
斎藤 秀雄
尾崎 良仁
ジョニー杉崎
辻内 次根
あ そ か
丹下 凱夫
木原 正雄
藤井 みち
真島 涼
く み く み
や ひ ろ
丘 きらら
武良 銀茶
タ ー ボ
大塚 久子
居谷真理子
水たまり
福村まこと
真島 芽
居谷真理子

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html (サイト管理 森山文切)

第41回神戸川柳大会		第33回渡辺銀雨賞	
日 時 10月27日(土) 午前10時開場		すずむし全国誌上川柳大会	
場 所 兵庫県中央労働センター 2F大ホール		課 題 「線」(2句詠)	課 選 15名共選
アクセス 地下鉄「県庁前」駅 西出口③西北へ徒歩8分		岡崎 守・熊谷岳朗・島田駱舟 小島蘭幸・平田朝子・渡辺松風 他	
J R・阪神「元町」駅西口西北 へ徒歩15分		投句料 1,000円(郵便小為替)何口でも可 ※ 参加者 全員に参加賞呈	投句用紙 所定用紙・便箋用紙・原稿用紙 住所・氏名(雅号・本名)
兼 題 「磨く」 河内谷 恵 選		賞 大賞(1名) 楯・あきたこまち 20kg	
「馬」 小西 博稀 選		準賞(2名) 楯・あきたこまち 10kg	
「淡い」 笹倉 良一 選		4位~10位 あきたこまち 5kg	
「波」 久保田千代 選		11位~20位 あきたこまち 3kg	
「不摂生」 渡辺 信也 選		締 切 10月31日(消印有効)	
「パワー」 村上 氷筆 選		発 表 「川柳すずむし」誌12月号	
「雑詠」 岡田 篤 選		投句先 問合せ先	
各題2句(未発表句)欠席投句拝辞		〒018-1724	
会 費 2,000円		秋田県南秋田郡五城市町東磯ノ目	
出句締切 11時30分		1丁目7-11 湖東印刷所内	
主 催 神戸川柳協会		すずむし全国誌上川柳大会係宛	
		TEL 018(852)2430	
		主 催 川柳すずむし吟社	

全日本川柳誌上大会のご案内(柳多留第21集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第21集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(二社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こそつてご参加ください。

課題と共選者(各題2句・連記)

「和む」	池 さとし	大田かつら	共選
「予定」	堀井 勉	岩原 茂明	共選
「叫ぶ」	館岡 稲風	稲村 遊子	共選
「コイン」	安藤 波留	岡田 篤	共選
「幕」	矢野 義雄	大島 凧子	共選

第二次選者 竹本瓢太郎 佐藤 岳俊 鈴木 公弘
齊藤由紀子 田中 螢柳

参加費 2,000円(投句料「平成柳多留」第21集代金含む)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・日本青少年育成協会会長賞・全日本川柳協会賞・全日本川柳誌上大会賞(予定)

締切 平成31年1月31日(木)〔当日消印有効〕

発表・表彰 第43回全日本川柳浜松大会(2019年6月)

参加方法 参加用紙に記入し、参加費2,000円(振替又は小為替)とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

一般社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433
振替口座 009701913575

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日) 14時10分締切 兼題：弁当・そっくり・訳あり 課題吟：実	和歌山商工会議所 TEL 073-422-1111 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 楽原道夫
南大阪 川柳会	15日(月) 18時30分締切 本心・いやす・りりしい・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時50分締切 ロボット・暮す・痛い・ 自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	16日(火) 12時開場 第7回さんだ川柳大会 男・拾う・プラン・にっこり・無理・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 詳細は川柳塔誌10月号41ページ参照 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	17日(水) 13時45分締切 席題・そわそわ・燃やす 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 口車・悩む・正面	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL 0172-36-8605
川柳 ねやがわ	21日(日) 13時締切 席題・汚い・悪質・アンコール・ 自由吟	寝屋川市 産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 シューズ・空き家・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
岸和田 川柳会	21日(日) 12時開場 第68回岸和田市民川柳大会 迎える・伸びる・冗談・ぎょっと・カラフル	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 詳細は川柳塔誌9月号109ページ下段参照
川柳塔 すみよし	23日(火) 14時15分締切 筒・モデル・狭い	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸柳会	24日(水) 13時15分締切 おいしい・方言・洗う	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳会	28日(日) 14時締切 枯・許す・センター	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 13時30分締切 自由吟・太っ腹・リセット 急ピッチ	開発ビル 2F (鳥取市片原1-107) 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京都 塔の会	29日(月) 14時締切 マドンナ・世・らしい・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	4日(木)14時締切 安・さてさて・納得	奈良市立中部公民館 4F 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
倉吉会 川柳	6日(土)14時締切 とっぶり・減法・稼ぐ・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟	6日(土)13時30分締切 足・輪郭・怪物・いろいろ	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
西宮北口 川柳会	8日(月)14時締切 したたか・縫う・ざらざら 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	9日(火)13時30分締切 星・食べる・はやばや	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さ かい	9日(火)14時締切 自信・チェック・折り句:しまね	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	9日(火)14時締切 叩く・夜・のんびり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
あかつき 川柳会	12日(金)14時締切 近い・運・大空・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	13日(土)14時締切 覚める・知恵・匂う	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
城北 川柳会	13日(土)14時締切 伝える・ゴール・斜め・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	13日(土)14時締切 波・ゆとり・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
六甲 川柳会	13日(土)14時締切 祝杯・無印・うきうき・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打 吹	13日(土)13時30分締切 波・落とす・静か・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	14日(日)14時締切 女神・すつきり・涼し・雑詠	洪川町・安中町集会所・JR八尾駅5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之

柳界展望

★「平成29年度 川柳宮城野」

最優秀作品 木田比呂朗

注意して聞く年金の息遣い

▽出版△

○乗原道夫句集「うつくしく強く地球を蹴る遊び」。新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価1200円＋税。

▽訂正とお詫び△

○9月号P101上段18行目、身の内の光り↓身の内の尖り

▽訃報△

○8月25日、松村里江さん(同人・豊中市)が逝去。享年93。葬儀には、理事の山田耕治氏・藤岡りこ氏をはじめ同人多数が参列した。

▽新誌友紹介△

松江市	内藤 章江	紹介者	岡本 勲
奈良市	加藤江里子	三田市	住吉美和子
紹介者	米田 恭昌	紹介者	北野 哲男
大阪市	渡辺 富子	三田市	福田 好文
紹介者	下野ひろ子	三田市	森 玲子
高槻市	木本 朱夏	紹介者	北野 哲男
紹介者	森 多美枝	三田市	福田 好文
青森県	香山かずお	三田市	中山 昭美
紹介者	香田 龍馬	紹介者	北野 哲男
河内長野市	木本 朱夏	三田市	福田 好文
紹介者	坂野 澄子	三田市	丹羽 美恵
河内長野市	石田 隆彦	紹介者	北野 哲男
河内長野市	宮崎 弘美	福田 好文	好文
紹介者	石田 隆彦	堺市	楠井 輝子
河内長野市	山本 幸子	紹介者	矢倉 五月
紹介者	石田 隆彦	常任理事会9月7日(金)	
木津川市	池田ヒサ子	①役員人事について②川	
紹介者	山岡富美子	柳塔まつり関連の確認③	
大阪市	福楽恵美子	同人総会について④六賞	
紹介者	吉村久仁雄	選考結果④本年度収支報	
津山市	丸橋 野蒜	告⑤災害発生時に於ける	
紹介者	新家 完司	塔社行事の開催について	
笠岡市	藤本 孝子	⑥定例確認事項。	
紹介者	新家 完司	次回常任理事会11月7日	
寝屋川市	丹下 凱夫	(水) AM10時	
	小西正太郎		

新同人紹介

磯島 福貴子

― 一歩・蕉子推薦

小野 雅美

― 蘭幸・完司・蕉子推薦

田中 廣子

― 蕉子・舞夢推薦

福田 正彦

― 武彦・宏造・勝弘推薦

森 菊江

― 美籠・耕治・宏造推薦

第60回 豊中市民記念川柳大会

と き 11月23日(祝日) 正午開場
ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
(阪急宝塚曾根駅東100メートル)
会 費 1,500円(記念品・発表誌進呈)
宿 題 「記憶」 碓氷 祥昭 選
「切る」 嶋澤喜八郎 選
「器用」 西出 楓楽 選
「ビッグ」 矢沢 和女 選
「ゆらぐ」 天根 夢草 選
「危険」 森中恵美子 選
「昔」 田中 新一 選
締 切 午後1時
*昼食を済ませてご出席ください
連絡先 田中 螢柳 電話 06-6853-0470
主 催 豊中川柳会

第69回 西宮市民文化祭川柳大会

日 時 10月21日(日) 開場12時
場 所 西宮市民会館(市役所南隣)4階
会 費 1,500円(呈 作品集・小品)
兼 題 (各題2句・欠席投句拝辞 席題なし)
「エキス」 前中 知栄 選
「あわれ」 河合 受身 選
「契る」 片山 忠 選
「挨拶」 久保田千代 選
「温かい」 長浜 美籠 選
「首」 岡田 篤 選
「自由吟」 村上 氷筆 選
出句締切 13時30分
交通案内 阪神西宮駅 市役所口 北へすぐ
JR西宮駅 南側下車～国道2号
線を西南へ約1.2分市役所南隣
主 催 甲子園川柳社
連絡先 村上 氷筆
〒655-0048
神戸市垂水区西舞子1-1-11-102
電話 078-600-8565
携帯 080-1406-1717

和歌山県川柳協会26周年 全国誌上川柳大会

題と選者

題 「海」 2句

選者 6名共選

本田 智彦・菱木 誠・新家 完司

川上 大輪・古久保和子・山下修子

謝選 「山」 1句 三宅 保州

投句料 1,000円(切手不可)

締 切 11月30日(金) 必着

投句用紙 所定の用紙(コピー可)

投 句 先 〒640-0413

和歌山県紀の川市

貴志川町神戸375-5

山東日出男あて

電 話 0736-64-8062

発 表 誌 平成31年3月ごろに送付

主 催 和歌山県川柳協会

第16回 鳥取市鹿野町 ジュニア川柳大賞募集

宿題と選者

「夢」 新家 完司 選

「宝物」 木本 朱夏 選

「つくる」 石橋 芳山 選

締 切 11月16日(金)(当日消印有効)

応募先 〒689-0405

鳥取市鹿野町鹿野1517

鳥取市教育委員会

事務局鹿野分室「川柳係」

(封筒には「ジュニア川柳投句」と朱書きのこと)

★応募できるのは小学生・中学生

★一人各題2句以内

★所定の用紙に名前(ふりがな)・住所
・学校名・学年を明記

★投句料は無料

主 催 鳥取市

編集後記

★明月や静かの海の足跡
薫風

★9月6日朝、テレビの

スイッチを入れて愕然とした。震度7の地震の惨状が写っている。北海道全域で停電という事態に我がことのように気分が落ち込んだ。実は我が家は21号台風の直撃を受けて9月4日午後2時から停電。私はスマホもラジオも持っていない。全く情報が入らないまま夜を迎えた。

★以前愛媛の内子町で買った和蠟燭を取り出している。暗闇の中に明かりが揺らぐ。壁に大きく私の影がゆらりと映る。暖かくやさしい炎のいろに心が安らぐ。昔の人はこの明かりの周りに集まって過したのだ。どのような濃密な時間だった

のだろう。寝る前は読書の習慣のある私は、蠟燭の明かりのもとで届いたばかりの俳誌「船団」を読んで眠れない夜を過ごした。

★結局電気がないままに暑さの中、団扇を片手に22時間過した。情報から全く遮断されたままの得難い体験をして私はスマホを持って、と決めていた。ガラケーだけではイヤという時に間に合わないことを痛感。そして電気存在など考えず、ほんやりと生きていたことを思い知らされた。通電していないければ冷蔵庫は凶体の大きな厄介者ではないことも・・・

★北海道には同人、誌友の方々もいらっしやる。川柳グループも多い。あの、この人の安否を思う。どうぞお体を大切に、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。
★六賞発表号をお届けし

ひとこと

小笠原望先生

昭和の匂いのある大阪・十三の小さな映画館で「四万十」のちの仕舞」を観ました。最後の清流、四万十川のはとりで在宅診療で出会う命、見送る命をユーモア溢れる筆致で綴られた、小笠原望著「診療所の窓辺から」をもとにつくられたドキュメンタリー映画です。

小笠原望先生は大学病院から高松赤十字病院、そして二十年以上前から四万十の内科診療所院長として、奥様共々赴任されています。

す。入院床が無いので診療が終つてひっきりなしにかかる電話で訪問診療をされます。病院勤務時代には花の名前も知らず自然を感じることもなかったそうですが、現在は往診の行き帰りに季節の移ろいを感じるそうです。

たまたま当日は監督さんと小笠原望先生が舞台挨拶に来館されており著書にサインを頂き、写真も撮り忘れられない一日になりました。小笠原望先生が番傘同人であったことを後から知りました。

(山根 妙子)

ました。受賞された皆さん。その中の一冊、『鑑のおめでどうございま 賞川上三太郎単語』(S 53・6・11発行、『柳都』増刊号、大野風柳著)の 一部を紹介する。

□余白がなくて、隙まの ある、句がある、二つを 混同して、からである、川柳は、水の味である、飲む前も、たのしく、飲んだあとも、たのしい、見ている、たのしい、二倍の内容、二倍の表現と、二倍の苦悩で、一句になる、写生から入って、写実に抜けると、そのあとは、川柳とは、命がけである、句が、われわれに、教えてくれる事、言葉を書き、事、言葉、書くこと、わが生涯に於ける、ただ一つの、美談である、句とは、所詮、あけく、はての、ものであ

(勝弘)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

初歩教室	一路集 (2句)	インスピレーションナビ (2句)	檸檬抄「ジレンマ」 (2句)	愛染帖 (2句)	水煙抄 (8句)	川柳塔 (8句)
「選ぶ」 (3句)	「内緒」	「迫る」	「山川」	「新西小」	「出島」	「蘭幸」
居谷	今井	磯部	大西	新家	西出	小島
真理子	万紗子	義雄	泰世	富美子	完司	楓楽
担当	選	選	選	選	選	選

1月号

檸檬抄「鮮やか」
一路集「重宝」「ロマン」
初歩教室「姫」

第24回 川柳塔まつり

とき 平成30年10月6日(土)
開場:午前11時 出句締切:正午 開会:午後1時
ホテル アウイーナ大阪 4階 金剛の間
〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
TEL 06-6772-1441

会費 2,000円 (記念品呈)
おはなし 「自嘲と自慢」 新家 完司
兼題 (各題2句・欠席投句拝辞)
「カラフル」 平井美智子 選
「配る」 鴨田 昭紀 選
「不思議」 川名 洋子 選
「芯」 水野 黒兔 選
「遙か」 大内 朝子 選
事前投句 「男と女」 小島 蘭幸 選

(懇親宴) 午後5時～7時
アウイーナ大阪 3階 葛城の間
会費 7,000円
主催 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17
花野ビル201号室
電話 06-6779-3490

本社 11月句会

7日(水) 午後1時から

兼題 「名前」「洗う」「ゆるい」
「伝える」「無茶」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「せ」 樋口由紀子 共選
高瀬 霜石
締切 10月20日 発表 10月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6779-3490 番
振替 〇〇九八〇四一五九八四七九番

定価 八百円 (送料83円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一八年(平成三十年)十月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL (06) 4800-3018

FAX (06) 4800-3028

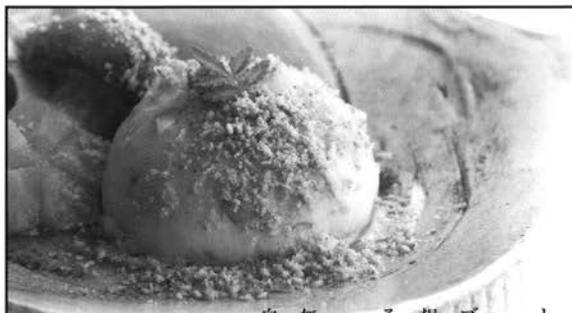
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>